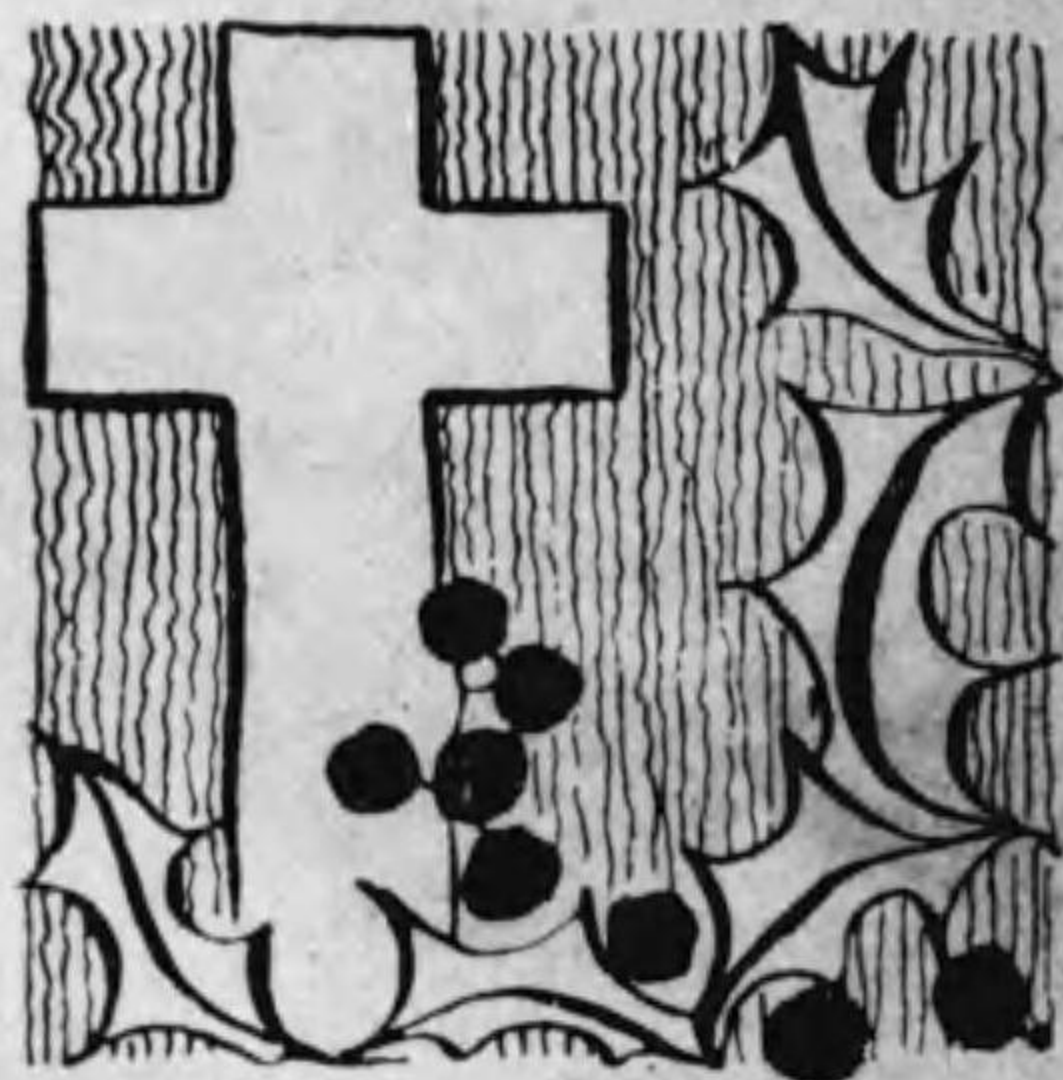


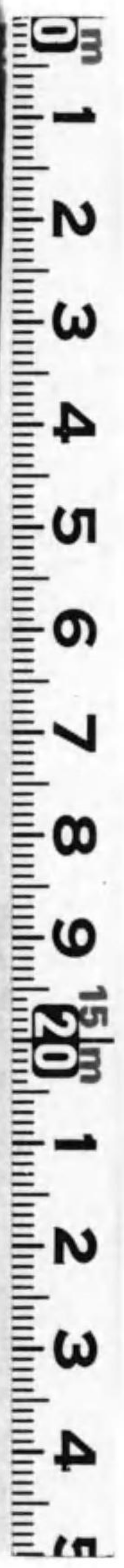
神による新生

著 彦 豊 川 登

325
318



關 下
行 發 館 書 音 福



始



特231
411

序

新しい日が来た、新しい日が。若芽は膨らみ、新緑は萌え出づる。黒土は青芽を吹き出し、雲雀は新しい巢を造る。雛は卵を破つて這ひ出で、新しい翼を持つて雛達は、空中に飛上る日を待つ。
新しい日が来た、新しい日が！東雲は白み、アウロラは天空に黄金の色を漂はす。さうだ！神の日は来たのだ、神の日は！我々が豫期しなかつた神の日は近づきつゝある。國際聯盟も不戰條約も、その日には輝きを失ひ、愛と高潔のみが榮譽を荷ふ。跛足は歩み、盲目者は見、沙漠にも葦葭が、茂り出づるであらう。ラヂオの波長を發見した者が、電線を引張らなくとも、何千哩離れて相語り合ふ神祕を持つ如く、神の新しい日に會つたものは、勞せずして相愛し、苦しまずして神の姿を拜し得るだらう。

おー！毛蟲も、いつの日にか、蝶々に早變りをする。醜き私の魂の毛蟲よ、神の新しい力によつて、蝶々に作り變へて貰へ！資本主義の毛蟲よ、暴力的共産主義の糞蟲よ、神に贖つて貰へ。そして、神の無限の愛と、宇宙藝術に溶かして貰ひ、新装の歡喜をもつて、花婚なるキリストを迎へるがよい。

何故にうなだるゝか。あゝ、淋しい魂よ！眼を上げて見よ！神は新しい姿をもて出御し給ふ。神の潮は良心の岸邊に、高く渦巻いてゐるのではないか。良心の水門を廣く押し開いて、神の高潮



を魂の奥深く溢れ入らせよ！ 神は新しい力であり、新しき蕾であり、新しい光明である。我はもう、唯物的な盲目の世界に飽き飽きした。神と永遠が、我々を目醒さなければ、人生の浪費にもう飽き飽きした。東洋と云はず、西洋と云はず、罪悪は人類を縛り、限り無き輪廻に我々は、生命の徒浪を嘗めてゐる。

その日にも、神はキリストを出現せしめて、愛の奥義を教へ、神の思召しを黙示し給ふた。その黙示は絶ゆることなく今日に迄及んでゐる。宇宙の底流れは矢張り愛なのだ。我儘な表面張力は醜い鬭争と、發狂と、泥酔にあつても、神は猶もそれを越えて、我々の罪を贖ひ給ふ。

来る年々に蕾が開き、青芽は吹き出で、冬枯れの姿は忘れられる。それにも似て、魂の新春は今や近づきつゝある。神の出現し給ふ日、罪悪は逃げ去り、我執はその立場を失ふ。おゝ神よ！ 旋風の中に、微風の中に、地震に、地這りに、新しき日の近づきつゝあることを示し給へ。世界はもう疲れてゐる。罪悪に眞の快樂はない。私は、至高の快樂を求めざる爲に、神の完全を慕ふ。最高の快樂は十字架の苦痛に一致する。神の快樂に酔へよ、日本の若き光の子よ！ 神に酔ふ者は、十字架の上にも舞踏する。凡ての富に勝つて、神の貧乏は私に幸福を約束する。明日食ふべき食物が無くとも、神は鳥の嘴にパンをくわへさせて、ケリテの邊りに迄それを運び給ふ。永遠の奇蹟よ！ 愛よ！ 魂の噴火口に新生が爆發する。その爆發に旋風は捲き起り、雷は閃く。あゝ、私は感ずる。神の聲音は、富士の山に觸れ、日本アルプスの彼方に聞える。神は日本に近づき給ふ！ 眼を醒せ！

日本の若人よ、血生臭き、革命の噂の前に、神聖なる神の出現を謹んで拜せよ！

あゝ、東雲は白み、雲雀は曙を告げる！ 待あぐんだ、第三の黎明は我々に近づきつゝある。機械文明を後にして、我々は宇宙の大殿堂に宇宙の神を拜する日が來た。そこには階級の憎惡を離れ、民族の皮膚の色を忘れ、貧しきも、醜きも、不具者も、死者も、みな同じ愛の神を拜する時を待つ。

最徹者に現れ給ふ神は、土くれの中に生命を秘め、野邊の雑草に新生の喜びの歌を歌はしめ給ふ。神の出御だ、出御だ！ 私に頭をうなだれ、黎明とともに、アウロラの閃光をもつて、出御し給

ふ慈愛の神を默禮の中に迎へる。民衆よ、踊り出して神の出御を拜さうではないか。然し、その日に至聖者は我々の父であり、我々はその子であることを發見しよう。福音を信ぜよ。それは暴力にやらざる革命であり、愛と慈愛による新社會の出現を意味する。私はこの新しき超越力が、日本の上に投げかけられてゐることを深く信ずる。高壓線に觸れた者は、衝動を感じねばならぬ。神の高壓線が、日本の上にぶら下つてゐる。世界は日本から目醒めるのだ。さらば、日本の魂よ！ まづ目を醒して、世界の民衆を呼び醒ます爲に顔を洗つて來い！

神の出御だ！ 出御だ！

一九二九・六・二六・一年の放浪の後

賀川 豊彦

攝津武庫川のほとりにて

著者より讀者へ

この書は、「神による解放」の姉妹篇で、日本に神の國運動を徹底させる爲に、綴られたものであります。之は私が、滿洲と北九州で話した講演を、黒田四郎氏と吉本健子姉が筆記されたものであります。二氏の助力なくしてこの書は出版することが出来ませんでした。茲に更めて二氏に、私は感謝の意を表したいと思ひます。この書が讀まれて、更に信仰に進まんとする同志諸君、また、信仰に就て疑問のある方々は、御遠慮なく私宛に手紙を送つて下さい。少し暇がかつても、必ず御返事をいたします。私は眼病で自分が書けなくとも、妻や友人に代筆して貰つて、必ず返事を書くつもりです。今や、精神運動の同志は相結束する時ですから、共鳴する者は遠慮せず同志として結束しようぢやありませんか。

この書は、下關の福音書館が全く營利を離れ、殆ど勞力を無視して出版の犠牲を拂はれたのであります。私もその義舉に感じて神の國運動の爲にこの書を獻げます。讀んで御感じになればすぐ友人に廻して、神の國運動の精神を徹底させて下さい。

私の住所は、東京市本所區松倉町二丁目、大阪市此花區四貫島大通三丁目、神戸市吾妻通り五丁目、兵庫縣武庫郡瓦木村農民福音學校内、何處でもよいです。御遠慮なく手紙を下さい。

目次

第一章 神による新生.....一
 飛行機文明と宗教——宗教は生きる工夫である——良心宗教の確立——人生の位取——見ずして信する者は幸だ——宇宙唯一の神——天地に於る再生力の發見——人間以上の力——何故神は苦痛を作つたか？——死の意味——罪と迷と救——神は放蕩息子の父である——神は愛である.....一五

第二章 神と世界苦.....二五
 神と生存競争——不思議なる自然の工夫——最小限度の苦痛——宇宙に於る愛の開展——苦痛の神祕的意義——生命藝術としての苦痛——世界苦を救ひ給ふ神.....四三

第三章 神とキリスト.....四三
 キリストと兒童への尊敬——キリストと女への尊敬——愛の事實そのもの——キリスト愛の五方面——生理的救主キリスト——キリストの奇蹟——心理的救主キリスト——贖主キリスト——神の啓示者——我儘の權詰とキリスト——道德の廢頹とキリスト——三つの反キリスト精神——神よりの手紙.....四三

第四章 神と十字架.....六五
 十字架を重んずる理由——神の内容と十字架——神の犠牲としての十字架——神の愛と十字架——贖罪の意識運動.....六五

第五章 神と靈魂.....七五
 靈魂の力——靈魂力の勝利——靈魂の實在——環境を打破る力——物と靈魂の關係.....七五

飛行機が飛んでゐる時代に、宗教で飛行機が説明出来るかと云ふ人が、相當にあらう。けれども、不思議に、飛行機が發明せられ、潜水水雷艇が海の底を走るが、人間の精神はそれほどよくなつてゐない。自殺する人は相變らず多く、飛行機の數は増しても、首吊る人間は殖えてゐる。日本では一年間に約一萬三千人（昭和二年一萬二千八百四十五人）が、猫いらすを飲んだり、首を縊つて死ぬ。それもごく年の若い人に多く、男は大抵十九才位から三十五才まで、女は二十四才位から四十

飛行機文明と宗教

人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過去に過ぎ、視よ新しくなりたり

(新約聖書コリント後書五章十七節)

神による新生

賀川豊彦

第六章 神と祈……………九二

神に會ふ道——祈と成長——聖書に顯れし祈——主の祈——日常生活と祈——試練と祈——祈の自由——「キリストの名によりて」——祈の體驗

第七章 神と聖書……………一〇七

聖書之力——聖書の感化——五錢の聖書——人生讀本としての聖書

第八章 神と良心……………一〇六

人生のラザオコンパス——我儘と迷路——傾ける大地——罪惡の本質——使命に生きよ——神の聲を理解する法——神への藝術としての良心——動機と出發點——罪の價は死である——良心に映る神——良心の膿を絞り給ふ神——神による新道德

第九章 神と生活……………一〇〇

宗教の實現——神と勞動——生活即宗教——十字架の七言——苦難を突破する心——愛の歴史的發展——聖愛即キリスト教——性愛の淨化——神による家庭の聖化——愛による社會單位

第十章 神と新社會……………一〇五

神より見たる歴史——不思議なる民族——神への反逆と亡國——イエスと神の國運動——迫害の歴史——愛と忍耐との勝利——歴史は唯物的でない——神と自由と文化——逆境と文化——神と貧乏と無産者——人間の災厄と人間の責任——貧乏の道德的原因——我儘文明と無産者の出現——愛による無産者の解放——金と物質によらざる經濟——神を基礎とする新社會

目次終

才位迄の間に死ぬ。セクスピアは、「弱き者よ、汝の名は女なり」と云つたから、私は定めし女は弱いから多く死ぬと思つてゐた處が、僅かに自殺者全體の三分の一しか死なない。(昭和二年男子自殺者七千九百十二人、女子自殺者四千九百三十三人) 女が二十四位で死ぬのは合理的である。二十四才迄は結婚する希望があるから生きてゐるが、婚期が過ぎると死にたくなる。いくら飛行機が空を飛び廻り、潜航艇が水中を走り廻るやうになつても、人は矢張りさびしいのである。どうもやりきれないと思ふ。斯ういつた時に、宗教が必要ではないだらうか。

宗教は生きる工夫である

宗教は即ち生きる工夫である。「鯛の頭も信心から」といふから、何でも信じたらいゝか？と云ふに、さうではない。そこで宗教は、或迷信を判別する必要がある。その區別は、魂の奥底に持つてゐる良心を活かすか、殺すかによる。

凡ての宗教運動で、良心の働きを持たないものは迷信である。だから昔から、水や川、山や太陽を拜むものは迷信である。私も幼少の頃には、おばあさんがしてゐたやうに太陽を拜んだものである。太陽を拜むことはランプを拜んで、「電気燈さん頼みます」といふのと同じである。之を自然宗教といふ。次に所謂、病氣を治して貰ふといふ生理宗教がある。病氣を治してくれるといふだけ

で信心を始める。それ迄は宗教を迷信だと云つてゐた人が、病氣になると急に宗教は必要だといひ出し、今迄宗教を馬鹿にしてゐた人が、天理教を頼んで来いといふやうになる。

或キリスト教の牧師の家へ、真夜中に或縣の警察部の自動車が出来て 巡査が降りてきた。「何ですか」と訊くと、警察部長の奥様が、睡眠薬を間違へて多く呑みすぎたので、醫者は望みがないといふ。一そ駄目なら何か一つ宗教を頼まうといふことになつたが、天理教へも行けず、大本教も頼むわけに行かないし、耶蘇へ行けといふ譯で頼みに来たんだといふ。牧師は、行つて祈つてあげた處が不思議に治つた。それで警察部長も巡査も宗教はいゝものだといつたといふ。斯ういふ人が折々ある。病氣になると、さあ心配し出して、信仰につき問答を始める。そして何處その神様を頼んで来いと多くの人は考へる。之を生理宗教といふ。

もう少し進んだものが社會宗教である。社會宗教で最も悪いのは徴兵除けの信心である。こんどは徴兵除けになるやうに、籤のがれるやうに、また或者は運がよくなるやうにと頼みに行く。恵比須さんや大黒さんの賽銭箱に壹圓放り込んで、今年壹萬圓儲かりますやうにと頼み込む。之を取引信心といふ。それはまだいゝとして、専門専門の神様がある。船頭には船頭の神様があつて、住吉や金比羅さんを拜みに行く。泥棒には泥棒専門の神様がある。東京本所の同向院には、鼠小僧次郎吉の墓があつて、四角形のもが三角形になつてゐる。その墓は三度取換へたといふことである。

目迄来てゐるが、其處で止つてゐるから、私は佛教でなく耶蘇教を擇んだのである。
我々は頂上に登る必要がある。その良心を持たないと天地の神はわからない。恰度顕微鏡なしに細菌が見えないと同じやうに、或ひは星を見るのに望遠鏡を覗くやうに、天地の神の力を發見しようと思ふなら、眼鏡を持たなければわからぬ。即ちこの眼ではなしに、心眼を開かなければ判らない。實物の神を見せてくれ、神を見せてくれたら信じてやる、といふ人があるけれど、眞の宗教は心をもつて見なければならぬ。その心の眼は良心である。「心の清きものは幸なり、その人は神を見ることを得なければなり。」(新約聖書マタイ傳五章八節)
扱、さうした我々の心が決まれば何が見えるか？ まづ我々は心で見ることから心が見える。心は心に通ずる。物の奥に心がある。機械の奥に不思議な仕掛がある。出鱈目と見える奥に不思議なる世界があることが判つてくる。

人間は妙なもので、苦情が多い。「賀川さん、さういふけれど、どうも判らぬ事が澤山ある。神があるのに何故人間はこんなに苦しむか。なぜ世界に生存競争があるか。何故狼が羊を食ふか。何故悲しむか、なぜこんなに不完全なのだ。何故醜いのか」といふやうに苦情を云へば限りがない。けれど斯ういふ苦情に對し注意しなければならぬことは、我々の位取りである。

人生の位取り

一體どの位取りで見えるか。我々は世界全體をひつくるめて大きな形で見えるか、または部分的に見るか。全體から見ると見當が付くが、井の中の蛙のやうに狭い處を見てゐては判るものではない。イツツ物語の盲者のやうに、數人集つて象といふものに定義を下した。或者は象の足だけ觸つて柱だといひ、或ものは尻尾だけ觸つてみて鞭のやうだといひ、耳だけ觸つた人間は象は板だといひ、或ものは胴をさわつて壁のやうなものだ、牙に觸つた者はいや象は刀に似てゐると云つて、自分の立場から勝手な熱を吹いた。人間が生存競争に訴へたり、悲しみや苦しみに就て訴へてみるのは、この盲者の話と似てゐる。全體を見てゐない。心眼を開いてみると宇宙はそんなに悪い處ではなし。この全體を見る眼は、外側に向くと判らないが、内側に向けるとわかる。即ち心と云ふものをもつて、宇宙全體を見直すと判る。恰も我々が、光をぼんやり見るとわからないが、光を焦點に集めると燃え出すやうなものである。それにはレンズが要る。同様に宇宙を見るのに心が要る。その心にひびが入つてゐたり、曇つてゐたりすると、宇宙がわからぬ。だから或人は「俺には神がわからぬ。神なんか無い」と云ふが、神がないのでなく、さういふ人の心が充分研えてゐないのである。心が研えてゐると神はよくわかる。

ではどんな神だ？ それは目には見えない。此處に一冊の本を落とす。落ちたことは信ずる。では落ちたが、我々は本を引張つた力を見たらうか？ 針金で引張つたか、糸でもついてゐたかといふに、さうではない。あれは引力である。それに就て誰も疑はない。見えないけれどあることはある。宇宙の神も見えなくとも、あることはある。見えないから無いと云ふのは間違である。神は力である。その力は眼には見えないが、心で解る。物が動いたのを見ると心でわかる。で、宇宙に神があるといふことは、宇宙の力そのものが矢張り人間以上であるといふことである。それを我々は神といふ。斯ういつても判らない顔をして「頼りないな、あるやら無いやら判らんや。實物を見せてくれ」と近頃の唯物論者はいふ。しかし見なくとも信じてゐる人は多い。自分の眼で見ないことはないが、誰でも胃袋は持つてゐるらしい。

岡山縣の市會議員で、選舉違反の爲監獄に這入つた人が氣狂になつた。その人間が私の處に来て妙な事を云ひ出した。その人は、監獄にゐる時麻酔薬をかけられ、眠つてゐる間に肛門から胃袋を盗まれたといふ。そしてそれは不老不死の薬に混ぜて賣られてしまつた。それが不服で請願書を内務大臣に出したが、自分に胃袋があるか無いか鑑定してくれと云つて來た。斯ういふ事は馬鹿らしい事であるが、疑へば疑ひ得る。

見ずして信ずる者は幸だ

「見ずして信ずる者は幸なり。」我々は見なくとも在ることを信ずる。宇宙には見えざる生命がある。生きてゐることは事實である。別に生命について疑つてゐない。自分が生きてゐるか生きてゐないかを人に尋ねる人があらうか。生きてゐることは事實である。そんなら生きてゐるのは自分の力によるか、自分以外の力によるか？ 之は自分の力だけでなしに、自分以上の力で生きてゐる。我々が自分以上の力で生きてゐると思つたら間違はない。我々が生きてゐるのは我々の力以上である。夜寝る時、電燈のスイッチをひねつて寝るが、心臓のスイッチをひねつて寝る人はない。我々が寝てゐるが、心臓はどき／＼と四十二打ち、血は十三秒で身體中を廻つて來る。その速度は二百五十里走つてゐる。之を一々人間がやるなら大變なことである。自分の身體のポンプを押すだけで何も出来ない。この外に食物を消化して、心臓の血を廻し、毒を吐かしたりして忙しい。之はみな人間以上の力である。この力を天地の神といふ。哲學的に云ふなら超越の力である。我々が生きてゐるのは自分の力ではなく、神それ自身の力である。「あたり前だ、それは自然だ」と云ふが、どの自然だらうか。その不思議なる人間以上の自然以上の力が、我々にとつて不思議である。その力が人間を通して働く時、何とも云へぬ力となつて現れてくる。それを心力といふ。

この心力が智慧となり、發明となり、感情となり、藝術となつて現れ、また意志となる時に、力となつて現れる。それを心力といひ、それを宗教といふ。わかるものかといふ人達には判らない。人間は焼いたら灰にちがひない。十八貫の男も灰にすれば肥料代にしかならない。獨逸の學者は人間の身體は十四圓九十錢にしかならないと云ふ。脂肪が四圓五十錢、骨がカルシウムで四圓二十錢、筋肉が蛋白質から出来てゐて、窒素肥料に出来るから約四圓五十錢、鐵が五厘しか入つてゐない。その他燐などが入つてゐるが、さういふわけで、十八貫の男も生ける肥料である。然し、肥料だから何でもないと云つて、飲む、博奕を打つ、放蕩もする、女郎買ひもするといふのではない。矢張り獨逸の學者が人間の模型を作つた處が、人間の身體は細胞が二百兆よらなければ出来ないが、心臓も腎臓も全部作つて二億圓かゝる。灰になるものでも、模型を作るには二億圓かゝる。之は生命抜ききの二億圓である。どんな素寒貧の人間でも二億圓はかゝつてゐる。さう思ふと、梅毒で、鼻を落すことは勿體ない。酔拂ふと二億圓が惜しい。そこで我々は身體を大事にする氣が起る。即ちパウロの言に、「汝らは生ける神の宮にして聖靈汝のうちに住む」(新約聖書コリント前書三章十六節)と云つてゐるが、我々は單なる土で出来た處の肥料の結晶とはちがふ。宇宙に充ちる不思議な大靈が、我々の中に籠つてゐる。神が乗り移つてゐる。それは良心が鋭くなればなる程はつきりする。電氣のマグネットのやうに。マグネットが来ないと電氣が動かない。熱がエレキになるかならぬか

は、電氣が通るか通らないかによる。

「神があるかないかわからぬ。我々は全然神に就ての考を持たない」といふ人があるが、それが一旦我々の心に力が入つて来ると、何でもはつきり判つて来る。だから宗教といふのは、神の力を我々の良心に宿す方法である。さういふ時の神は、宇宙萬物凡ゆるものゝ力である。宇宙絶對に廣がる力。宇宙の意志、即ち神で、それは一つしかない。

宇宙唯一の神

何故一つしかないと判るか？ 八百萬の神と云ふではないか。斯ういふ人があるけれど、人間は人間一人一人を神として、ばらばらに考へるならいくらでもあるが、宇宙の心は一つ、私といふもの心は一つ、その心といふものに天地の神が映る。心は一つしかない。もし心が二つあるとすれば、「賀川豊彦」と呼ばれた時に、「はい」、「はい」と二人分答へなければならぬ。さうなると、宇宙は二つになり、宇宙の私は二つになり、何でも二重に云はなければならぬ。けれど宇宙は一つで、引力や電氣の法則、氣流の法則などは何千萬の法としてあるが、宇宙にみな纏つてゐる。だから宇宙の心は一つである。宇宙は一元しかない。之を一元論といふ。その一元論は理屈でいふのではなく、心が一つしかないから、宇宙の心も一つである。それが、心が透き徹つて来るとはつきりするが、

心が二つ三つになると、宇宙も二つ三つあるやうに思ふ。
人間の迷から、神を多く作らうではないかと云ふなら、あちらの鎮守、こちらの社といふ風になる。分け登る麓の道は多かれど、同じ高嶺の月を見るらんで、何でもいゝといふ風になる。

宇宙心力の發見

また他面には、やゝ天地の神のことが判つてきたが、どうも合點が行かぬことがある。そんな神があつた處で仕方がない、役に立たぬと云ふ人がある。けれどそれはちがふ。この宇宙の大きな心といふものは、即ち天地の心は、宇宙獨立無二の神である。この獨立無二の神は單にあるばかりでなく、この神は天地を不思議な方向に創り進歩させていらつしやる。それが我々の心にわかつて來る。人間の心といふのは、元來白紙の上に創造する力を持つてゐる。創る力、發明の力、發見する力、本を書く力、繪を描く力、音譜をかく力、大工する力を持つ。さういふ力を持つてゐるものを心といふのである。が、天地の心もその力を持つてゐる。この天地の心を人間に仕掛けると、所謂心力が發生する。この心力を仕掛けることは非常な大發見である。二十世紀の大發見の中、これ程大きな發見はない。我々はあまりこの力を用ひてゐない。我々は舊い時代に風の力を用ひて帆をかけ、水力を用ひて水車を廻し、氣力を用ひて汽車を走らせ、電力を用ひて電車を動かした。けれど

新しき時代は心力を用ひて、もう少し不思議な、或ひは宇宙全體につき、不思議な力を持つかも知れない。電力の奥に心力を用ひて——精神力を用ひて土星につき、火星につき、或ひは木星や金星について、もう少し知ることが出来ると思ふ。その發見が二十世紀の發見でなければならぬと云つてゐる人がある。

無線電信の檢波器を發明したサー・オリヴ・ロッヂはこの話ばかりしてゐる。電氣についての發明は大抵見究めがついた。こんどは心力により發見することが之からの發見である。宗教はさういふ力を持つてゐる。十九世紀の末頃から催眠術で病氣が治ると云ひ出した。馬鹿など云ふかも知れないが、今日はそれを嘘だといふ人はない。治るのである。時によると熱湯の中に手を入れても死なない。一九二九年五月二日の新聞によると、二百七十度の海地獄に飛込んで死んだ人があつた。ある人には、催眠術によつて熱湯の中に手を入れても爛れない。それは心力である。それによつてそれ以上の事が發明される。それをロッヂ博士は云つてゐるけれど、さういふ方面だけでない。「私はさういふ力を持ちたいが、元氣ありません。年も寄つたし、駄目です」と悲觀してゐる人があつた。また或人は病氣であり、或人は精神に故障が生じてゐる。ある人は煩悶してゐる。ある人はまた道徳的に失敗してゐる。人に云へない罪を作つてゐる。

天地に於る再生力の發見

斯ういふ場合に神は我々を見棄てるだらうか？ 神があるなら一つ救つて貰ひたいものだといふが、不思議に宇宙には神の力が充ち溢れてゐて、病氣でも治る作用がある。精神病のものでも癒される。煩悶も解決し、罪も赦される。即ち人間には不思議に再生力がある。單に宇宙に創造力があるのみならず、更に再生力がある。宗教とはこの再生力を教へる工夫である。怪我したものが治り、血が出て治る、肺病でも治る。病氣もなほる。

私は随分今日迄病氣した。中學二年の時肺炎が悪くて學校を休み、十七頃から血を咯いた。十九歳の時劇しくなり、二十歳の時亦一年位休んだ。そして四年も五年も熱が下らなかつた。かうして二十歳頃には九貫八百匁しかなかつた身體が、今では十七貫ある。だから肺病になつたからと云つて心配する必要はない。病氣は「氣」である。「氣」が治れば「病」の方が治つて来る。「私は肺病だぞ、治らんぞ」と思つて居れば治らない。私はそれから、糖尿病にもなつたし、腎臓も患ひ、肋膜炎も、結核性痔瘻もして一週間固形物を攝れなかつた。心臓もやるし、トラホームも貧民窟でうつつてから、鱗状形角膜離脱をやつた。その時醫者は治らぬと云つたが、私は治ると思つてゐたらその通りになつた。蓄膿症もやつたし、私の自動車と電車が衝突した爲脊髄も患つた。手も折れたこと

がある。犬も歩けば棒にあたるで、動くから病氣になる。奥丹後の震災の時綾部へ行つて中耳炎も病んだ。けれど病氣は「氣」である。何冀！と思へば治る。それが宗教である。之だけ病氣になつても私は元氣である。即ち氣を樂にしてゐるから平氣である。死線を越えてゐるのだから何も無い。一度死んでゐるのだから後は儲けものである。今私が生きてゐるのは、幽霊ばかりが残つてゐるのである。やきもきしないで、神に任せるから自由にしてくれ、と云ふ氣なら治る。肺病は内側の怪我である。外側を怪我すると血が出て治る。治らぬと思ふから治らない。我々は病氣に勝たねばならぬ。何冀！天の神がついてゐるのだと思ふ、それが信仰である。病氣は醫者の藥が治すのではない。天地の神の再生力が、人間を通して働くのを助けるのが、醫者である。醫者は産婆であり、助手である。我々は神が治してくれるのを待つてゐる。精神もさうである。發狂は治らぬといふ。けれど發狂といふものでも氣を靜かにしてゐると治る。我々が治らぬといふものでも治る。痔瘻は遺傳するけれど、氣狂すぢはそんなに劇しく遺傳しない。氣狂は劣性に遺傳する。そして四人子供があれば四分の一しか氣狂にならない。之は四五代すれば消える。

人間以上の力

斯ういつたやうに、天地は不思議に作られてある。だから天地はそんなに無茶に作つてない。そ

れを人間が無茶苦茶にしてしまふのである。

どうして無茶にするか。第一に梅毒やアルコールで、無茶苦茶にしたのである。梅毒にかゝると發狂する。酒を飲むとすぐ發狂する。梅毒とアルコールから離れるのでなければ、この方の病氣は治らぬ。低能の子が生れるのは大部分は酒の爲、癲癇病の大部分も酒のためである。自分はいゝ氣になつて浮かれてゐるが、子供や孫まで何も病氣にかける必要はない。私は貧民窟に永くゐたから、子供の癲癇病をいくらでも取扱つて知つてゐる。親爺とか祖父の酒飲みの子は必ず悪い影響を受けてゐる。アルコール中毒になると、酒亂になる。私は酒亂の人間に暴れられて前歯を折られた。監獄から出て来た或人が、置いてくれる人がないから、私の處に、置いてくれといつて来た。私はその人を置いてあげた。飲まなかつたのは四ヶ月で、小使ひを呉れと云ひ出した。しまひにその小使ひを月給にしてくれと云ひ出した。私がそれは出来ないといふと、亂暴をして私を片輪にしたのである。それは酒亂の人間である。酒の發狂を酒亂といふが、之は實に日本に多い。

大阪の醫科大學の或教授の父が酒亂であつた。酒亂の父は、母を苛め、弟を苛めて仕方がなかつた。或日、母をあまり苛め過ぎて締め殺した。そして絞殺の廉で姫路の裁判所に這入つた。その間にその息子である教授は倉の中で首つって死んだ。斯ういふ話は随分多い。

之は神の責任ではなく、人間の責任である。氣狂人間の責任である。さういふ者でも天地の神は、人間の責任を少くする爲に努力して下さる。神經病はおちいさんにさういふ人があつても、孫の時代に薄くなるものである。幸天地に治す力がある。

何故神は苦痛を作つたか？

或ひは道徳上の煩悶にしてもさうである。我々は之を治す力を宇宙に發見する。苦痛についても同じことが云へる。或人は、神は人間を下手に作つたものだ、もう少し何故上等に作らなかつたかと云ふ。苦痛は、白痴と發狂者と酒飲みには感じない。私はIといふ、塵箱の中から拾つて来た子供を二年以上世話したことがある。葬式人夫の出前に使はれてゐたが、「歸る家がおまへんさかい、此處で寐とりまんね」と云つて、寒い塵箱の中にあるのを拾つて来た子である。この子は痛くないことを自慢にしてゐた。私がアメリカへ行く迄、その子は痛いといふことがなかつた。私は心理學の實驗にと思つて、足の裏に針を刺してみた。がIは、痛くない、俺は不死身ぢやと云つてゐたが、實はその子は少し足らなかつたのである。

もう一つは發狂である。發狂してゐる者は痛くない。自分の身體に火をつけて焼いて笑つてゐる。だから精神病院では火の傍には必ず鐵の金網で圍つてある。低能になつて来ると、顔など少し位どうかしても痛くない。娼妓の顔面は痛點が少くなつてゐる。デューボ・レーモンドの、苦痛を

測定計で研究した結果を、イタリー、フェリーと云ふ犯罪學者が發表してゐる。娼妓九十餘人の顔の痛さを調べた處が、娼妓の顔は三年もすれば、痛點が減退して、鐵面皮になる。それはもう氣が狂つてゐるからだといふことが、フェリーの「女人犯罪學」といふ書の中に書いてある。だから顔の痛くない人は、用心しなければならぬ。

第三の人は酒飲みである。私の知つてゐる人は、小指を嚙切つて人にやつてしまつた。その人にはそれが自慢で、兩方の小指ともやつて、まつた。また吾妻といふ男は酔拂ふと藝當する。一升徳利を額で割るが、額には傷がつかない。そして痛くない。それは酒といふ麻醉薬にかゝつてゐるからである。血が出ても痛くない。だから低能、發狂、酔拂ひには痛くない。痛くないことがある方が有難いのである。

癩病人には痛いといふことがない。癩病人は神経が太くなるから痛く感じないし、また手など曲らなくなる。癩病人は、自分の足が燃えてゐても人事のやうに思つてゐる。それは苦痛の神経がにぶれてゐるからである。斯う考へて來ると、苦痛といふものも神の賜物である。苦痛がないやうなものになりたければ、下等動物に作つて貰へばいゝ。上等動物には苦痛がある。フアブिकासレムニカスと云つて、猫などには、このフアブिकासレムニカスが不完全であるから、痛い處が急速には解らない。それが人間には判る。人間などでもどうかすると、痛くない時がある。脊中などは痛

い感じが鈍いが、それでも痛いといふことはわかる。

天地の神は不思議に人間をよく作つてある。そして、神は人間の苦痛を減らすやうにしてある。人間の身體にはアドリナリンといふ腺があつて、痛いといふ時に、アドリナリンの腺から無數に人間の苦痛が鈍くなるやうな注射をしてくれる。ハーバート大學のカノン博士は之を發見した。之を人間の身體に注射すると治る。我々は氣付かないで居るが、斯ういふ仕掛が、人間の身體の中にしてある。我々はそれに對し別に御禮も何も云はないで放つてあるが、研究すると實に不思議なものである。

死の意味

或ひはまた人間には死ぬといふことがある。死ぬのは厭だ、死なぬ人間を作らうとしたがる。そして若し、梅毒患者が死にたいと云つても死なないで、何百年も生きてゐたり、悪い人間がみな残つてゐると、世の中は實に困る。

死の奥には出生がある。不思議に死の出現は、不思議なる結婚組織と關係がある。脚氣に強い人とチブスに強い人が結婚し、コレラに強い人と赤痢に強い人が結婚し、その間に出來た子供、脚氣とチブスに強い子と、コレラと赤痢に強い子が結婚すれば、チブスと脚氣とコレラと赤痢に強い

子が出来る。それは結婚により出来た。それだから死の蔭には誕生がある。アミーバは何年も死なない。人間にもさういふ人間がある。おちいさんになつて、子供もあり孫まであるのに、自分も死にたくないと言ふ人間は勝手なものである。

では靈魂はどうか？天地には宇宙を維持するといふ法がある。法とは秩序である。それは宇宙を維持する力である。宇宙は決して無くなるものではない。そしてその中に變らざるものがある。人間の中には死もあるが、死なない法もある。それが靈魂不滅である。人間が生れたのは、宇宙の法により生れた。だから宇宙の法によれば死なない。おちいさんも死んだ、お父さんも死んだと云つて悲観するが、それはフィルムのやうに變化だけを見てゐるので、それはまだ第一幕の終で、巻き込んであつて、明日もう一度寫すことが出来る。フィルムを解くと見える。それは無いのでない、藏ひ込んであるのだから安心してよい。

我々は昨日は無いと思ふだらうか。それは「記憶」の中に藏ひ込んである。過去はあつたのだ。過去は記憶といふ中にしまひ込んである。同様に神は我々をしまひ込んで下さるのだ。即ち死とは一つの變化である。斯ういふ氣持で居ればいゝものを「あゝ、戀人と死に別れた」と云つて悲観してゐるが、フィルムを開けたら、何も悲観する必要がない。さういふ部分を宗教といふのである。殊に、罪惡について心配した場合にさうである。

罪と迷と救

人間は我儘である。神が斯うした方がいゝと云つても、私は私の道を行くのだと云ふ。そして二十三度半宛傾いた生活をしてゐる。ハンドルが少しカーブしてゐる許りに、それがだん／＼曲つてゐて結局同じ處に居て、進歩がない。「私は世間の人間と少し變つてゐるぞ、俺は悪人ぢやないぞ、善人ぢやないぞ、少し變つてゐるだけだ、それを迷ひといふ。人間は迷つてゐる。人間は廣い處で眼を覆つて歩かすと、大抵右まきに廻つてもとの處に歸つて来る。覆ひをとつて初めて、俺は二町も歩いたのに同じ處に居たのか、といふ譯である。それを人は狸や狐に化されたといふ。それを心配事があつて頭に何かこびり付いてゐると、いくら考へても迷つて来る。之は我々の煩悶した時に起つて来る事實である。罪惡とはそれを云ふ。多くの罪惡は我々の迷ひから来る。神を中心とせず、天地の神がはつきりしなければ、この迷ひは離れない。或ひは博奕を打つとか、女を買ふとか、人を殺すとか、曲つたことをしてみたり、姦通したりする。日本では女郎買ひは女郎買ひで、姦通は姦通としてゐるが、それは間違ひである。金で女の貞操をみだすのを姦通といふ。「ひどいなア、耶蘇はひど過ぎる」と云ふけれど、一人の妻以外のものをみだすなら、それは姦通である。(新約聖書マタイ傳第五章二十七節)

神は放蕩息子の子である

けれど我々は、凡ての今日の罪惡は、即ち人を殺すこと、姦通すること、姦むこと、嘘を云ふこと、貪ること、凡てが自己中心である。そしてその反對は愛である。人を愛せば殺すことは出来ぬ。可愛いから殺すといふ人はない。妻君を好きだけれど姦通するといふ人はない。可愛がつてゐるけれどと云つて、奪ふ人はない。つまり我儘が凡ての罪惡の原因である。さういふ我儘から發生する罪であつても、神は許して下さる。神は放蕩息子の子である。一度過つてゐてもゆるして下さる。それを最もよく現したのがキリスト教である。キリスト教とは魅りの宗教である。どんな我儘者でも、死んでしまつたものでも、もう一度生き返ることが出来る。膿で一杯になつた人間、人に云へない罪人でも許される。神が人間の中に働いてゐるからである。それを再生力といひ、魅りといふ。大抵の場合、多くの罪を犯す人はない。殺さなくとも憎いと思ふなら罪である。情慾があるから姦通する。情慾をもつて女を見た者は、姦通するのと同じである。泥棒する時も欲しいと思ふから間違が起る。嘘は胡麻化しからである。貪りは天のことを思はず、地のことを思ふから起るのである。斯ういふことから見れば完全な人間はこの世に居ない。が、さういふ者でも神は許し、作り變へて聖潔無垢な人間にして下さる。

神は愛である

即ち天地の神には再生力があり、魅る力がある。魅りの力ある人間は、肉體的に生きてゐる。病氣は治り、死の場合にも靈魂は維持せられ、子供は生れ、精神病も癒される。道徳的失敗者も救はれる。宇宙には斯うした救の力がある。即ち、宗教とは單に神があることを信するのでなくして、神が人間を救ふ處の力である。救つてくれるのは愛があるからといふことを信するのである。だからキリストの弟子ヨハネは「神は愛なり」(新約聖書ヨハネ第一書第一章四節)と云つてゐる。この神の愛によつて、肉體的にも道徳的にも、精神的にも魅る。宇宙の神は愛である。我々は愛なる神を信する。この信仰が迷信であらうか。この力を信すると不景氣知らずである。「俺は貧乏だ、首を吊らう、女房も序に連れて行かう」すると女も「ちやあ子供も連れて行きますせう」と云つて親子心中をする。一九二七年、親子心中は二百四十組を越え、合計六百名が死んだ。そんなに生命が要らないのなら私はいつでも貰はう。死ぬ氣でやるなら何でも出来ないことはない。死ぬ位の元氣で棄身になつてやるなら、どんな事でも出来る。死んだのだと思へば、着てゐる着物も儲けもの、家も儲けものだ、さう思つて夜も晝も勉強すれば、それが發明力となる。死んだ筈だからやれるのは儲けものである。この信仰があれば、神が愛だといふことが解り、神が愛だといふことが解れば、どんなに困つて

ゐても、片輪であつても大丈夫である。之は我々のキリスト教の本質である。キリスト教が魅へるを云ひ、神の愛を説き、神が親だといふのである。この信仰のない人はぶち壊しをやる。人間は灰だから殺してしまへといふ人には、神は解らない。けれど神は居る、神が救つてくれるのだといふ人には、宗教の力で内側に力を持つてやることが出来る。即ち信仰とは、前にも云つたやうに、神があるといふだけでなく、神が愛であることを信することである。どんな場合でも、困つた時でも、不景気でも、日本が少し位困つてゐても、南洋に行つても、神はお見棄てにはならない。

絶望するな。神がついてゐて下さるから、神の愛を信じてやり直せよ。天の親爺は太つ腹だ。絶望するな。私が信仰を説くのは、日本人が今信仰を持たなければならぬからだ。故島田三郎氏は死ぬ前に「儒教の天、キリスト教の神を信じなければ、日本は亂れる」と云つた。私は亂さないつもりである。亂さない爲に、私はキリスト教の神を傳へてゐるのだ。我々は更に進んで團結し、精神運動をして神の愛を實現しよう。聴くだけでなく行はなければならぬ。耳だけ天國へ行つて、魂は地獄へ行くのでなく、耳を天國へやると同時に、魂も天國へやるのでなければならぬ。

天の父、

我々は斯く迄、神が我々を可愛がつて下さることが解りませんでした。足らざる我々を生かして下さることを御禮申します。願くは我々にはつきりと神の愛を信ぜしめ、苦しみ悲しみを貫き、凡ゆる困難を貫いて前に進

むことを教へて下さい。今日日本の農村は憐み、小作人は小作争議に没頭し、都會も煩悶して居ります。この時に、神は愛であり、恵みの方であり、絶望が不必要であることを教へて下さい。多くの人が神を信じ、新しい神の運動が始まり、厭な空氣が日本から去つて、日本が高まり、かくして、支那と云はず、印度と云はず、アメリカと云はず、世界全體がよくなる爲に、我々を起たして下さい。我等の救主イエスによりて祈ります。

アーメン

第二章 神と世界苦

然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり。我らは知る、すべて造られたる者の今に至る迄共に嘆き、ともに苦しむことを。……自ら心のうちに嘆きて子とせられんことを、即ちおのが體の願はれん事を待つなり。(ロマ書八章二一―二三節)

神と生存競争

チャールス・ダアウ井ンの進化論のうちに説かれてゐる生存競争の學説は、弱者にとつては實に都合の悪い理論である。私はどうも腑に落ちぬので、少し専門的に研究してみた。種々の書物も読み、又アメリカのプリンス頓大學では、出来るだけ實驗室に立籠つて研究してみた。そして生

生存競争といふ事實は、決してダアウ井ンが云つてゐるやうな意味のものではないと云ふことを發見した。

ダアウ井ン説によると、生存競争は生物界を支配する絶對の事實で、そこには何の制限も目的もないと云ふことになる。然しよく研究してみると、その生存競争にも種々なる制限がある。空間的に、時間的にも、本能的にも制限が存してゐる。

生存競争とは、或人が考へてゐるやうに、強いものが無制限に弱いものを食ひ散らしてしまふと云ふやうな絶滅競争ではない。そこには深い調節がある。私は之を發見して餘りに恐怖を感じなくなつたのである。

大正十二年九月六日、憲兵の手にかゝつて殺された大杉榮君が、殺される前に突然訪れてきて、私の居る貧民窟から持つて歸つて譯したのが、ファアブルの「昆蟲記」であつた。私は大杉君に是非譯するやうにとすゝめた程その書物を愛讀してゐた。實はこれを讀む迄は、ファアブルがそれ程迄に偉大なる人物であると云ふことも、また生存競争の根柢に驚くべき調節が横つてゐる事もあまり知らなかつた。ある時ラゴスの著したファアブル傳をよみ、世界で最も進んだ昆蟲學者はファアブルであるといふことも知り、早速英譯の「昆蟲記」を買つてむさぼり讀んだのであつた。ダアウ井ンも彼を評して「ファアブル程に昆蟲の活ける觀察をした人は嘗てない」と云つてゐる。成程讀

んで私も驚嘆した。フランスのプロバンスの野原で、タルンチュラと云ふ蜘蛛を研究するために、十九年間に費したと云ふ。普通の學者であるならば、標本を作るために野原をお義理のやうに走り廻り、やつと二三匹捕へたならば、その後は室内に安座して、ナフタリンの薬の力で保存した乾物で研究する。然し、ファアブルは、かゝる限られた死物の標本を信用せず、生きた昆蟲の生きてゐる状態そのまゝを凝視しようとしたのである。

彼は蜘蛛が交尾した後、雌が雄を食ひ殺す恐ろしい習性を詳細に研究する爲に、十九年の長年月の間蜘蛛を見守つて過したのである。かゝる貴い心血を注いだ努力の結果として、十冊の昆蟲記が後世に残された。

生存競争の事實は確かにある。が、それは唯單なる混亂や、無茶苦茶な殺し合ひではなく、そこに秩序ある制限と道とのあることがはつきり解つて来る。不思議な區切が立てられてゐる。そしてこの事實を認めてゐたファアブルは、生命の奥に不思議な統一の力——神が存してゐることを斷定してゐる。實に生きた學問をした人は、着眼點が違ふと、つくづく感じさせられる。然るにダアウ井ンは、可成り局部的な研究をした結果、神がわからなくなり、不可知論に陥り、神をないとは云はないが、解らないと云つた。それで、多少學問でもした人は、ともすると半可通でダアウ井ンの説を金科玉條と大切がつて、ファアブルのやうな眞剣な研究者の云ふことに、耳を傾けやうとはし

なり。

不思議なる自然の工夫

然し、生命の真相を知る爲には、人の書いた本をすつかり捨て、自然の只中に飛込んで、宇宙に渦巻く生命そのものを見ねばならぬ。さうするならば、必ずや自然の中には、唯單なる強食弱肉ばかりでなく、高い宇宙の意志の力と、その深い意味ある活動にぶつつかるであらう。昆蟲のみならず、最も残酷なる動物である爬蟲類を研究しても、これは事實である。殊に、龍のやうな形をしたダイノサウルスを研究すると面白い。今日ニューヨークの博物館に陳列されてゐるが、長さ百五十四呎もあつて、腰の骨が鳥に似てゐる。そして大きな鯨のやうな身體のトカゲである。これは、プリンストン大學のスコット博士の助手ハッチャー氏が、アリゾナ沙漠で発見したものであつた。初めは木の化石と思つてゐると、また更に大きな臼のやうなものが竝んでゐるので、變に思つて調べてみると、身長百五十四呎もあるサウルス（とかげ）の脊骨であるのに氣がついた。とても立派なものである。この動物を研究してゐると、龍の一種で、腦は實に小さく、身體はべらぼうに大きいことが解つた。骨から云ふと鯨の四倍位あり、鯨の骨は水に浮くけれど、この動物の骨は水に浮かない。であまり大きい爲に、大男總身に智慧がまわり兼ねて、地上をのたうち廻つて、活潑な運

動はせず、近づいて來る動物だけを捕へて食つてゐたであらうと云ふことであつた。で、活ける洞窟と云ふ名稱をつけられるに至つた。即ちかゝる残酷な形をしてゐるものでも、それ相當の制限があつて、さ、無闇に食ひ荒し廻つたものでないことが解つたのである。

自然界に於て、凡てのものが皆食ひ合つてゐると云ふ譯ではない。空中へ飛んで逃れるもの、走り廻つて逃げ出すもの、水中へ姿をかくすもの、土中に潜むもの、甲羅を作り、そこに防禦の世界を持つもの等、食肉生活をするもの、外に五種類のものがある。で、動物中六分の一が食肉になつてゐるに過ぎない。凡ての生物が食ひ殺し合つてゐるのではない。自然は宇宙の苦痛を成るべく減せしめんとする努力の拂はれてゐる世界である。

例へば爬蟲類の世界を見る。成るべく苦痛を最少限度にしようとする働の加へられた跡が、歴然と残つてゐる。で、自然界は恐ろしい殺し合ひのみの世界でなく、非常にやさしい方面を持つてゐる。表面的に見て恐ろしいと考へられても、それは却つて愛の意志の表現である場合がある。例へば、一種類の生物だけが殖えて、世界中一杯になつても困るから、その種族が餘り殖えないやうに、これを食ひ減らすものが存在してゐる。餘り一つがはびこらぬやうに、警察官の役目を仰せ付かつてゐるのである。で、一方から云へば、食肉類は自然の警官であり、産兒制限實行者であるとも云ひ得る。

私はそのみならず昆虫の間に生存競争の輪が形成されてゐることを知るのである。Aの成虫はBの幼虫を食ひ、Bの幼虫はCの蛹を食ひ、Cの成虫はDの幼虫を食ひ、EFと順次につながつてゐる。A—B—C—D—E—F—Aと云ふ風に、各々が輪になつてもたれ合ひつゝ生存してゐることを思ふ。AがBに食はれることはめぐりめぐつて、Aの食物である、Fを育てることになつて、Aの食物を作り上げることにもなつてゐる。ハワードと云ふ昆虫學者は之を生存競争の輪と呼んでゐる。或ものは十八位で一つの輪を成してゐる。生物の世界に生存競争のあることは事實であるが、それは、それ程亂暴な無謀なものでなく、ある制限があり、區切が存し、共存共榮のための不思議な巧妙な工夫の一つであるやうに思はれる。地球の表面には動植物を通じて百萬以上の種類があるだらうが、その中の一種である昆虫だけでも四十萬種位ある。その昆虫が互に混雜せず、出来るだけ多く地球の表面に生存されるといふことは、並大抵のことであるまい。で、そこに多少の無理はあるけれども、表面に一緒に生活さすだけの大きな工夫として、人の想像を超えた事實として、生存競争が現れて來たものではあるまいか。「種があまり殖えると困るから競争するのだ」とデアウ井ンは云つたけれど、だんく研究してみると、種の増加は他から無理にされずとも、自分だけで制限されぬこともないことが解つた。即ち、男女の區別の生れたのもその爲である。食物が足りなければ雄が多く生れ、食物が多くなれば雌が多く生れると云つたやうに、自然界には、微妙な法則が

存してゐることを見逃してはならない。

私は生存競争の奥には、人間の測り知るべからざる神祕な鹽梅が存してゐるやうに思はれてならないのである。

最少限度の苦痛

更にまた自然界には、相互扶助のための競争があり、共存のための競争が存してゐる。クロボトキンの有名な「相互扶助論」の中に種々と説かれてゐるので、可成りこの點は知られてゐるであらう。例へば獅子が羊を食つて生活してゐるとする。若し獅子が無制限に羊を食つてしまふと、獅子は食ふべき羊が亡んで困ることになる。一定数の獅子が困らぬ爲には、一定数の羊が居なければならぬ。一匹の獅子が楽しく生きてゆくために、百匹の羊を必要とするならば、いつも百匹の羊を残しておかねばならないことになる。ところで、實際はその通り實行されてゐて、獅子は羊をその制限の範囲で食ひ、また羊の生殖増加率は、獅子の増加率より早い。實に不思議な本能を持つてゐると見え、彼等は無茶苦茶に絶滅競争をしないで、或る制限を超えず、よくわきまへて互に食物と合つてゐるのだ。宇宙苦が、かゝる制限と意味とをもつてゐることは、考へてゐる者にとつては嬉しいことである。

更にまた面白く思はれることは、最近の遺傳に關するメンデルの法則と趨異の研究により、生物の進化は或る一定の法則に従つて、辿りゆくものであることが認められてきた。之等の研究から進化は決して偶然の進化でなく、ある方法のもとに進化するものであることが明白にせられ、正系進化、正系發生と云ふことが考へられてきた。下等な魚類と高等な人類との間に、全く變つてゐるやうであるが、その骨格などを研究してみると、殆ど變つた所がない。鶏などの頭も人間の脳も構造の要素は同じもので、唯その形が違つてゐるばかりである。等しく五つの部分に分れてゐる。大脳の部分が人間の馬鹿に大きくなつてゐるに外ならない。神経節なども概して十二の部分に分れてゐる點などは、全く同じである。カンガルーの長い頸の骨も、人間の短い頸の骨でも、やはり同じく七つの數から成り立つてゐる。詰り正系發生がそこに發見出來るのであつて、唯少し變化を來したに過ぎず、生物は皆根本的に等しいものであると云へる。

トロント大學のウヰリアム・パトン教授は「脊椎動物の進化」の中に、生物は彈丸が飛んでゆく時の如く、一本調子に進化して來たのであると主張してゐる。即ち進化は明かに系統を持つてゐて、下等なるものより高等なるものへ進んできたのであつて、ダアウキンが論じたやうに、單純な偶然によつて凡ゆる生物が進化したものでないと云ふのである。また、ダアウキン説に従つて偶然論をとる人の中にもメンデルの法則や、數學の方面から考へて思ひきつてダアウキン説を修正するやう

になつてきた。

で私は、大膽に、宇宙に神祕的な見えぬ力が我々を指導して、自然の世界を巧妙に支へてゐるのであると、考へて差支ないと思ふ。

宇宙に於る愛の開展

更にまた宇宙には見えぬ深い愛がある。生物の世界を見て、無意識的な保護、潜在意識的な本能的母性愛及び戀愛、意識的になつた互助の愛がある。人類に於ては更に進んで、道德的な犧牲愛、宗教的な贖罪愛などとして愛が發展してきてゐる。即ち、生命の奥には、單なる競争でなく、愛の世界、愛によつて動かされてゐる法則が存してゐる。クロボトキンは之を随分詳しく研究してゐる。

私は最近、ホイラーの「蟻」といふ本の中に、色々面白い事實が記されてゐるのを読んだ。

蟻の中で最も原始的なものは濠洲に住む、蜂と殆ど變らぬもので、ボネリアと云ふ一種類である。その口の力が非常に強く、且つ驚く程癡猛な奴で、一度食ひついたが最後どんなことがあつても離さない。で、土人は外科手術をする時に、此のボネリアを捕へて來て、局部に食ひ付かせ、しつかり食ひ付いた處を缺で頸をちよん切つてしまふ。すると死んでも離さないで、傷口を縫ひ合せる必要はなく、大變便利ださうである。それから「土蟻」と云ふ荒い蟻に進化した。こんな亂暴な蟻

はごく原始的なものであつて、「牧畜蟻」「百姓蟻」さては「工業蟻」等に進化するのである。蟻の世界を覗いてをれば、人間の文化史に似たものを細かく研究することが出来る。狩獵するもの、遊牧するもの、農業をばげむもの、工業に労働するもの、等々、即ちたゞ腕力で威張つてゐるものより、柔和な生活様式へ進化して來てゐる。これは蜂の世界でも同じであつて、進化せぬものは剣をつかつて、喧嘩ばかりしてゐるが、進化したものは多く蜜を集めて來て、劍を使用せぬ國際聯盟を締結し、ごく平和な工業組織に移つてゐるのであつて、此の點は寧ろ人間よりも進歩してゐるかも知れない。

蟻はその巢を平面的なものと立體的なものにつくるものであるが、或る時私は自宅で巢を作つて研究してゐると、一匹の蟻が他の疲れた蟻に、口から蜜を出して食べさせてやつてゐることを發見した。蟻は元來二つの胃袋を持つてゐて、一つの胃は自分の用に備へ、他の一つは咀嚙が發達して出來たもので、友人などの困つてゐるものに分配する爲め備へられてゐるのである。實に有難い文明ではないか。人間にもこれ程の徹底した互助愛が發達したら、どれ程に幸であらうか。人間はポケットの多くついた洋服を着てゐるけれども、どれも皆自分の用のためばかりで、他人の爲には一つも用ひない。胃袋を二つ持つ位の考へでゐることが出來ないものだらうか。

蟻の世界を凝視してゐるうちに、宇宙の意志は愛であり、世界の背後にゐます神は愛であること

が、明らかに考へさせられる。蟻の進んだのになると、坑道は三階建になつてゐて、菊石の如きもの、堅められてゐる。その中へ口から特別なバクテリアを吐き、そのバクテリアが成長して蜜になると、それを咀嚙の中に收める。だん／＼咀嚙が大きくなると、自分は動くのが苦しいから天井にへばりついてゐる。そして友人の飢えたものに分配してやるのである。生きた皮袋と云つた具合で、慈善の専門家である。蟻の世界は實に面白い社會組織を持つてゐる。そこには病院があり、立派な設備を持つてゐるから實に偉い。水に流されてゐる友人の爲には、木の上から木の葉を落してやつて、救助を講ずるのは有名なことである。

また洪水などに押し流される場合、一匹ならば到底助かる見込みはない。けれど三萬位の蟻が抱き合つて一塊となる。するとその中に氣泡が出來て沈まない。それで順々に廻轉して、水の下になるものが呼吸を止め、水上に出たものが呼吸をつくると云ふ風にして、代り代りに呼吸をしながら水に流されてゆき、幾哩も流れた後、完全な土地を見つけて上陸するさうである。人間は一人一人

で流れてゆくから大抵は死んでしまふ。蟻の方が餘程賢いと云ふべきである。私は蟻の世界だけを見ても、天地の生存競争を悲觀的にのみ見ることは出來ない。そこには確かに不思議な本能的調節があり制限がある。互助の事實や、犠牲の道や、文化的の努力がある。散髪やマッサージもしてゐるといふ譯、苦力も備つてある。實に世界の苦痛の奥に神祕なる意匠のある

事を見逃すことは出来ない。蟻のみでなく凡ての生物にはこの事實がある。例へば多くの「鯨」は鯨に追ひかけられると、百萬尾も一緒にかたまり、無我夢中に鯨へ突進する。すると流石の鯨も眼も見えなくなる位になつて、遂に退却の餘儀なきに到るのである。

苦痛の神秘的意義

前に述べた如く、自然は必ずしも無制限な残酷な世界でなく、多少とも意匠があり、愛の働く所であるとするれば、苦痛の存するのは何のためであらう。何か苦痛がなくてはならぬ理由が存するのであらうか。苦痛は不思議なる力を持つてゐるものである。最も微妙なる宇宙の生存の原理から出てゐることが考へられる。下等動物は苦痛感を持つてゐない。ナマコの如きは、魚がおそつて來ると、自分の肉を半分に裂いて、半分をやつてしまふ。そして後の半分の方は、砂の中に逃込んでしまふ。即ち自己裁斷を行ふ。然もあまり苦しく感じないらしい。トカゲの類でも、尻尾を切られても次の年には平氣でつけてゐる。蟹なども爪を切られても翌年は立派に生やしてゐる。豚の尻を切つても二週間で治つてゐる。痛覺が鈍いのであらう。人間だつたら大騒動にちがひない。蛆の如きでも、節足動物でも、みな我々のやうに痛くないらしい。で、苦痛を脱れたくば、下等動物に變ることである。

人間の仲間でも苦痛を感じぬものが三種類ある。先に述べた如く、低腦者、發狂者、泥醉者である。若し苦痛を感じたくないならば、この三つの仲間入をすればよい。再生せぬ高等なもの程によく苦しむのである。これは痛さを感じるによつて、近づきつゝあるより大なる危険を避けるやうにと云ふ警告を與ふるのである。内臓でも苦痛を持たない。皮膚は痛い、筋肉は痛まない。内臓でも位置を變へたり、寄生蟲がさわりだりする時に痛むのである。

普通は特別な使命を持つてゐる。實に苦痛も天の恵みである。「苦痛をにぶらせば、恥を知らなくなる」とロンブローゾーは云つた。百姓の掌は煙草の火をつけるのに用ひてゐる爲め、痛覺がよほど鈍つてゐる。

苦痛は貴い恩恵の一つである。苦しみを感ずることは人間の祕義であり、光榮であり、榮譽である。我々はかゝる見えざる保護をどれだけ感謝していか知れない。苦痛の事實に對しても喜ぶ。生活は苦しみのある間進歩がある。私は蛆やトカゲでもなく、苦痛を感じ得ることを感謝し、光榮に感ずるものである。

私はまた涙について瞑想する。涙など餘計なものだとも考へられるが、眼球の傍に袋があり、此處より殺菌劑と油とをさすのである。眼は昂奮すると充血するのでよく見えなくなるから、これを治す爲に涙が流れてくる。そこに涙の効用がある。涙が無ければ眼はひからびてしまふ。泣きたい

時は泣くがいよ。夕立の後に光風霽月の澄み切つた世界があるやうに、氣持がぱつと晴れてしまふであらう。ジエームス教授は、泣くときは泣けと心理的に提唱してゐるが、涙は心を慰める使命さへ持つてゐる。

悲哀についても瞑想しよう。悲哀も目的さへ意識すれば、必ずしも憂ふべきものではない。變化性は快感を我々に與へる。變る世界は我々の興味を満足せしむるものである。野球、庭球、ラグビー、競争等に夢中になるのも、どう變化するか解らぬから面白いのである。變化性の中に目的を發見するが故に痛快なのである。

生命に危険を來らさぬ範圍で、危険の世界にさまようことは愉快である。悲劇を喜ぶ心理は此處にある。人を殺しても生命は大丈夫なのである。そして變化を充分に味へる。そこに活動寫眞の流行する理由がある。忠臣蔵を見て、悲しい場面に見とれて袖をぬらす。思ふ存分に泣かされて來る。そこに標牛が云つた悲哀の快感がある。生命力が強かつたら、これと同じ意味で人生に直面する悲しい事實の中にも變化性を發見して幸福を感じ得る筈である。悲しくとも決して絶望する必要はない。ニイチエが「悲劇の出生」の中にこんなことを取扱つてゐる。宇宙の力に抗しても雄々しく進んでゆく意氣があれば、悲しみなどにしたる筈はない。

「南風よ起れ、北風よ來い。暴風よ渦巻け、我は敢然としてその中を歩む」と云ふ意氣込みで進

みたい。あらゆる困難を、雄々しいオーケストラと見てゆきたい。人生には騒々しい忙しさもあり、波瀾まき起る事件も突發して來る。かと思ふとまた手も足も出ない重苦しい時がある。けれどそれは、一つに調和した人生の曲に外ならない。笛も響き、太鼓も轟く、休止符の所も出て來る。然しそれは神の靈導に指標される、永遠の樂曲である。リズムがあり、調和があつて、いと妙なる餘韻を藏する。

死もまたそのクライマックスである。神の爲め、國の爲め、人のため、君のためと思へば、死も亦感激である。滿洲で戦死した将卒は、多く「萬歳」を唱へて死んでいつた。ある目的を意識するならば、死線は突破し得る。目的を認識する瞬間も、苦痛も、悲哀も凡ては消えてゆく。殉教者は十字架にかゝる瞬間も、感謝と聖讃に溢れた。

生命藝術としての苦痛

世界苦も(その死に至る迄をひつくるめて)宇宙の目的に従つてゐることを自覺さへするならば、苦しきも悲しきも、涙も恥も、迫害も、死もなにかはある。凡て一種の生命藝術であつて、これに勝利を得る工夫を信仰といふのである。

死に就ての瞑想を更に續けよう。死が生物の世界に出現したのは、出生と同時にである。出生が起

つたが故に死が起つてきた。復細胞になつた時、初めて死が現れて来る。即ち男女の神祕な區別が生じて死が出來た。死は決して徒らなものではなく、その中に宇宙進化の微妙な役目をつとめてゐる。驚くべき神祕がひめられてゐる。面白い宇宙の芝居である。

コロンピヤ大學のヂ・エツチ・モルガン教授が、ニューヨークの家の蠅を四千種位に分類して研究した結果、前に云つたやうな総合的進化の原理を發見した。死は實に出生と共に現れたもので、宇宙生命進化の表現である。然し、憐れに思はるゝのは、かゝる意味に於て、使命を果さず、結婚することもなく、若くして斃れた生命はさびしく思はれる。然しこの場合でも、靈魂不滅を捨てる必要はない。人格的な神祕な力は恐らく宇宙の意志によつて、保存されてゐると考へて差支へない。また方面を變じて、道徳的失敗の場合を考へてみよう。罪の罫へは實に深刻なものである。ドストエフスキーの小説を見ても、これがよく現れてゐる。有馬典獄は、死刑になつた人が蘇生した話をして居られるが、死んでゆく瞬間「生前犯したことがある凡ての恐ろしい罪が、一度に思ひ出されて、それはそれは恐ろしいのである」と傳へてゐる。水死して蘇生した人にもこんな經驗のあることを聞いた。私も自分の乗つてゐる自動車と電車が衝突したときにも、そんな心持になつた。過去になした業を又光線で照らされるやうに指摘され、捲き込まれてゐるフィルムが一時にほどかれるやうに、良心の苦痛が加へられるのである。

世界苦を救ひ給ふ神

宗教はかゝる良心の苦しみを癒し、慰めんとする愛の救ひが、事實にあることを示すものである。救と完成に良心の苦惱より脱せしめんとして、イエスは十字架に最後を遂げ給ふた。罪に對して愛の神がこれを補ひ、助けんとしてもがき給ひ、心の煩悶になやみもだえてゐる靈をも慰めてくれる。苦しみにアドリナリンが働くやうに、悲しみの中に、死の中にも或る神祕な意義があり、救はるべき道があるやうに、罪惡を感じる裏面にも、そこに妙なる救ひが備へられてゐるのだ。これを示してゐるのが、イエスの十字架である。

世界にある苦しみを要するに、宇宙全體をよりよく再生せしめんとする努力である如く、良心の惱みもまた貴い心を再生せしめんとする宇宙の深い愛の原則より出てゐることを、イエスの體驗を通して發見することが出来る。之を信じて初めて、我々は眞の宗教を見出すことが出来る。昔話ではなく、この實生活に於ける耐え難い、苦痛、悲哀、涙、死、生存競争、罪惡の彼岸にも、見えない救はんとする意志があることを考へ、それによつて凡ての中に雄々しく歩みゆく力を發見することになつてくる。

我々はこの大なる神の愛にすがつて、世界苦の只中にも絶望することなく、悲しみにも、惱みに

も、罪にも、失敗の中にも、御手を信じて生活してゆかなければならぬ。

父なる神様、

東洋は闊え、支那は苦しみ通して饑饉が相續き、日本に迄もその悶えが響いて居ります。ロシアは上を下への騒ぎで引繰返してゐます。そして日本は、犯罪が絶えず、忌むべき思想が横行し、高等學校の學生が何百人か監獄に這入りましたが、猶日本人は、我儘と貪りをもつて平氣で居ります。

この時に、父よ、もう一度我々に新しき真心を與へ、日本を興す者を選んで立たせて下さい。凡ゆる困難を飛越え、宗教運動に参加して眞劍になり、日本の公娼廢止運動のために、禁酒運動の爲に、何人かの同志を起して下さい。この國を善くするために起して下さい。不徳不義を斷ち、彼等と呼醒まし、悔改めさせて下さい。山にも町にも困つてゐる人が多い時に、ごうぞ彼等に生活の道を與へて下さい。百姓に土地を與へ、勞働階級に仕事を與へて、互に共存共榮の國を打ち立てるために力を盡させて下さい。救主の名によつて祈ります。

アーメン

第三章 神とキリスト

それ神はその獨子を賜ふほごに世を愛し給へり。凡て彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得しめん爲なり。(新約聖書ヨハネ傳三章十六節)

キリストと兒童への尊敬

昔から、子供を可愛いとは云つてゐるが、聖書には「われ感謝す此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯し給へり」(新約聖書マタイ傳十一章二十五節)と書かれてゐて、神様は斯ういふ眞理を大學者や大智識にかくして、反つて赤ん坊に示し給ひしことを感謝すると云ふて居る。可愛いと云ふことゝ尊敬すると云ふことゝは別である。日本には兒童を可愛いと云ふことは云つてゐるが、尊敬すると云ふことはないと云つてよい。大學者や大智識より赤ん坊の方が尊敬すべきだといふことは日本にはない。尊敬すべきものだから偉くなるのだと云ふことが入つてゐないのである。

明治二年、松方老公が九州の太宰府に來られた時、此處には兒童を殺す風習があつた。私はこの話を直接聞いたのであるが、僅かの間に三百何人が殺さるべき筈のものが救はれた。そしてこの時が孤兒院の初めであらう。この赤ん坊を殺すことは、伊豫、讃岐、土佐に廣まり、日本全國に擴ま

つた。食はすことが出来るなら殺さないが、家の子は死んだ方がよいと云つて始末したものである。支那へ行くと、今はもう壊してあるが、今より五六十年前までは、廣東に十三階の塔がからつて作られてあつた。この塔は赤ん坊を捨てる爲にあつたものである。それにも似たことが、今猶印度にはある。印度では赤ん坊の中から夫婦約束をしておく。そして一方が死ぬと一方を殺す風習がある。それも逆倒に吊つて殺して葬むる。之をサッチと云ふ。英政府は百一年前に之を禁止したが、いまだに續いてゐる處がある。斯ういつたやうに、子供を可愛がる半面に、子供を虐待することは、イエスの時代にもあつた。ローマのいろ／＼な物を見ると、イエスが生れた時に二歳以下のものはみな殺された。實に無茶な話で、イエスが生れて困るからと云つて、二つ以下の子供を殺すことは何でもないことだつた。日本でも斯ういふことをこつそりやつてゐた時代があつた。

私は何十人の貰ひ子殺しを知つてゐる。私生兒を生んで困る人は三十圓位と着物十枚位を付けて貧民窟に捨てに来る。それをまた貰ふお婆さんが居る。お婆さんはミルクをやつてゐるが、赤ん坊はだん／＼瘦せて来て、しまひに死んでしまふ。つまり栄養不良で殺す。そして市役所へ届けると、焼場は無料で葬式は五圓で出来る。貧民窟では三十圓の金に困るとすぐそれをする。我々の想像もつかないことであるが、實際にある事である。

キリストと女への尊敬

イエスの時代にも赤ん坊は尊敬されなかつた。それを尊敬し出したのはイエスであつた。そしてイエス以後、赤ん坊ばかりでなく、女をも尊敬されるやうになつた。昔は日本でも女に魂があるかないかさへ解らない位だつた。女は高野山にも登してくれなかつた。今でこそ女學校も出来、女理學士が出るやうになつて初めて尊敬されるやうになつたが、佛敎も儒敎も女を輕蔑した。女子と子供は養ひ難しといふ。釋迦は自分の妻君まで無理に振り棄てたといふ。それにイエスは、女と一緒に歩かれた。ルカ傳八章二節を見ると、多くの女がイエスと一緒に居る。ヒステリーの女や、精神病を治された女がイエスについて行つた。七匹も悪鬼がついてゐたといふから、餘程重い精神病者であつたに違ひない。みな身代を出してイエスに従つて廻つた。それも一人や二人でなく大勢であつた。イエスが十字架にかゝつた時に弟子達は逃げたが、イエスについてゐた者は女三人と一人の弟子であつた。それといふのもイエスが女を尊敬されたからである。

ローマ敎會へ行くと、マリアに對する尊敬、處女崇拜に對する精神がある。即ちイエスから、宗教的に女を尊敬する精神が社會にみなぎつたのである。そして西洋東洋に於る女に對する差別が訂正された。それはイエスによりどんな詰らぬ者にも、神の姿があると教へられてから、可哀相だか

らと云ふのでなく、赤ん坊の中にも、女の中にも神の姿があるから尊敬するやうになつたのである。イエスの同情は氣の毒だといふことから出てゐない。尊敬から出てゐるのである。此處にダイヤモンドがある。ダイヤモンドを尊敬するのは値打があるからである。硝子を切るには白金でもいけないし、鑽石もよくない、ダイヤモンドでなければ切れない。近頃は蓄音機の針の先にまでダイヤモンドをつけてゐる。その中に値打がある。女の魂の中にダイヤモンドがある。赤ん坊の中にダイヤモンドがある、神の姿がある。そのダイヤモンドがいたんでゐるからイエスは同情されたのである。イエスが、貧乏人、盲人、癩病人、労働階級、囚人、壓迫せられた階級、小さい民族に同情されたのは尊敬したからで、單なる同情とはちがふ。その中に神の姿を見るのである。女は美しいから、子供は可愛いから愛すると云ふなら、美しくなかつたら、醜かつたらどうする。醜くともその中に神の姿があるからと云ふので尊敬するのである。斯くイエスに教へられた我々は負けずにつとめなければならぬ。キリスト教は全く斯ういふ愛の實行の宗教である。

愛の事實そのもの

面白いことには、イエスは自分の偉いことを説明なさらなかつた。マタイ傳十一章の二節から六節を見ると、「来るべき者は汝なるか」と先輩ヨハネの弟子が訊きに來た。来るべき者とはユダヤ人

が長年待つてゐた救主 即ちメシヤと云ふことである。イエスの先生ヨハネが國を憂ひ、如何にかしてユダヤの國をよくしようと思つて、時の大名であつたヘロデ・アンチパスの罪惡を責めた。罪惡といふのは、ヘロデが弟の妻を横取りしたことである。その姦通したことを責めた結果、ヨハネは監獄に入れられたのであつた。悶々として樂しまざる中に、「イエスといふ男は偉い人だ、自分の氣付かざる中に偉い事をしてゐる。この人こそユダヤの將來を荷ふものだ」と氣付いてイエスの許に使ひをやつた。使ひが「あなたはメシヤですか？」と尋ねた時、イエスはさうだとは仰しやらなかつた。「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり」と事實を報してゐる。一體何を政治と云ふか。政治といふのは一國の民がよくなり、病人がなくなり、精神病や煩悶者を無くなさうとすることを云ふのである。いくら大臣が、家來を引連れて國中を廻つても、いくら兵隊が多くても、戦争があつたり、罪惡が行はれるやうではそれをいゝ政治とは云はない。その反對に軍人がゐなくとも貧亡人が不平を云はず、癩病人が癒され、跛者が治り、死人が生き返るなら、それは政治上喜ばしき事である。その事實を神の國と云ふ。イエスはだから云はれた。誤解しては困る、事實を告げよ、事實を告げれば足りると云はれた。イエスの力強さはそこにある。精

獨逸の學者ヘーゲルは「精神があつて國家があるのだ、國家があつて精神があるのではない。精

神が國家といふ衣を着るのだ。その精神は宗教があつてこそあるのだ」と云つた。社會は精神の衣である。我々が身體があつて着物を合はすので、社會は我々の着物である。社會があつて初めて身體を持つのと違ふ。大勢が社會を作らうと云ふのである。

イエスは事實を指された。イエスは人を愛し、生き返らし、助け、貧乏人を無くするといふ事實を行つて居られた。この事實の上に社會を作るので、いくら法がよくとも、守らねば何もならぬ。いゝ法律を持つてゐる國はメキシコである。けれど實行しないから何にもならない。英國は憲法すら持つてゐないが、聖書といふ約束がある。聖書があれば憲法は要らない。國民の歴史が即ち憲法である。その邊は實に面白い。法は無くとも裁判官の心の持ち様でどうにでもなる。英國は裁判官が善い人だから決して間違をしない。

キリスト愛の五方面

だから法も守らなければ役に立たない。イエスは口には云はないが實行せられたのである。イエスには初めから五つの使命があつた。貧乏人に傳道する、即ち經濟的に困つてゐる者を助け、また肉體的に、精神的に、社會的に困つてゐる者を助け、政治上に困つてゐる者を助けるといふ、即ち五つの方面、人間の凡ゆる方面から助けて行くと、ルカ傳四章十八節十九節に云はれてゐる。イ

エスはいつも貧乏人の爲には絶對の味方をなすつた。

例へば金持がイエスの處に來て、「私はあなたはいふことは何でもしてゐます」と云つたが、イエスは、「いけない、お前の財産をみなやつて來い」と云はれた。多分の人は高利貸しをしてゐた人になりがひない。斯うイエスは施しのことを教へてゐられる。或人は、最後の晚餐の時に、イエスがユダに出て行けと云つたのは、施しをせよと云はれたのであらうと云つてゐる。斯ういふことは、五千人、四千人にパンを與へた事でも解る。其處は弟子と違ふ處で、弟子のやうに、自分は靈のこのみ守るのだとは云はなかつた。イエスは常識があつた。群衆が飢えてゐるときにパンをやれと仰しやつた。弟子が「ありません」と答へると、「まあ座らせよ」と云つてパンを與へて居られる。祈りせよと云はないでパンを與へよと云はれた。また弟子が勞働して歸つて來ると、パンを焼き湖邊で待つて居られた。祈りせよと云はずに食へと云はれたのである（ヨハネ傳二十一章九—十二節）仕事のない人間に食物を與へ、職業を與へてゐられる。だからキリスト教會は常に貧乏人を可愛がらなければならぬ。

クリスチアンが、貧乏人を可愛がらないのなら、それは眞のクリスチアンではない。キリスト信者が貧乏人を可愛がらないのなら、大きな會堂は建てないが、我々はいつても収入の一割位は人にやるやうにしなければならぬ。時によるとそれ位の覺悟をもつて困つた人を助けなければならぬ。

紀元二世紀頃には、エジプトのアレキザンダリアで、十万人位が一万二千人の貧乏人を養つてゐた。聖書には初めから終までこの人を助けなければならぬ事が、書かれてある。誤解せられてもよい、實際に行ふことである。之は命令ではない、精神である。

生理的救主キリスト

イエスは病人、老衰者、死人の友であつた。だからイエスは看護夫である。單に可哀さうだからと云ふのでなく、神はそれらの人を治す力を持つてゐられるから、イエスを通してそれを實驗されるのである。今日このキリスト精神を實驗してゐるのは、看護婦である。看護婦は、臭い、膿のある、人の厭がる病人を世話してゐる。我々は癩病人から逃げるが、イエスは癩病人を世話し、接近して癒して居られる。イエスが癩病人を癒されたことは福音書のみならず五回出てゐる。イエスは癩病人に觸り、一緒に飯を食ひ、癩病人と握手された。「イエスは觸られたであらうが、我々は癩病人なんかにさわらない」といふなら、その人はクリスマンではない。

斯様に、イエスが癩病人を癒されたことによつて、キリスト教會が、今日さかんなのである。今日、では日本政府は二千人の癩病人を世話するやうになつたが、その權威はみなクリスマンである。東京、全生病院の光田先生は日本MTLを作つてゐられる。我々が一圓づゝでも出し合つて、

手拭一つでも氣の毒な人に贈らうと云ふ運動をしなければならぬ。癩病院には何處にもクリスマンが居る。さういふ人々は、イエスが自ら癩病人に接近されたことを生かしてゐるのである。それをキリスト教と云ふ。理屈ではない、事實である。職業ではない奉仕である。キリスト教の同情は昨日の同情でない、今日も生きてゐる。歴史上續いてゐる。

キリストの奇蹟

イエスの奇蹟がさうである。奇蹟の起る必要のない人間には、イエスは奇蹟を起さなかつた。困つてゐる人に奇蹟を起し給ふたのである。我々の中には奇蹟なんぞないと云ふ人がある。私が書物を落とす。この引力の法則は自然である。が、落した本を引上げるのは自然でない、それを奇蹟と云ふ。貧乏で醫者にかゝれず困つてゐる時に、そのどん底にある人間を引上げることを奇蹟といふ。聖書の中の多くの奇蹟はそれである。イエスは十八年間血縷を患つてゐた人を治した。盲人の目を開けた。貧乏で困つてゐる人、人が相手にしてくれない人に奇蹟を起し給ふた。

金持には奇蹟が起る必要はないかも知れぬ。しかし、今猶、肺病で困つてゐる人、その他病氣で困つてゐる人間に奇蹟が起る。神の力が人間に作用することを奇蹟といふのだ。宇宙には自然法の外に、目的法がある。人格を通じて働くのを奇蹟といふ。

心理的教主キリスト

イエスは貧乏人、罪ある人、前科者、姦通の女の友となつた。姦通の女を殺してもいいかと尋ねられた時、イエスは殺してもいいと云つた。けれど、お前達の中の最初の石を投げるものは、聖潔の者に限ると云はれた。(ヨハネ傳第八章—十一節)そしてイエスは女を助けられた。「女よ、汝に石を投げる者は居ないか」「主よ、誰も居りません」「では、改心せよ」そこにイエスの同情がある。

斯ういふ例は澤山ある。淫賣婦にイエスは接近された。若しもキリスト教の牧師が、淫賣婦と歩いてゐるなら、人は悪口を云ふだらう。けれどイエスは平氣でそれをやつたのである。そこがイエスの偉い處である。イエスは學者パリサイ人は天國に遠く、娼妓の方が天國に近いと云はれた。海山千里の者は天國に行き、理屈ばかり云つてゐる人間は天國に入らない。或者は耳ばかり天國に入れるし、或ものは口ばかり天國に入り、手足は天國に行かれない人がある。が、イエスはさうでない。最も憐れな人に同情された。

贖主キリスト

耶穌教は肥料汲みである。他の人間は悪いことをしては捨て、行くが、我々は肥料汲みである。我々の中で、肥料汲みは厭だと云ふ人があるなら、キリスト教を止めて置くがいい。キリスト教徒は不淨汲取人である。これを贖いと云ひ、尻拭ひといひ、十字架と云ふ。それが解らないで、耶穌はいゝ、ハイカラで、上品だと云ふが、肥料汲みは田子作のやる仕事で、少しも上品でない。が、私は肥料汲取人でいい。私は一生耶穌の田子作で送らうと云ふ心が我々にはないか。我々が居ればこそ貧乏人も安心してゐると云ふやうでなければならぬ。淫賣婦や病人を放つておくと、世の中は大變なものになる。で、キリストイエスの教により初めて世の中は淨まるのである。

「汝らは地の鹽なり」世の中を消毒するのは我々だ。消毒するから腐らないのである。衆議院の第二回目の議長片岡健吉は「俺が居る間自由黨は腐らない」と云つた。みんなが鹽となつてこの世を淨めなければならぬ。「鹽その味を失はば何の得あらんや」である。

眞のクリスチャンは少い。その少いクリスチャンは鹽である。イエスは、パン種だと云つて居られる。パン種だから、中でふくれる。之は異分子である。そこに不淨汲取人の光榮がある。臍の緒があるので、母胎と子供とが繋がれてゐる。クリスチャンは臍の緒である。神と人間と社會をつな

ぐ蹟の緒である。斯ういつた使命をもつて我々は生活しなければならぬ。或ひは社會的に前科ある者に同情を持たなければならぬ。

今日監獄の改良が可能になつたのは、エリザベス・フライ女史や、ハワード氏の感化によつたものである。殊にフライ女史の如きは、英國初めヨーロッパの凡ゆる監獄を訪問し、囚人を豚の如く取扱つてゐた残酷なる時代より、彼等を心理的に、教育的に、また病理學的に取扱ふやうに導いた最大恩人である。今日の監獄改良の發端は、全く彼女の十字架愛の精神が効果を結んだ結果であると云つてよいと思ふ。

日本でも監獄が刑務所と云ふ名に變つたが、もう少し経つと病院となるであらう。傳染病と同じで、肉體的、道德的、精神的の病人が罪を犯すのだから、病院といふのがほんとうである。斯ういつたやうにイエスは囚人に同情された。

我々はイエスの同情——神の氣持を持ち給ふイエスの同情を持つて、氣の毒な人々を助け、互ひに尊敬し合ひ、どんな者の中にも神の姿があるのだから、如何なる人に對しても尊敬しなければならぬ。

であるから一層、クリスチャン同志は互ひに尊敬し合ひ、この愛の實現を期さなければならぬ。

神の啓示者

神を信するが、キリストを信じないと云ふ人に對し、何故私がキリストを信するかを説明したい。獨逸の學者でリッachelといふ人が「キリストは神を代表してゐる。キリストを見た人は神を見た」と同じだ、神とはキリストのやうな人だ」といふことを云つてゐるが、私もさう思ふ。

使徒ヨハネが「未だ神を見しものなし」と云つてゐるが、若しも我々が互ひに愛し合ふならば、神の愛が自然に判つて來ると云ふのである。神の性質はいろ／＼に考へられるが、神を知らうと思へば、愛から見なければならぬ。その愛は何かと云ふに、それは結局、キリストを見なければ愛の深さ、高さ、廣さ、奥行が判らないと思ふ。私がキリストを信する一つの理由は、キリストを指して神の愛を信する道はないからである。今日でこそキリストを除外しておいても、神が愛だといふことが解るが、千九百年前には、恐らく神の愛を眞面目に考へた人はなからうと思ふ。

先日私は印度の宗教に就て讀んだことがある。印度では今猶、一億五千萬匹の牛を飼つてゐる。印度では牛を決して殺せないのである。牛は最も神聖なもので、殆ど神を意味すると信じられてゐる。であるから、マホメット教の人がブラマ教徒を苛めようと思へば、ブラマ教徒の前で牛を殺すのである。ブラマ教徒は神を殺された様に思つて、非常に憤慨して、喧嘩が起つて大騒ぎになる。

また、マホメット教徒を怒らさうと思へば、マホメット教會の前へ行つて、笛を吹き、太鼓を叩き、鐘を打つて、どん／＼ちゃん／＼やるのである。するとすぐ喧嘩が起る。斯ういつたやうに、ブラマ教の人はそれ位牛を大事にしてゐるのである。キリスト信者は、キリストを神の代表者としてゐるが、印度では牛を神の代表者にしてゐる。面白いことには、牛の乳と、バタと、爪と、糞と、尿を混ぜて飲むと効能があると云ふ。そしてまた實際、牛が小便をして居る所へ、眞鍮のペケツを持つて行つて飲むと云ふことである。こんな話がある。マハラヂヤといふ王が、初めて鐵道の試運転をした時、牛を轆殺してしまつた。それからといふものは、神を殺したやうに思はれて、その王は一生頭が上らなかつたといふ事である。斯ういつた宗教が今猶ある。斯様にして我々は迷うのであるが、日本でも天神様の前には必ず牛が置いてある。印度の宗教と天神様と似てゐる所があるのであらう。我々は迷うと牛を拜み出すのであるが、我々に間違ない、或基準を教へてくれるのは、我々の先生であり、預言者であり、小使役をして呉れる人でなければならぬ。それはキリストである。

我儘の纏結とキリスト

キリストの宗教は、一番我儘なローマ時代に、——私は之を我儘の纏結時代と云つて居るが——

その時代に出たのである。そして、キリストの性質の中には、ローマ時代の反對がよく出てゐる。ロマ書第五章八節に「我等のなほ弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給へり。それ義人の爲に死ぬるもの殆どなし、仁者の爲には死ぬることをも厭はぬ者もやあらん。然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等の爲に死に給ひしに由りて、神我らに對する愛をあらはし給へり」と、使徒パウロが云つてゐるが、私は、我儘の纏結時代に、反對を云つてくれたキリストの愛の標準が、今日に於ては最も大事なものだと思ふ。今日日本では、二千年前のローマの法律をそのまま用ひてゐる。民法や小作法の如きは、ローマの法律以外に一步も出てゐない。我儘な法律が、今猶當然のやうに思はれてゐるのである。然し、その反對に、キリストが逆に云つたことが、我々の標準にならなければならぬ。問題は簡單である。たとへば利子とか利潤だとかの問題は、食るか食らないかの問題である。我々はローマ時代にキリストが反對されたその儘を信じたものである。パウロは、キリストは我儘を磔刑にかけたと云つてゐるが、我々もそのまゝを云へばよい。私は、神に於ては世界全體に屬ける——世界を生かす爲の自分で、我儘の爲の自分ではなかつたと考へる。

私の友人の或人が、娼妓とはどんなものかといふ事に就て云はれるのに、娼妓の一つの性質は、人を支配せんとする欲望が強い。詰り、自分の云ふことをきかさうといふ。唯色慾だけでない。女

が自分の美貌を以て男子を自分の云ふ通りにさせる。愚弄する。そしてそれが面白味に變るのである。毒婦の性質は、形が變つてゐるが、自分の美貌で人を支配してやらうと云ふ氣がある。之がド
ン底に於る所の一つの性質だといふ事である。

私の知つて居る者に東本願寺の勅使門を寄附した人があるが、大正九年頃には、随分金儲けをした。初めは金を儲けようと思つてゐるのであるが、それが終には、金儲けでなくなり、金儲けだけでは面白くない、金を自由にしてみよう、儲けでない支配してみたいと云ふ氣になつたのである。之が恐らくは何人にもあるだらう。これ以上金を儲けた所で面白くない、それより大臣になつて支配してみよう。俺の云ふ通りさしてみよう、といふ氣がある。この「俺」が出て来ると、人間には、神がだん／＼判らなくなる。キリストが「聖意のまゝを爲し給へ」と、自分を投げ棄て、歴史の新しい位取を進められたと云ふことは、何と意味深いことであらう。自分を神の御榮の基礎にして、人間世界の最も我儘な時代に、さう云つた姿を現して呉れたといふことが、私の信するところである。

道徳の廢頹とキリスト

誰にでも出来さうなことであるけれども、人間が道徳を高めるといふことは、少し點の取り方が

違ふと、十年後にはもう取返しつかないやうな道徳の廢頹があるものだといふ事を私は感ずる。近頃の青年は、六ヶ月見ないと、前とはすつかり違つてゐる。その間には一度位監獄へ行つて來てゐる。私は千九百年前のキリストの教が必要でないとは思ふ。キリストが、我儘な時代に打勝つたことは、今日我々にとつても、大きな示しである。

大正九年に私は支那へ行つて、漢口から北京へ行く時、何里走つても、人間許り居て家が無いのを不思議に思つた。それと云ふのも、何百萬人と云ふ人が洞穴の中に住んでゐたのである。それから天津に行つてみると、四千人位の人が苔を食つて生きてゐた。或ひは肋骨の出た人が老人に連れられて乞食になつてゐると云ふ有様だつた。私は歸りの旅費だけ持つてゐたのであるが、旅費が要らなければ、持つてゐる金を皆出してやりたかつた。私は船津總領事に依頼してこの状態を訴へて、日本に電報を打ち、救済の途を講じたのであるが、それから間もなく支那は大動搖を來した。支那の國民道徳は非常に廢頹してゐる。ちよつと油断してゐる間に、堰を切る如く人間の氣持は廢頹してしまふものである。今日は大正九年と同じである。繩がゆるむと人間には獸の部分が出て來る。それを全く無くして、キリストの氣持になることはなかなかむづかしい。それはキリストを中心しなければ出來ないことである。

二三日前、私はウエスレー傳を讀んで感じたことがある。或時代になると、キリストを説く牧師

自身がなま温く、我儘な、少しも弾力性の無い、振のもどけたものになる事がある。然し或時は、キリストの精神で、振のよく捲かれた人が必要だ。さう云つた人が四五人出ると、振がかけられる。日本では今西洋に較べて大分振が効いてゐる時代である。然しどうかすると、すぐ斬合ひの時代が来る。で、矢張り、キリストを中心に位取を決めて、キリストの、我儘でない精神を通して神を見る必要がある。その外に神は示されない。キリストは、我は道なり、眞なり、生命なり、と云はれたが、私もキリストの他に道が無いと云ふことを強く信じてゐる。それで、私は、千九百年前の福音を今猶説いてゐるのである。

最近、大阪毎日新聞などは、歐米の道德の廢頽を批難してゐるが、二千六百万人(殺された兵卒、大戦の直接原因に依つて殺された、又死んだ普通人)から殺した歐洲の人々が廢頽的になるのは已むを得ない。どうしても打ちやり氣味になり易いのである。我々はこの時にしつかりやらなければならぬ。

三つの反キリスト精神

キリスト教に對する三つの敵がある。それは(1)極く我儘な獸のやうな氣持、(2)邪淫な蛇のやうな氣持、(3)法螺ばかり吹いてゐる蛙のやうな氣持である。之等は默示録に書かれてゐるが、これがキ

リストの精神に邪魔をする、羔羊の如きキリストに對する敵である。獸のやうだといふのは、神を拜まないで自己禮拜をするもの、俺が偉いのだと云ふ人は詰り獸の氣分を入れてゐる人である。また蛇は執念深い、邪淫の外に道がない人である。蛇の大きいのは龍である。蛙はぎやあく騒いでゐる連中である。之等に對しては默示録はその精神をよく現してゐる。

キリストは柔和で、謙遜で、犠牲の血を流して、人の爲に死なれたが、之と同じことをピリピ書は云ふてゐる「彼等の終は滅亡なり、おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、たゞ地の事のみを思ふ」(ピリピ書第三章十九節)腹とは食ふこと、恥とは色慾である。人間は時によると、自分に都合のよいやうに、自分の腹を神とする。そんな時には女郎屋の牛太郎にもなれば、稻荷さへも拜む。稻荷とは稻の神である。東洋にも西洋にも斯ういつた食物に關する神様は多い。豊受大神とかアゼチックの神様がそれである。もう一つは生殖器を崇拜する宗教である。日本には之が非常に多い。山形の高等工業學校の側にはこの生殖器の神がある。伊豆の伊東にも多い。それは恥と云ふものを光榮としたのである。斯ういつた邪淫の宗教が、少し油断をすると這入り込んで来る。

最近のロシアでは、結婚者が五十二萬あつて、離婚が一年にその中の二割あつたと云ふことである。モスコで一萬一千組の結婚に對し、離婚がその中九千九百組あつたといふ。斯うなつて來ると、恥が光榮になつて、その結果迷信が流行るやうになる。ロシアでもいろ／＼な方面に迷信が起

つた。これらの迷信が整理されると偶像になる。之を破壊するのが愛の宗教である。腹と恥を拜む宗教に對し、或ひは生き方に對し、異つた方面から愛を基礎にして、我々は怖氣のない生活を始めなければならぬ。

神よりの手紙

長田穂波と云ふ人が最近詩集を出された。この人は十九の時癲病にかゝつてから二十年間癲病院生活を送つてゐる人で、彼の詩集は右手にペンを括り付けて書かれたものであるが、その詩がまたとなく眞剣なものだ。私は初めは馬鹿にして、何、病人の書いたものだから大した事はないだらう。と思つて讀んでみると、實に立派なものである。足らぬ所も多いが、その文字に拘泥してゐない所に、キリストが腐つた肉體の中に滲み込んでゐる。詩を讀んでゐると、自分が生きてゐるのか、キリストが生きてゐるのか判らない位である。自分の友人で死んで逝つた時の詩の如き、全く委せきつた氣持に私は感心してしまつた。普通の病氣であれば、一年間千人に對し三人死ぬ割であるが、癲になると、千人の中七十人死ぬのである。若し我々の中の一人が癲になるときつと不平を云ふに違ひない。然し長田さんは、キリストの中に生きてゐる愛をしつかり握つて居られる。私は神から示された手紙はキリストの外に無いと思ふ。天の神から來た一番いゝ符號はキリスト

だ。ラヂオの波長と同じ意味に於て、私は神から來た波長として、キリストの愛を受けてゐる。キリストを見るから神が愛だと判るのである。癲にかゝつても、肺病になつても、貧乏に陥つても、さうだ、十キロの放送だ。波長だ！と思つて、神に歸つて行けばいゝ。皆がキリストの精神を解つて、この愛の波長に觸れることだ。私はキリストの外に、神の愛を知る道はないと思ふ。

天の父、

我々が神の愛が解らないで迷ふ時に、キリストの十字架を見上げて進ましまして下さい。深い神の愛を多くの人に知らしめて下さい。我々の周圍には、貧乏な人、困つた人が多うございますが、彼等に間違のない、救の手をのべ給はんことを、キリスト・イエスによつて祈ります。アーメン。

第四章 神と十字架

それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救はるゝ我らには神の能力なり。

(新約聖書コリント前書一章十八節)

十字架を重んずる理由

キリスト教は十字架を印とする。そして神より十字架の方を重んずるのである。その理由を考へてみよう。何故神を云はなくて十字架をいふか？ 何故祈の後にイエス・キリストの名によつてと云ふか？ 神そのものを信するのが宗教なのだから、イエスとか十字架とかを云はなくてもいいと考へる人がある。十九世紀の唯理論時代(Rationalism)には、神は要るけれども、キリストは要らぬ、或はイエスは要るけれども十字架の必要はないといふ理論が随分盛んであつた。我々の根本運動は神を信じさへすればいいので、決してキリストを神の子としたり、磔刑に意味を持たすことは間違ひであるといふ。ところが一九〇〇年の間キリスト教は十字架を信じて来た。それには民衆の大きな心理的要求がなくてはならぬ。従つてそこには宗教的眞理がなくてはならない。十八世紀のラシヨナリズムは十九世紀になつて、たとへばマルクスの思想である唯物論、デアウインの思想である

進化論、また進化論の裏面には機械論を生んだが、斯ういつた唯理論時代に於ては神と人間を全く関係ないとして、我々は神は要るけれどもキリストは要らぬとか、或ひはイエスはいるが十字架はいらぬと云つて、神と人間を離してしまつた。けれど元來人間は神によつて造られたのだから、さう易々と神と離せる譯はない。人間の要求は永遠に人間として居りたくない、神の像に入りたのである。神といふのは自由の像を意味する、自由の極限は自在である。自在とは獨逸語でディングアンチツヒ——ものそのもの——と云ふことである。人間には法則があり、また物を食べたりするけれども、自らあるものは頼らないのでいゝのである。神とは即ち自在である。我等は人間として自由を得たい。農村で百姓をするのも、土地を耕して自ら食つて行きたい爲である。詰り自由を得たい爲である。私は農民組合の機關雜誌に「土地と自由」と云ふ名を附けたが、それは我々が土から飛上りたいからである。

我々は神になりたい、自由になりたい。十八世紀から十九世紀の全般に亘つて、神と人間を別々に離して考へたけれども、我々は宇宙全體が、人間を通して働く氣持ちを忘れてはならない。人間は何故行詰るか？ 行詰つた者が再生する氣持ち、その再生の原則が理解されない人には、キリストの存在が全然解らないのである。生物にしてもこの再生の原則から來てゐる。我々が病氣をして居つても病氣が治る、或ひは腫物が身體に出來て穴があいても、だん／＼癒つて來る、と云ふのが

それである。一度神から離れた者をもう一度神に引付けて呉れる、と云ふのは、この再生がより宗教的に入つて来る時に我々が味ふのである。これを最もよく味つた者がパウロである。使徒パウロを再生の人といふ意味で見ると、パウロの云つた十字架がよく判る。

神の内容と十字架

使徒行傳九章に於てパウロは、キリスト教が大嫌ひだつたと云ふことを云つてゐる。何故パウロがキリストを嫌つたかと云ふと、パウロは神は要るがキリストは要らぬと云ふラシヨナリズムの思想を持つてゐた。天地萬物を創り給ふた神と、はりつけに架つた囚人のキリストは何も關係がないと彼は思つてゐた。そしてイエスを通して人類再生の原則が働くことを豫定されてあつたことを彼は知らなかつたのである。けれど之が判つた時に彼は奮然立上つた。パウロに於ては十字架は神の性質を顯はすのだ、唯之を信すると云ふのでなくて、神の内容を信するやうになつたのだ。十字架は神の内容を意味する。それでは神の内容とはどういつたものか？ 神は再生の力を人間に與へるといふ内容即ちどんなに叛いて神から遠ざかつてゐる者にも、もう一度引返す力があるといふことである。彼はこれを知つたのである。彼が神の代りに十字架をより必要とするやうになつたのは、神を信じたからである。神に依つてもう一度甦り得る、どんなに罪深い者でも罪惡から離れて甦り

得ることを信じたからである。そしてそれは、神の恩恵だといふことを見つけたのがパウロの大発見である。それをパウロはいろ／＼な形で説明しようとなつた。パウロは單なる歴史的の十字架を説かない。單なる歴史的の十字架は彼にとつては餘りに貧弱なのだ。

されば今より後我肉によりて人を知るまじ曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯くの如く知ることをせじ (新約聖書コリント後書第五章十六節)

曾て彼は歴史的人物としてのキリストを知つたがそれは失敗した。これを肉眼で見たキリストととるか、或ひはキリストを歴史的人物ととるか、兎に角パウロは一度位はキリストを見たであらう。恐らくそれは最後の磔刑上のイエスであつたらうと私は考へる。彼がキリストに就て知つてゐることは極僅かで、格言の二三にしか過ぎない。エペソ書第五章の卅一節に出てゐる「この故に人は父母を離れ、その妻に合ひて二人のもの一體となるべし」と云ふ文句はマタイ傳十九章五節に出てゐる言葉である。また使徒行傳廿五章卅五節に出てゐる「與ふるは受くるよりも幸福なり」といふ格言にしても、コリント後書十一章の廿四節廿五節に出てゐるキリストの言葉にしても、パウロが知つてゐるのは三つか四つかである。そして彼がよく知つてゐるのは十字架だけである。彼はキリストの傳記に就ては知らなくて、十字架は見たから知つてゐたのであらう。パウロが考へるには肉の十字架は見まい、それは餘りに貧弱だ、その奥にあるキリストの思想、キリストはわざ／＼ある目的を

持つて死んだのだといふことを彼は見出したのである。キリストは十字架の中に、ある目的を發見したのだ。舊約の中に「義人は死ぬ」と録されてゐるが、キリストは十字架に懸けられるまで十回位死ぬ〜と云はれてゐた。

神の犠牲としての十字架

悲しみを目的にするなら悲しみは征服せられてしまつてゐる。そこに勝利がある。何故キリストは十字架を選んだか？ それは神によつて豫定せられたことであり、またキリスト自身がそれを選ばれた道である。何故彼は神に豫定された道と自己の選擇した道として十字架を選んだか？ 何故死を目的として選擇したか？ それは舊約の中を探らなければ判らないことである。十字架への判断は常識では判断出来ない。それはパウロも云つてゐる。

それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり（コリント前書一章十八節）これは常識以上だ。十字架の言葉など馬鹿臭いけれど、それは形而上的に考へる舊約の心持ちをもつて、キリストを見ると判ることである。

キリストは人類の運命を心配した。行詰りの人間に對してそれを打開する迄は 神の救を信ずること、神の救としても償ふべきものは償はなければならぬ。今までは羔の血で足りたけれど、羔の

血ではいけない時が来る、その時に人間の血が必要である。そして肉體を亡ぼして新しい靈體で甦る。さうすれば人間の罪は一度消える。肉體を亡ぼすたゞ一つの道は十字架であるとパウロは妙な哲學を考出したのである。之がロマ書六章のパウロの思想である。つまり肉體を亡ぼして靈體に甦る爲に、その人を磔刑につけて殺す、と云ふことをパウロは眞面目に考へたのである。そんな事は馬鹿臭いと云ふなら、この教は常識以上であり、必要とするなら十字架は神の意義として表れてゐる。

斯ういつたことは人間的見方であるが、此度は神の方から見ると、神は常識で判断出来ない。人類の歴史的經驗が人間を通して働いてゐるのだから、神が個人以上の世界歴史の方向を知らしてゐる聖書を讀むより仕方がない。この豫定によると、人類が失望してゐてもきつと神の救がある。一度亡ぼされたユダヤ民族が、優渥なる神の恩寵によつて、もう一度甦るといふことを信ずる。之を信ずるものに再生がある。この豫定を初めて眞面目に打立てたのがイエスである。イエスが人間を通して勇敢に神に近づいて行つたことによつて、世界歴史は轉向した。この道徳的勇氣をもつ人間が現れて來た時に、神の恵は人間に溢れて、十字架を通して凡ての民族に注ぎ込まれたのである。之を説いたのがパウロであつた。これはロマ書七章八章に詳しく出てゐる。ロマ書七章の十九節以下を見ると、煩悶して來たパウロが此處に來ると急に活づいてゐる。

神の愛と十字架

神の愛は十字架に於て現れてゐる。ロマ書八章の卅五節から卅九節に書いてある如く、パウロはキリストの愛から離れることは出来ないものである。この愛は單なる歴史的のキリストでない。死も命も御使も權威あるものも破り得ない過去現在未來を通じての絶対的法則である。それ自身が即ちキリストだといふ。救が絶対的法則であるのだから、死にも生にも如何なる場合にも困らない。神とは再生力そのものを人間に現ししてくれる慈悲なる神である。

斯ういつたことを悟つたパウロは、今まで拒んでゐた神を人間に傳へるために志を立てたのであつた。時はロマの道徳的廢頽時代、地中海沿岸は悲しみに満たされ、惱みの聲が津々浦々に溢れてゐた時に、再生の力を求めてゐる人間が無數に居るに違ひないから、この十字架の愛を傳へよう、と云つて彼は起つたのである。コリント後書五章を見ると、この勵みに變つてゐることがはつきり判る。

キリストの愛我らに迫れり、我ら思ふに一人凡ての人に代りて死にたれば、凡ての人間に死にたるなり、その凡ての人に代りて死に給ひしは、生ける人の最早己の爲に生きず、己に代りて死にて甦へり給ひし者の爲に生きん爲なり (新約聖書コリント後書第五章十四—十五節)

と、云つてパウロは靈體の甦と再生の宗教を傳へて廻つたのであつた。

日本の神道を見ても再生宗教の出現はない。大抵は悪人は地獄へ行くと云ふ。この地獄へ行くと云ふことは再生宗教ではない。これに反して悪いものも救はれるといふのはキリスト教に於る大発見である。浄土眞宗がよく似たことを云つてゐる。佛が慈悲なのだから何等の人間の工夫をしなくても、悪人でも成佛出来るといふ。ところが「どうしてそれが判つたか？」と尋ねると、「それは悟りを開いた人が云つたのだ」といふ。「その悟りを開いた人はどうして知つたか？」ときくと「それは佛が恵みだから」と云ふ。詰り事實がはつきりしてゐないのである。ところがキリスト・イエスは歴史的にそれをはつきり體驗した。彼は聖書の預言通りに歩いて、十字架をある目的として、人類が一番厭な悲しみを選び、それは自分の行動でない、神の豫定だから、自分が人類の悲しみを引受けるといふ氣持になつて引受けた處に、形以上のものを形として表したのである。此處に於て意識化してゐる。佛の浄土の慈悲は形に現れてゐない。

贖罪の意識運動

では何處に證據があるか？ それは親鸞が云つた、親鸞は恵は恵とした。イエスの教は、形でないものを形として現して、その歴史的十字架を世界歴史からはつきり現したのである。即ち世界の歴史は十字架を區切として、如何なる者にも救はんとする一つの愛を自覺し、人類歴史に於て初め

て意識したのである。その意識は戀愛にも似てゐる。神は我々を男と女に別々にちやんと創つて下さつた。男と女が會つて愛し合ふ心が起らなければ、その人は餘程どうかしてゐる。我々に感情が與へられてゐる以上、男と女が愛し合ふことは當り前のことである。

十字架は意識である。そして十字架を意識したのはキリストが最初の人物である。意識は隠されてゐる。それを発見したのがパウロである。パウロはキリストの氣持ちを解釋した。そして人間の意識を尊いものとした。この十字架意識をはつきりしなければ、眞面目になつて人の爲に死ぬ勇氣は出て來ない。たとへばクロボトキンの相互扶助論には本能的部分が入つてゐる。さうしなければ損だといふことが入つてゐる。キリストはこの損を意識して出發したといふ珍らしい意識運動を始められた。この意識運動がパウロにとつて餘りに強く大きいので彼は吃驚した。こんなに偉い人があつたらこれこそ正しく神の子だ。そしてまた絶大な神の恩寵である。それは十字架の奥に隠れてゐる深い意志で、神から出たのだと云つてゐる。そしてキリストの十字架を神そのものとした。神の内容としての神の意志がそれを通して出てゐるのである。

註 質問と答

A 『それでは、神の意志を人格化して表象としたものが十字架ではないでせうか？』

答 『さういふ風に取りらうと思へば取れるが、もう少し心理的なものですれ、たとへば人の爲にあやまること、

我々はたゞ言葉で云ふのであるが、その氣持が十字架です。神様濟みませんでした。何卒御救し下さいと云つて身代りになつてあやまつた。それは口先き許りでなしに形に表したもので、之は表象の非常に深いものだ、普通の表象には生命がない。けれどイエスの場合に於ては實際の生きた血を以て表したものだ』

B 『血の犠牲によつて人間を救ふことが出来たが、若しも十字架に限らず、他に救ひの道があればイエスは十字架にかゝらなくても他の道を選んだでせうか？』

答 『イエスはイザヤ書五十三章と詩篇の廿二篇を眞正面に受けとつて行つたのである。キリストは随分獨創的だつた、それは常識で判断出来ない、十字架は犠牲であり、神から見れば愛の表現である。神の言葉は個人以上だ、それをキリストがはつきりしたのである、神の聖旨を成したといふのはそれである。』

C 『佐倉宗五郎が百姓の犠牲になつて、堀田の殿様の爲に十字架にかゝつた、それはキリストの十字架とどれだけの差がありますか？』

答 『キリストの十字架は瞬間的な小作争議のためでなくて、深い歴史的事實を肯定し、目的として十字架を選んだのである。佐倉宗五郎は目的として十字架を選んだのではなかつた』

D 『それではキリストは受難を目的としたのですれ』

答 『はい、さうです』

E 『祈の終りにイエスの名によつてといふのは、さういふ意味ですか？』

答「罪惡を無視して我々を神の方に引上げて呉れようとしてキリストが立たれたためである」

F「それでは人間の仲介者としてキリストがあり、その仲介者によつて、我々の祈りが神聖化されて神に通じるのですか？」

答「仲介といふ言葉が悪い、私は意識と云つてゐる。ヨハネ傳では神の獨子と云つてゐる。意識に入つた獨子を、我々が自分のものとして受取るから、どうぞよろしく御願ひしますといふことである。昔流にいふならまあ仲介でせうね。我々はもう一步前に進んで、神は即ち十字架意識だと思つてゐる。神は詰らぬ者にも意識を持つてゐることを信する。我々は神の内容を信じて祈るのである。名に於いてはその事實に依つて祈るといふことである。愛によつて赦して下さい、といふその屈折が再生宗教の本質である。我々は十字架の愛を意識して出發しようといふのである。だからかへつて進歩的といふ人の中に十字架を失つて歩いてゐる人が多いやうである」

G「神は愛なるが故に聞き容れて呉れるのですね？」

答「けれどももう一步前に形に表れて下さつたのである」

H「なだめの供物とはどういふことですか？」

答「キリストの如き完全なものを神に捧げようといふことである。即ち神の氣持ちを持つてゐる者以上に完全なものはない、それはキリストであるからキリストを神に捧げようといふのである。」

父なる神、

どうかイエスの十字架上に現し給ふた尊い愛を我々も實行して、愛により日本を救ひ得るやうにイエスの精神を漲らしめて下さい。日本には大勢の労働者がゐます。そして大抵の人は困つて居ります。願くはイエスの事實をばつきり教へ、導き、實行を教へることが出来ますやうに。我々が出来ない時には、イエスの精神がさせて下さることを信じます。更に導いて下さい。イエスの名に依つて祈ります。アーメン

第五章 神と靈魂

父よ、わが靈を御手にゆだね (新約聖書ルカ傳二十三章四十六節)

靈魂の力

現代文明は餘りに近視眼的であつて、唯物的傾向が多くの青年の心を捕へてゐる。その爲め内なる力即ち靈魂の力に對する信頼が非常に薄らいで來た。人々は境遇の力や環境の力の唯物的方面を信頼し過ぎてゐる。故に資本主義の打開を勇敢に叫んでゐる共產主義者でさへ、所謂唯物的共產主義なる言葉を創り出し、外面的なる方面、物の方面に力をいれて、内なる力が外側の世界を支

配してゆく事實や、内側の力が湧き溢れて発見となり、發明となり、意志の力をもつて低い環境をも高く上げてゆく可能性のあることを願わない傾がある。

この傾向は現代の最も悲しむべき淋しい時代の流れの一つであると思ふ。内なる力の驚くべき活動と云ふことは、どうしても疑ひ得ない経験であるに拘らず、どうも此を信じようとしない。けれども實際環境の條件の最も悪い所にいつてみると、内側なる力の偉大性を痛切に感じさせられる。貧乏のどん底生活を送り、同じやうな貧乏な生活を同時にしてゐるものが、外側は同様であつても、内側の心の相異によつて環境が漸次變化して来る。私に嘗て斯ういふ経験があつた。私の家の隣にYといふ仲仕が住んでゐた。月九拾圓程の収入があるに拘らず、儲けて来るだけ呑んでしまふ。それでも足らないで、二人の娘を支那人に七拾圓でたゞき賣つたとかで、新聞に書きたてられ弱つてゐた。拾五圓の収入の中からでも、私は人を助けてゐるのに、九拾圓程の収入をとりながら娘迄賣つてしまふといふのは、此をたゞ環境の悪い結果だとのみ云ひのけてしまへるであらうか。私は多くの淫賣や前科者の人達と交つた。種々な誘惑の溢れてゐる中に住んでゐたが、一度も失敗には陥らなかつた。環境に敗けてしまふには、あまり私の靈魂は強かつた。どん底の生活の中にも、なほ純潔と美しさを保ち得る靈魂の力を信じてゐた。かゝる私の體驗を通して、私は外側の力にも屈せざる内側より湧き上る力を感じるものである。Soul force (ソールフォース) — 靈魂

カと印度の聖者ガンヂーは呼んでゐるが、日本でも此を、士氣、元氣、正氣、精氣等と名付けて居る。低い地平線を打ち破つて、より高い世界に達せんとする努力奮闘は、寔に貴く、發明も発見も、この力を信じてこそ初めて生れて来るのである。

心理學者ブントの弟子スタンレーホールは、精神分析の立場から見て「正氣と云ふか、Moral (士氣)の足らぬ民族は駄目である。ある民族はその貴い士氣を、阿片やコカインや酒のために駄目にしてゐるが爲に、益衰運に陥る」と云つてゐる。例へば、「支那は阿片のために衰へつゝある」と孫逸仙は喝破した。アメリカの土人は、酒と梅毒のために亡びの運命を辿つてゐる。アイヌも然りであつて、一九二八年秋、私は北海道をめぐつて親しく視察したが、民族のうちから Soul force が缺けた時に、如何にみじめに衰へて行くかをつくづく見ることが出来た。

靈魂力の勝利

一體、日本民族は、正氣を豊かに持つてゐる國民であらうか？支那人が北氷洋にも船夫として働かかと思へば、シンガポールの百度以上の炎天下でも平氣で跣足のまゝ車を輓いてゐる。それに拘らず、日本人は北へ行けば寒いと云ひ、南に行けば暑いといふ。かゝる状態で果して日本民族は眞に與へられた使命を果し得るであらうか。日本人が世界に向つて、その存在の意義を示さんとす

るならば、どうしても靈魂の力を把持しなければならぬ。印度のガンヂーは、此の靈魂の力を強く信じて、雄々しい戦を續けてゐる。彼は、英國に勝つ唯一の工夫は、劍でもなく金でもなく、正義の力、徳の力、靈魂の力であると主張して、その民を導いてゐる。さすがの英政府も、この意氣の前にはたち／＼の有様である。彼は幾度も失敗した。また失敗しさうな方法をもつて立つてゐるのであるが、彼の失敗は實に貴い失敗である。

スタンレーチヨーンズは「世界に於て最もみじめな失敗を遂げたのはキリストであつた。彼は國を建て得ず、然して十字架の最後を遂げた。その如くガンヂーの非協同の失敗も、寔に雄々しき失敗であつた」と云つた。

失敗必ずしも失敗ではない。見よ、宰相として十四年を送りし孔夫子は、諷いられずして野に下り淋しい漂浪の日々を送つた。官界の游泳術に倣ふには餘りに高い理想を抱いてゐたがために、彼はかの道徳の地に墜ちてゐた戰國時代にあつては、成功者とならず、野に下つて三千の弟子に道を靜かに教へた。然し誰か、孔子を指して失敗者と云ひ得よう。彼の失敗は、靈魂力の勝利を示すものであつた。「義を見て爲さざるは勇なきなり」彼は實に潑刺たる勇氣に満ちてゐたのであつた。

現代の政治家、青年、婦人は、この恐るべき靈魂力を認め得てゐるのであらうか。否、あまりに物質の世界に捕はれ過ぎて、靈魂力を信じな過ぎてゐる。そのために國を擧げて政治は亂れ、經

濟は行きつまり、家庭は淋しく、憂鬱の雲が民全體を閉ざしてゐる。

此處に於て、もう一度貴き靈魂の力を信頼して、見えざる力に目ざめる必要がある。内心より曠き來る嚴肅なる聲を聞き、内側を顧みて、こみ上げて來る力を待ち望め、外側に英雄を待望すべきではない。内側への待望でなければならぬ。これが靈魂について更に私が冥想したいと思ふ所以である。

靈魂の實在

不思議に人はあまりに人を信用しない。殊に現代人は、マルクスやデボリンやルカッチの口眞似をして、「靈魂は存せず。よし存するとも見えざるものなどに頼ることは出來ない。物！物！物なり」と叫ぶ。

決定の側だけを考へて、「凡ては決定されてゐる。環境と遺傳によつて人は凡て運命づけられてゐる。可能性などは存しない」と云ふ。然し、生命の現象をよく見てみると、此れと相容れない事實が多く存してゐる。

人類の指してゆく道は、自由への順禮である。自由を要求し、自由へ憧憬れ、自由の世界に羽ばたかんとしてゐる。若し凡てが決定の上に躍つてゐるとしたならば、何故内心より起る爆發が存し

てゐるのか？ 発見や發明が生れて來るのか？

獨逸が、ルール地方を奪はれて、燃料に窮すると、煙突型のものを廻轉させ、風の力を利用して進み得る船を發見して、之を補はんとした。環境が悪ければ此を打破つて、更に有利なものを創造する力が、内なる力に秘められてゐるのである。

五十年前、トーマス・エヂソン氏が電燈を發明した時、十一萬度實驗に失敗したと云ふ話は有名な逸話である。が、かゝる考へ及びもし得ぬ發明をなすのも、内なる力—智の力、意志の力、情の力に外ならない。

キリストは十字架にかゝつても、己を殺すその敵をさへ愛し切つた。何と云ふ靈魂の力であらう。フランシス・ガルトン (Sir Francis Galton) 卿は、チャールス・ダアウキンの甥であるが、その名著「人間機能の研究」の中に「我々人間は殆ど想像も及ばぬ程の驚くべき力を持つてゐる。例へば、人の飼へぬ動物はない。獅子でも虎でも、鯨でもアザラシでも、人が親切に世話してやるならば、喜んで害を加へず、その云ふが儘になる」と云つて實例を多く擧げ、歸納的にこれを論じてゐる。實際あの大きな圖體の鯨でも、食料を充分にやるならば、人間の云ふ通りになるさうである。私はアザラシの藝當を見たことがあるが、「來い」と云つて命令を下すと、その號令に従つてやつて來る。また虎や獅子を二十七頭一度に使ひ分けてゐた妙齡の婦人について聞いたことがある。

實に不思議ではないか。物から云へば、獅子は娘を左右すべきものである。そこに靈魂の力の神秘がかゝると思ふ。

環境を打破る力

人間はピアノを、また音叉を、そして遂にラヂオを發明した。そして又刻々に新しい世界を創造して行く。私は勿論、環境の力を否定するものではない。が環境の力を打破つてゆく力も存してゐることを信ぜずには居られない。ロマン・ローランは、「運命は存してゐる。然しそれは人間が與へられてゐる自由なる意志を放棄した時に働く」と云つた。マルクスの唯物論は人間の自由を放棄した時に始まる。即ち機械は人を生んだものであるが、機械を、人の幸福のために使ふことを忘れ、それより生ずる餘剩價値のみ産み出さんとして惱んでゐる。餘剩價値と云へば美しい學術的言葉である。が、これは貪慾價値である。儲けようと思つて餘剩價値を生まんとするのだ。然し、儲けようと思ふことは即ち貪慾に外ならない。そのさもない貪慾のために機械にひきづられ、此の悲惨な機械文明が實現して來たのである。靈魂力が足りないために機械に使はれるやうになつて來た。凡ての靈的な貴いものが、貪慾の泥濘の中にうごめいて苦しんでゐる。かゝる耐え難い停滯を打ち破る靈魂力が欲しい。此處に新しき更生が發見されるのである。

私は靈魂力を信する側に立つ。昔、デオゲネスと云ふ聖者が、キリストを信じた爲に迫害されて、荒野の奥深い穴に逃げこんだ。氣が付いて見ると、それは獅子の洞窟であつた、が祈りつゝ獅子に近づくと、獅子は肢を差出して來た。よく見ると針がたつてゐる。可哀想にと思つてこれを抜いてやつた。すると獅子は種々と食物をとつて來て聖者を養ひさへした。その後、また新しき迫害が起つたので、街に出て雄々しく戦つた處が、捕へられて死刑に處せられんとした。その時廣い演戲場で殉教者は多く獅子の餌食となつてゐた。聖者もやはりその一人として、數萬の觀客の前で獅子に食ひ殺されることになつた。然し不思議にも、聖者に立ち向つた獅子は急に態度をかへ、聖者の膝下にひざまづいて親愛の情を現した。見るものは等しく驚きの聲を放つた。然しそれはその獅子が聖者の救つた獅子であつたに過ぎない。即ち聖者の靈魂力に獅子がかなはなかつたのである。これは昔の物語であるが、ガルトンは此を近代的な科學の立場から證明してゐる。

此の靈魂力を信するか否か？ 道德力を己が物とするか否か？ 己の造りし機械にひしがれて吐息をつくとは何と云ふことであらう。靈魂の力に立つて機械を支配するならば、この世は永遠の春である。

精氣により貪慾を殺して、各々が愛と奉仕とに生きさへすれば、世界は美しい。我々は、靈魂力によつて、貪慾を殺すものとして立ちたい。

物と靈魂の關係

この靈魂力を信するものにとつて、此處に一つの問題がある。

靈魂力は認めるとしても、一つの靈魂と他の靈魂との交渉をなす時に、その仲介者となるものは、物の形をとつてゐるではないかと云ふことである。

然しこの仲介者たる物とは果して何ぞ。世の人は餘りに簡単に考へすぎて、誤解に陥つてゐる場合が多い。

物には容積と堅さと重さがあるが、この重さ堅さ容積と云ふのも、力の相對的關係である。力の動きつゝある傾向を或一點で見詰める時に物である。重さは引力の關係である。容積は質量である。之も速力に關係がある。堅さは一つの電子の周囲をめぐる衛星の如く配列せられたる電子の速力によつて生ずる。ルボンと云ふ學者は此を實驗して、硝子の管に水を通す場合に、その水の速度を速くすればするだけ、管の堅さは増して來ると言つてゐる。で、靈魂の仲介物たる物もやはり見えぬ力の一種であることが認められる。最近の哲學は、重さと堅さのない物質を考へるやうになつた。例へば夢の中の姿の如き、像はあれど重さも堅さもない。が矢張り物である。獨逸の哲學者はこれを靈體と呼んで、形をなしつゝ物でないものゝ存在を認めてゐる。

キリストの弟子パウロは肉體（ソーマ・サルケー）と靈體（ソーマ・プシケー）と云ふ言葉を用ひてこの關係を明らかに示してゐる。この見える物體を今日考へてゐるやうに、物として考ふべきか、それともメーテルリングなどの如く、もつと神祕的なものとして考ふべきものであるかは餘程問題である。近視眼的に物の浅い見方に止まつて、奥にある眞の姿を見ない誤謬に陥らぬやうにしなければならぬ。

私は原子論を信じ、電子論を知り、世界の多數學者アインスタインにも彼の主張する相對性原理を聞き質した。各方面の研究を綜合して、私は物は單なる物でないことを考へ、靈魂の活々とした神祕力が作用して存在するものではあるまいかとさへ考へる。物を通じて人格が相呼應する。即ち物は人格を通して得る心理的要素が含まれてゐるのではあるまいか。植物の中には心理要素が半分眠つてゐるのではあるまいか？春が訪れると、雌雄にわかれて美しい花が咲く。相愛し合つてゐるのだ。そしてその結果實をみぬらす。そこに不思議な、靈的とも見える神祕な春の世界を發見するやうにさへ思ふ。私は凡ての物を只外面的にだけ見る近視眼者を悲しく思ふのである。ラヂオの面白さ。人間の不思議なる機能、所謂心靈研究などを考へて見ると、實に不思議で、心靈學的な、或る神祕な世界の存在を信ぜずには居られなくなつて来る。人間は可成り迷信的でさへあり得る。

心力を發見すべき時代

ラヂオのコヒラーを發見したオリヴァ・ロッヂ博士は「二十世紀の發明はラヂオの發明—電子物質觀で止まらず、これからは、電子の彼岸にある靈魂の力の世界を發見せねばならぬ」と云つた。人間の可能性のうちにある記憶、聯想、判斷學習などに現はる、不思議なる力を活用しなければ、發明は行詰つてしまふのではないかと思はれる。さて假に今外側の發明が止まつたとして、これで我々の文明は果して幸福であらうか？

國と國とは戦争をなし、階級と階級は闘争を事とし、享樂を求め、貪慾に迷ふ、この唯物的な文化は果して幸福であらうか？科學の研究と共に、更に深い靈魂の世界の研究が必要ではあるまいか。我々はもう少し深い、靈魂力について冥想する所が知りたい。ラヂオの驚くべき力を思ふと共に、數萬年前より人間が話をしてゐたと云ふ事實は、何といふ不思議な事であらう。

また不思議な靈魂の力は、夢のやうな感應の中に現れる。滿洲で死んだ人の死を、それと同時に内地にをいてその人の姿を見たことと云ふやうなことは珍しくはない。唯物論者であつたイタリーの世界的犯罪學者ロンブローゾも、不可知論者であつた英國の哲學者スペンサーも、この神祕な現象に打たれて、皆心靈學者となつて死んで行つた。唯物の奥に靈的な存在があることを信ずる。

百數十種の發明をした東北大學の教授であつたS博士が、リックの天文臺を視察せんとした時、自動車がつくり返つて連れの一人は死んだ。ところがその時に、内地に於て奥様がその夢を見て驚いて電報を打つた。彼はその不思議を思ひめぐらし、電氣より微妙なる靈力の働をひし／＼と感じ、燃ゆるやうな信仰を抱くやうになつた。で、今や同博士は愛と熱をもつて精神界のために獅子吼してゐられる。

また奥丹後の地震の時、三高の學生が友人と旅行してゐた。綾部の友の家で荷物を置いて峰山に行つてゐたが、地震のため柱と柱の間に夾まれた。その夜、綾部にゐた友人二人が、夜中、うしろに火を負ふたその學生が、「ナイフ、ナイフ」と探してゐる姿を見たと言ふ。あとで調べてみると、柱にはさまれた友人は、隣から起つた火に燃やされて、「ナイフ、ナイフ」と叫んで死んださうである。こんな話を聞く度に、何かしら神祕な靈魂の力を暗示されるではないか。

死後の生活

最後に、靈魂を冥想するものは、死後に於ける靈魂の姿について考へる。

死して後 果して靈魂は消滅するであらうか？ 私にはさうは思はない。物だけならば消え果てるであらう。然し靈魂は物の中にある法則であり、力である。物がなくなつても力は残る。故に死に

直面しても消え失せるものではない。機械は破壊すれば凡て駄目になつてしまふ。が我々は或る目的を持つて生れてきてゐる。そして目的を持つてゐる者は、目的の達成されるまで連続すべき運命を負ふてゐなければならぬ。カントは人の持つ目的は善であるとなし、この善を完成すること、此の世では到底不可能であるが故に、死後の生活の連続が必要であると主張した。(志ある人は、獨逸の大哲カントの「實踐理性批判」の靈魂不滅の章を見られるがよい。)

人生は偶然と異り、一定の方法によつて動いてゐる。物質と機械と偶然が消えても、方法そのものは消え去らない。靈魂が生存の中に働き得る力、即ち目的性が残つてゐる。肉體としての私が消えても、宇宙の大きな神のフィルムにまかれてゐるだけである。フィルムを巻くと見えなくなるけれども、ないのではない。死と無とを混同する人がある。そして「無」が存在すると云ふが、有る「無」など云ふことは不合理な話ではあるまいか。有在する無は無でなくて有である。

ベルグソンは「物質と記憶」のうちに「存在としての無は有であつて、無は考へられない。腐つた釘に帽子をかける時、帽子は落ちる。然し釘から落ちたので、帽子はある。そのやうに無いと見えても有るのだ」と云つてゐる。私には、死は、まかれたフィルムであると考へられる。スクリーンの上には何も無くて眞白であつても、フィルムは存してゐる。私の父は死んだが無かつたとは、どうしても考へられない。神の成作し給ひしフィルムの中にしまつておいてあると思はれる。スク

リンの上での役目は済んだけれども、無くなつてしまつたのではない。必要ならばまたやれる。父を思ひ起す時、面目は躊躇として来る。死ぢやない！もう一つの世界に移つた、フ井ルムの中に這入つたのである。梢の露と消えて行つた愛らしい幼児、先立つていつたいとしき父母、悲しき別を告げた愛する戀人、彼等は死んだのではない。

神と靈魂の不滅

ロングフェローの「天使の足音」と云ふ詩がある。「愛妻を失つて六年孤獨を守る詩人に、靜かなる夜なく、天使の姿をもつて愛妻が見えざる姿で近づいて来る。握手し、抱擁し、接吻し、心ゆくばかり慰めてくれる」と云ふことをうたつてゐる。死しても實に、遙かに仰ぎ見る天の彼方に——性慾と肉的關係を離れて、清い姿で、自分の子に、自分の妻に、愛する夫に、父に母に、永久の像に在りて相見する日があるであらう。然も靈魂の不滅は、神の不滅を離れては考へられない。無限の神の懷に這入つて行つたから、我々の愛するものは不滅となるので、神を離れ、神を否定する處に、我々の愛するものゝ永生は考へられない。神を信するものゝみ不滅である。イエスは十字架の奉仕の後に「父よ、我靈を汝に委ぬ」と云つた。死んだのではない。神に靈魂をまかせて息絶えたのである。神に凡てをかへし、神に凡てをまかせて神の懷に歸つて行つたのだ。

日本の死亡率を見ると、一年間に、千人中二十人近くは死んでゆくことになつてゐる。殊に十五歳前後でよく死んでゆく。故に若い人は、いつの日にか招かれてゆく次の世界について、少しは瞑想すべきではあるまいか。少くも一年間に若い人の一千人中、五六名は再び顔を合はせ得ないのである。嚴肅な絶好の死の聲が誰かを呼ぶのである。その時「準備がない故に待つて呉れ」と云つても、色ざめし死の顔は「ノー」と云つて、青褪めし唇でその人に接吻するであらう。斯る瞬間如何に答へ得るであらうか？ イエスはその時泰然として「父よ、我靈を汝にゆだね」と云つた。かくてこそ靈魂は不滅である。此の聖者が十字架の上で死を遂げてより、世界に於ける死に關する考へ方が變つてきた。

死は勝利の表象となつた。墓石は凱旋の記念碑と化した。死の力は何處？ 墓の權威は何處？ 愛は死よりも強い。神は愛なれば、死を吸収してその苦痛をも呑んでしまつた。愛によつて凡ての暗きものは包まれた。即ち最後の瞬間においてさへ愛する神を信じ、「父よ、我が靈を御手にゆだね」と叫んで死んだイエスが、永遠に父へ魂を返してから墓標の文字は一變した。エジプトのピラミッドの中には、地獄に行つたら嘘をつけとか、恐ろしい鬼が迎へに来るとか悲しいことが書いてあつた。然し、イエスの死後世界の墓標には「昇天」とか「父にかへる」とか記されることゝなつた。死去とか、歿去とか悲しい文字は用ひられなくなつた。

キリストによつて、死は永遠に踏みじられたのである。無限と信することによつて、有限の世界から無限の世界へ移されるのである。

靈魂の力こそ、我々に永遠の可能性をまで與へてくれる。

天の父なる神様

人の地上の生活は朝の露の雫です。朝、木の葉の上に宿つた露が、やがて日中に輝く太陽に消え失せてゆくのと同じであります。然し、この限りある生命にも、あなたが不思議なる力を與へ給ひし貴き攝理を思ひます。必ずやこの短き私共の生が終る迄に、なすべき使命の與へられてゐることでありませう。

たとひ、寒い風の吹く處、冷たい氷の張りつめる處に居つても、私共の瞳を永遠の世界の方に見定めることを許して下さい。願くは地上の生活に在いて混亂と失望のうちに迷ふ我々を憐んで下さい。九十九匹をおきて一匹を尋ね給ふ愛の牧羊者よ、迷へる我々に歸つて下さい。死の前にも慌てず、永遠の御國を仰がせて下さい。永遠に展開してゆく可能性と成長とを信じて、あくまであなたのため働き、理想と無限にあこがれて勝利の道を歩ませ給はんことを、キリストイエスによつて祈ります。アーメン

第六章 神と祈

パリサイ人立ちて心の中に斯く祈る「神よ我はほかの人の強奪、不義、姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。我は一週のうち二度斷食し、凡て得るもの十分の一を獻ぐ」然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて云ふ「神よ、罪人なる我を憐みたまへ」われ汝らに告ぐ、この人はほかの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり、おほよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるゝなり。(新約聖書ルカ傳第十八章十一—十四節)

神に會ふ道

我々の中で宗教的經驗の少ない人は、祈ほど時間潰しはないと思ふかも知れない。またキリスト教會に行つて、説教を聴くのは面白いが、祈になると眠くなるといふ人がある。けれど祈は、神に會ふ唯一の道である。宗教が單に遊戯や理屈であるなら、祈なんか要らない。けれど宗教は、理屈でもなければ、藝術でもない、また修養でもない。宗教は單なる智、即ち理屈でもなく、單なる感情—即ち藝術でもなく、修養即ち道徳でもない。宗教は神に會ふ工夫である。どうすれば神に會へるかと言へば、それは祈の外に道はない。だから古い時代から祈の無い民族

はなかつた。かつて人間が地上に存在してから今日迄、祈のない時代は無かつた。必ず祈があつた。獨逸の東ベルリンの貧民窟近くに、風俗博物館がある。其處には風俗の面白いものが澤山ある。その中で私の目をひいた一つは、有史前から現代に至る迄、母が自分の子に乳をやりたいが無いので困つた末、乳の祈を神々に捧げてゐる。どういふ風に神々に祈つてゐたか私は知らない。それから神話時代になり、獨逸の雷の神に祈を捧げるやうになつた。だん／＼歴史が目醒めて近代になり、キリスト教が來たけれど、驚いた事には石器時代と同じ方法で祈つてゐる。それは母の乳房の形のものを作つて神に捧げてゐる。キリスト教になつてからマリアにそれを捧げるやうになつた。石器時代から鐵の時代になり、銅の時代になり、形はいろ／＼變つて來てゐるが、石器時代から、現代の鐵力時代になる迄、すつと同じやうに祈つてゐる。子供に乳をやりたいが、ない、その時の祈りたい氣持は母が子に對する愛の本能である。祈らざるを得ない氣持から祈つたのである。子供から云へば吸ひたい氣持、それが祈である。祈はつまり天の神の乳を吸ふことである。

舊約聖書の最初に、アブラハムは天地の神をエルシャダイと云つてゐる。エルシャダイとは乳房を持ち給ふ神と云ふことである。何處へ行つてもエルシャダイがある。人間は何處へ行つてもこの永遠の乳房を吸ひながら生きてゐる。私はこのエルシャダイの氣持がわかる。私は自分の詩集を「永遠の乳房」と名付けた。それはアブラハムの神、エルシャダイの氣持である。

祈 と 成長

我々は母の乳を飲んで大きくなつたのである。大きくなりたいと思へば乳を飲まなければならぬ。だから如何なる處にも、如何なる時にも祈はつきものである。祈を失ふなら人間は靈戰に於て惨敗である。

生れて初めて吸ふ赤ん坊の乳は薄いものである。「祈りしたつてきかれないだらう、神が居るのかなア」と思つても、それは聞かれる。電話をかけてから、「出て來るのかなア？」と思ふのと同じである。姿がないのに話するのは妙なものである。私が、最初電話をかけたときにはをかしかつた。祈は電話のやうに一人で話することである。「もし／＼、神様、おねがひします」と云つても、神様は返事して下さるかどうか解らない、いや神様は返事してくれないだらう、と思ふ。

が、それではどういふ風に神様は返事して下さるか？ 神様が返事する時には人間の聲では返事なさない。「神様、どうぞよろしく御願ひします」と云つた時に「よし、よし」と云つて下されば解るから、そんならお祈しようと思ふ。電話で、「もし／＼」と云へば「何番、何番」と云つてすぐ繋かれる。

が、どう神様は返事をして下さるか。神様はいろ／＼な事實で答へて下さる。例へば、「神様、勉

強したいと思ひます」「神様、まつすぐになりたいと思ひます」「神様、社會をよくしたいと思ひます」と祈ると、實際社會はよくなる。さういふ風に事實で答へられる。神の聲は神の指先で判る。神の言葉は人間の言葉とは違ふ。宇宙全體が神の言葉である。ラヂオの言葉が傳はつて行くのと、人間の言葉が人に聞えるのちがふ。我々が話して聞えるのは空氣の震動である。ラヂオは電波といふ電氣の波による。風なら波の長さは短い、ラヂオの波の長さは何メートルと云ふ、一番少くて八メートル位の波で、或ものは三百五十メートルもの波長を持つて進む。が、神の答はもう少し違つたもの、それは凡てのものを通して現れる。この事實がいろんな形であらはれて来る。

聖書に 顯れし 祈

歴史上に於て之が最もはつきりしてゐるのは聖書である。舊約聖書全體は祈の答へられた全部の經過書である。舊約聖書には、何千何萬と云ふ祈の結晶の事實が残つてゐる。之等は、祈はきかれるものだといふ事實を示してゐる。恰度、赤ん坊が乳を吸ひたいと思ふ時に、其處に母の乳が待つてゐるやうに、人間がどうかして欲しいと云ふ時に、神は人間の祈に答へるやうにして下さる。例へば舊約の一番大きな祈は、アブラハムの祈である。甥のロトを救ひ出したいと云ふ祈、或ひ

はアブラハムの孫に當るヤコブの祈、或ひはヤコブの息子のヨセフの祈は聞かれてゐる。ヨセフのお前等どんな事があつても必ず國に歸れるぞといふ願は、四百年かゝつたがとう／＼容れられた。ヨセフの祈は四百年後に應へられた。モーセの祈は四十年後に應へられた。或ひはエリヤの祈にしても、絶望して祈つた時、神様は、お前一代では出来ないから、エリヤを選んで、斯うせよ、ユダヤには斯うせよ、イスラエルには斯うせよ、と云はれたが、一代では出来なくて、弟子に應へられた。一代ではこたへられないが、時によると四百年もかゝる。人間は一代で完成しない。更に下つて、ユダヤ民族がもう一度、あの恐ろしいアッシリアベビロンに捕へられた時の、國に歸りたいと云ふ祈は七十年目にきかれた。そしてイエスが生れ、イエスの祈がまたきかれた。イエスの一生は全くの祈の生涯であつた。

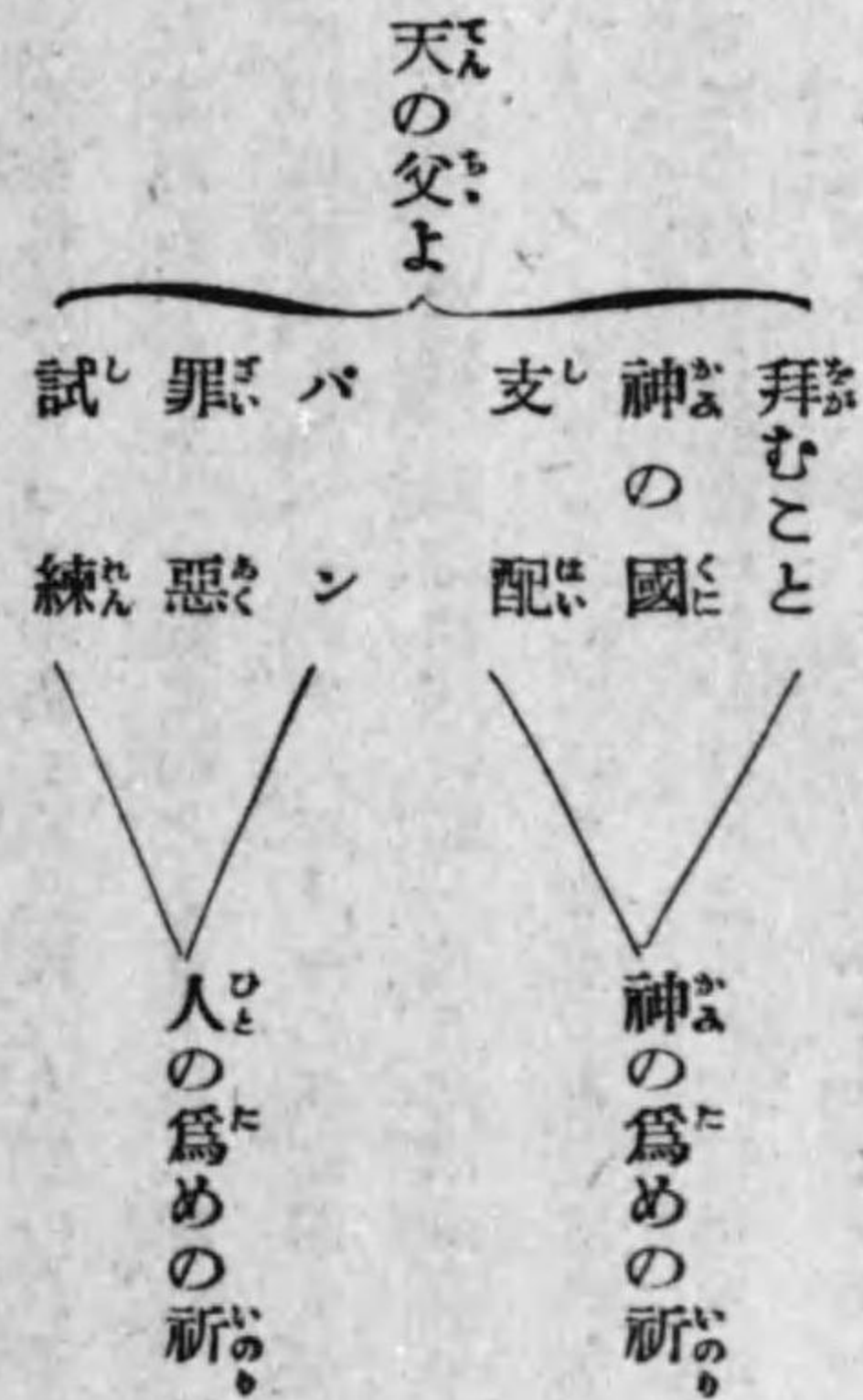
聖書にはイエスが祈りしたといふことが數十回書かれてゐる。はつきり書かれてゐるのは二十三日だと思つてゐる。處々複數に書いてある。ある時は山の中で、或時は朝早く、また徹夜して祈つたことが書いてある。ヨハネが殺されて後、群衆が騒いだとき、イエスは徹夜して祈られた。アブラハム・リンコルンは奴隸解放のために夜通し祈つた。今は墓場になつたが、ゲツチスブルグの山の中で奴隸の爲に祈つた。アブラハム・リンコルンの祈は本能的である。疑へと云つても疑へない。祈を否定しても口に出て来る。啞者でない以上は、乳を飲むやうに祈は出て来る。しかし、

時々人間に啞者の子が生れるやうに、祈をせずには大きくなる人がある。しかし啞者であつても人間は飯を食ふ。健康な者ほど多く食べる。そして食べるだけ成長する。

イエスは歌つては食事をとり、食事をしては祈つてゐられる。イエスは祈の人であつた。イエスの祈は我まゝの祈とちがふ。我まゝな祈は一つもない。キリストの祈は神の國實現の祈であつた。モーセの祈が奴隷解放の祈であつたと同様に、イエスの祈は、病人の爲、弱者、罪人のため、弟子の爲、神に感謝する祈であつた。斯ういふ祈は必ずきかれる。

主の祈

主の祈は最も美しい。これより以上の祈は出来ない。



第一は神の本質についての祈である。人間の爲すべき第一は我儘を捨て、神の云ふ通りになる。

拜むとは絶対の歸依である。おまかせしますといふ意味である。之を神の方から云ふなら、神は人間にある使命を負はせてゐる。人間は神の榮光を現す爲に生れてゐるのだから、我儘を云はず、神の飾りになるやうに祈る。或者は冠の玉となり、ある者は冠の紐となり、或ものは隠れた處に用ひられるかも知れないが、一人一人ある使命に生きてゐる。ある人達は髪の毛に生れるかも知れない。けれど髪の毛なんかになるのは厭だと云つて、みんな抜けてしまへばをかしなものになる。だから、髪の毛でもいゝ、みんな不平を云はないやうにしなければならぬ。みんなが冠の玉となれるわけがない。ある人は爪になるかも知れない。爪も飾りである。そこで拜まして下さいと云ふ祈が出る。

次は神の國についてである。仙人道とちがひ、大勢が寄つて社會を作つて神の國を實現するやうにとの祈である。日本だけが神の國になるのではなく、支那だけがよくなるのではなく、全世界が神の國になるのでなければならぬ。地圖にはないが、永久の神の國を作ること祈らなければならぬ。しかし神の國は心の問題である。時が來るとうつる。だから如何なる時にも、神の支配がつきますやうにといふ祈である。それには時と處が要る。永久に神の支配が歴史上にあつて欲しい。單なる唯物史觀、物質主義でなく、永久に神の國があるやうに。あの弘安四年元寇の戦の時神風が吹いたやうにその時だけ吹くのでなしに、いつも永久にあるやうにといふ祈である。けれど神はあきら

める時がある。それを聖書には聖霊が離れると書いてあつて、人間が悪を善といひ、善を悪と云つて偽る時に、聖霊が離れる。

五百羅漢を見に行くと、あまのちやくがある。上のものが下に付き、下のものが上について、價値の轉倒をして、善と悪を反對にし、悪を理想とする者がある。石川五衛門を理想とする泥棒は、同じ泥棒するなら大きな泥棒になりたいと思ふ。大西健次郎は人を殺すのを自慢にしてゐた。三池の炭坑に十五年居て罪を犯した、俺は巡査を殺したのだと云つて自分の罪を自慢する。そしてまた人を殺した。

十九世紀末に、フランスに悪を讚美した詩が出た。舊約聖書烈王記略下の第二十四章三―四節を見ると、マナセの罪に就て書かれて居り、默示録にも終になすにまかせよ(二十二章十一節)と云つてゐる。それをイエスはどうかお見棄てなく救ひ給へと云はれた。

日常生活と祈

イエスはパンにつき、今日も食事を與へ給へと祈つてゐられる。だから生活の事について祈るとは間違つてゐない。職業を與へて下さい、家を下さいと云ふときに、神はやらないとは仰しやらない。必ず與へて下さる。私には澤山斯ういふ祈りが聞かれた経験がある。

貧民窟に居ると大勢が呉れ呉れと云つて来るが、私には金がない。かつて私は、十六人の病人に寢込まれて困つたことがあつた。その時私は「神様、病人が十六人寢てゐます。私は金を持つてゐません、彼等を食はすことが出来ません、神様どうか今日私に、貳圓下さい」と祈つた。その日の中に五圓の金が何處からか送られて来た。そんな事は度々ある。自分一人ならいゝが、大勢が困つてゐる時には祈らざるを得ない。

エリアがイスラエルの暴虐に反對して、イスラエルに雨露降らされと云つた時に、雨は降らなかつた。またエリアがケリテ河のほとりに三年間居た時、一羽の鳥は毎日毎日の爲に食物を運んだ。不思議に我々が眞直な道を踏んでゐると、鳥が神の使になつて来るやうに、全然知らない人が助けしてくれる。必ず神は鳥を通して助けてくれる。助けてくれる人を私は鳥と云つてゐる。之は事實である。嘘だらうと云ふ人があるなら、私の仕事を見て下さいと云はう。一生懸命私は働くが、私一人が働いても労働階級を助けることは出来ない。何千羽か何萬羽の鳥が来て、助けてくれなければ駄目である。

ジョーヂ・ミューラは決して人に寄附金を乞はなかつたが、祈つてばかりゐて千何百人の人から寄附金が来た。パンに於て金錢上に於て答へられる。それは體験の事實である。また罪の許し合ひをしなければならぬ。人に知られない罪があつても許される。その罪を許さう

と思つて、イエスは十字架にかゝられたのである。許されるから罪を作つてもいいと思ふやうではいけないが、神の前にあやまるなら必ず許される。その爲にイエスは十字架の前に自分をはりつけにかけられたのである。

試練と祈

次は試練についての祈である。罪惡は既に犯してしまつてゐることで、人間と人間との間の問題であるが、試練は未來に關してゐる。ロマ時代には、クリスチャンは不安で心配で仕方がなかつた。この時に苦難より救はせ給へといふ祈は自然に出て来る。来るべき苦難より、颶風、旋風の中心より外しますやうにといふ祈は必ず、神が聞入れて下さる。

斯ういつた祈をせよと、イエスは教へられたのである。神の第一祈と人間に關する第一の祈とは似てゐる。神に就ての第二の祈と人間に就ての第二の祈と似てゐる。また神についての第三の祈と人間に就ての第三の祈とは似てゐる。生活の爲にはパンを求め、神の國の支配を受ける爲には罪をゆるされ、愛するために罪を許されるやうにする。それには祈らなければならぬ。この祈以上に徹底したい、祈は出来ない。之を我々は模範の祈、即ち主の祈といつてゐる。

イエスがこの祈を教へられてから何年後も、キリスト教は、何億、何百億、何兆の人によつてこ

の祈は續けられてゐる。そして我々は祈はきかれるといふことを信じてゐる。それは理屈ではない。不思議に祈をすると、人間は嬉しくなる。別に要求をしなくとも、唯神を拜むだけでも祈である。父親にお早うといふだけで親孝行である。「神様、よいお天気でありがたうございます」、讚美も感謝もみな神に捧げる祈である。祈と云へば要求だとはかり思ふが、祈は神との對座である。求めるだけでない、讚美であり感謝である。祈と云へば神主が云ふやうなものだと思つてゐるのは間違で、「神様、お天気がよろしうございます」で結構である。また甘へる必要はないが、むつかしい漢語を用ふる必要もない。父に話するつもりで祈ればよい。二つ三つの子供なら、「神さまありがたうございます、アーメン」でよい。

祈の自由

アーメンといふことは誠にといふことである。之はセム人種が何千年か用つてゐる祈の言葉である。私は臺灣の三十六の教會を廻つたが、臺灣の支那人はアーメンと云ふ言葉を用はない。神様アーメンと云ふ代りに誠心よりと云つてもいい。アーメンといふことは誠にと云ふことである。時によると、團體意識を強くする。我々がアーメンと云ふのが恥かしいやうでは駄目である。アーメンは六千年の祈がきかれる證明書である。言葉なんか下手でもいい。労働階級の方々や貧民窟の人

達はよく言葉を間違へて用ふ。貧民窟のある人は、感謝といふことだけしか知らないで、「飯が食へないで感謝します」などと云つて、どこにでも感謝といふ言葉を用ふが、神様は知つてゐて下さる。イエスの祈には、「父よ」と云つて「神」とは決して云つてゐない。イエスは餘程やさしく通俗的な言葉で祈つたやうに思ふ。だから、下手でも何でも自由に祈るのがいい。私が初めて宣教師の處で十五の時祈つた時には、「神様 私をキリストのやうにして下さい。アーメン」と云つただけである。之が、私が祈つた最初の祈である。我々は祈るときに堅い氣持にならないうやうにしなければならぬ。

イエスはこれを屢々注意して居られる。それは恰も母の乳を飲むやうなものである。赤ん坊が一日に六回規則的に乳を飲むのと同じやうに、我々は繰返して祈る。佛教の人は南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、或ひは南無妙法蓮華經を何遍も繰返す。我々は我儘を基礎にせず、祈るときはさつくらんにぶち開けて祈るのでなければならぬ。之程民衆的なものはない。

日本の祈は取次が要る。一應神主に頼んで、神主が神に告げるが、キリスト教は各自が自由に祈れる。しかし一人ぼつちで祈つてもいいが、みんなで祈ることも大切である。イエスは、二三人居る處にも我も借に居ると云はれてゐる。大勢で團結して祈る。之が合衆の祈である。祈をし出すと恥かしい事は祈れない。通俗佛教の祈は、佛の方に向ふだけで、我儘な祈をしてゐる。ブラマ教は

初め、一人一人の祈であつたが、キリスト教が這入つて來てから祈が團結的になつた。祈により國が變る。獨逸の十萬人位の祈は、國を善く導いてゐる。我々が、「天の神よ、國を動かし給へ」と祈ると實際に動くのである。

「キリストの名によりて」

もう一つイエスは我名によりて祈れと云はれた。イエスの名によりて祈る。此の頃日本では、in the names of the people —— 「人民の名によりて」と云ふことが問題になつてゐるが、ロシアが宗教を嫌つたので斯うなつたのである。名とは、nameで、name は nomer と云ふことで、ノームとは實體と云ふことである。だから人民の實體によりて斯ういふ事を祈るといふことである。イエスには我儘がないから、イエスの名による祈は我儘であつてはならない。我名によりて祈るものは、何事によらず聞くと云ふことが、ヨハネ傳に約束されてゐる。が、子供にはイエスによつてと云ふことが長いし、わからないから用はなくてもいい。が實際は、イエスに教へられて祈をするのだから、イエスによつてと加へるのがほんとはである。一々祈の後で、之は我儘ではありませんと云ふのはをかしいから、御名により、イエスの愛により祈ると云ふのである。問題は我儘であつてはならないことである。

またルカ傳十八章一節には、常に祈るべしと教へてゐる。時によると、ひつこいと思ふ位でもいから祈るがいゝ。聞かれる祈については確信を持つて祈ることが大切である。私の爲に祈つてくれている人があると思ふと、私も祈らうと思ふ。祈の力は偉大である。身體が仆れさうに疲れてゐても、祈つて演壇に立つとびんとする。目まひがしても祈によつて立つてゐられる。靴屋のムーデーは世界のキリスト教的指導者になつた。シカゴに行くと、何萬といふ人が集まつてムーデーの話をきいてゐる。このムーデーの蔭には祈團といふ團體がある。祈は偉大なものである。祈をしてゐると國が變つて来る。

イギリスでは、ピリー・サンデーの祈禱會が祈つてゐると、町の犯罪率が減つたと云ふ。祈が續いてゐる間だけ犯罪が少くなる。祈をすると病氣が治る。高島兵吉は祈によつて肺病人を何百人と癒した。正しき人の祈は聞かれると聖書には書いてある。

祈の體験

よく貧民痛では、子供が来て、「先生、藥代がないから祈つてくれ」と云ふ。祈ると治つて歸る。私に力があるのでなく、神の力が働くのである。信じない者には嘘のやうな話である。

ロスアンゼルス或キリスト教會に、何萬人と云ふ大勢の跛者が自動車に乗つて来て、歸るとき

にはみんな立つて歸る。祈る力は病氣を治す。迷信ではない、事實だから仕方がない。死人も甦る。私の友人長谷川徹氏は腦底膜炎で數回死んでゐられたが、不思議に生き返つた。私はさういふ祈の力を信する。一九二五年の夏、御殿場で同志と偕に百萬人運動をしませうと云つて祈つた祈はきかれた。今私と共に働いてゐるバプテストの宣教師のお嬢さんがゐる。その人がアメリカから渡つて来る時その道はずつと祈であつた。眞剣な祈によつて、ずつと道が開けたのである。だから祈による運動は紅海を渡るやうなものである。嘘のやうな奇蹟が次から次に起つて来る。

私はこの事實を信するから、日本にキリスト教が來たのも祈であつたと思ふ。

石井十次先生が岡山に孤兒院を創つた時も祈によつて出來た。九十數人の乞食を收容して食物がなくて困つてゐる時、或人がパンがあまつて困つてゐるから貰つてくれないかと云つて來た。困つてゐる者に食物を與へ給へと祈つたから、きかれたのである。斯ういふ祈はキリスト教にいくらでもある。だから私は凡ゆる問題について祈る。國について、政治、社會、結婚、また家庭の問題について祈る。自分ばかりでなく、労働問題の爲に、農民運動の爲に、失業者の爲に、何千人何萬人の炭坑労働者の爲に祈る。神は二百五十萬の奴隸を無一物で救はれた。イエスの祈はローマを征服した愛の祈であつた。

天の父、

確信をもつて祈ることを教へられて感謝します。一つ一つの問題について、國につき、家庭生活につき、自己の缺點につき、試練につき、一々あなたが祈に答へて導いて下さい。今日日本の農村は疲弊して困つてゐますから、どうか日本の農村問題についても、或ひは労働問題についても祈りますから、その行く道を示して下さい。鑛山の中に、或ひは幾千と並ぶ帆船の乗組員に、キリストの精神を傳へ、みんな喜びつつ笑みつつ、愉快に働くことが出来ますやうに。日本にある五万二千人の公娼を呼醒し、八万の藝妓に福音を傳へしめて下さい。家庭に於る人達に、日本の隅々に、北海道に琉球に、福音が隅から隅まで行き渡るやうに導いて下さい。その爲に同志をめぐみ立たせて下さい。イエスの名によりて祈ります。アーメン。

第七章 神と聖書

この書はキリストイエスを信する信仰によりて救に至らしむる智慧を汝に與へ得るなり。聖書はみな神の感動によるものにして、教誨と譴責と矯正と義を薰陶することに益あり。(新約聖書テモテ後書三章十五、十六節)

聖書の力

聖書とはどんなものか、新約聖書とはどんなものかと思つてゐる人があると思ふ。新約聖書と舊約聖書とは對照になつてゐる。新約は舊約に對する新しき約束である。舊約約束は、ユダヤ人が神の法律を守るなら、お前等をよい民族にしてやらうといふ法律であるが、新しい約束は、イエスの愛に頼り、十字架の上で流した血を信するなら、よい人間にしてやらうといふイエスの約束を信する事である。

日本で、聖書を読み、新しく生れ變つた人は随分多い。かれこれ五十年前、日本で初めて札幌を開拓して、その開拓使になつた——今日で云へば拓務大臣——黒田清隆伯が、札幌に西洋流の學校を作らうと云ふので、アメリカからクラークといふ教師を頼んでやらうといふことになつた。とこ

ろがクラーク先生は、聖書を教へなければ學校を開いても駄目だと云はれた。

が、明治初年頃には聖書を教へるのは國法違反であつた。クラーク氏は聖書を教へられないやうならアメリカへ歸りますと云ひ出した。そしてとう／＼横濱から室蘭へ船が着く迄、議論を続けけた結果、黒田伯が負けて、そんなら聖書を教へてもいと云ふことになつた。斯くしてクラーク先生が學生に聖書を教へたのは、僅か八月月であつた。けれどそのクラーク先生から教へられた學生の中から、新渡戸稻造博士、男爵佐藤昌介氏、内村鑑三氏、宮部金吾氏などが出て、組の中でクリスチャンでない者は一人位しかなくことになつた。斯様にしてクラーク先生は、今日の札幌大學の基礎を据えたのである。

聖書はそれ程感化力がある。八ヶ月聖書を教へただけで、大學に聖書的精神が廣まつた。札幌大學の講堂の前へ行くと、クラーク先生の胸像がをかれてあるが、大した事だと思ふ。聖書を讀むことにより如何に偉大なる人物が現れたか、わかる。

伊勢の神宮に十數人の神官がゐた。明治初年に、キリスト教を退治しようと思つて、外務係が聖書を讀んでゐた。そしてどうしてもこのキリシタンベテレンを研究してみようとした。聖書を讀んでゐて、之はほんとうだらうか。どうも耶穌教が憎いと云ひ出した。當時森有禮氏が文部大臣をしてゐた。森有禮氏は日本に初めて女學校を作つた人で、後に伯爵になつたが、西洋からバプテスマ

を受けて歸つたとは云つてゐたものゝ、當時はあまりキリスト教の信仰がなかつた。森有禮氏は伊藤博文に愛せられた人だつた。けれど耶穌の文部大臣では困ると云ふので、伊勢の神主がやり込めてやらうと云ひ出し、何か不敬な事があればと狙つてゐた。ある時、森有禮氏が奥殿の幕をステッキで上げたと云ふので、殺してしまへと云ふ噂が立つた。そして、西野文太郎と云ふ男が、明治二十二年二月十一日の憲法發布の日に官邸に行つて森有禮氏を殺してしまつた。ところが、伊勢の神官をしてゐた外務係の人が最初この事を云ひ觸らしたが、どうも氣になつて仕方がない。そして聖書を一生懸命讀んでみた處が、大に感じた。天地の神は一人しかない、そしてキリストは一人である、氣が付いて、とう／＼伊勢神宮の神主が聖書を讀んでクリスチャンになつた。この神官は福山といふ、數年前神戸青年會の主事をしてゐられた福山順治といふ人のお父様であつた。そして不思議な事には、西野が逃げて來たものを圍まつた友人がまたキリスト教になつた。森家では、父が殺されたやうな宗教を信じてはいけなないと云つてゐたが、三男坊の明氏がどうしてもキリスト教は眞實である、と云つて、一家の反對の中にバプテスマを受けられた。聖書を讀んで殺された人も殺した方も、みんなクリスチャンになつた。聖書は不思議である。

もう少し遡つて、明治になる前の事を考へてみよう。佐賀の鍋島公の家來に、西洋人の取扱係をしてゐた村田若狭守といふ人があつた。その頃、フルベツキといふ和蘭人の醫者が長崎の出島居留地へ來た。そして日本と和蘭とは交通を許された。西洋では日本へキリスト教を傳へるには和蘭人をやるのがいと云ふことになつてゐた。日本はイギリスと交通するやうになつてから、いよ下田を開港する時に、和蘭人をやらうと云ふので、フルベツキといふ醫者が送られて來た。日本はその頃まだ醫學が進んでゐなかつた。ところが不思議な事に、長崎の村田奉行に漢文で書かれた聖書が手に入つた。また「天道遡源」と云ふ本が手に入つた。ところがキリシタンパレンの法を日本に入れない爲には、是非さういふ物を読んでおく必要がある。奉行はそれをわざ／＼讀まなければならなかつた。奉行は讀んでならないものを澤山藏に持つてゐた。讀んではならないものは餘計に讀みたいものである。奉行の兄と弟が、別々に讀んではならないものをこつそり讀み出した。聖書を讀んでゐると、成程ほんたと思はれることが書いてある。天地萬物は一人の神に作られた。キリストは偉い、キリストを磔刑にかけたのが間違つてゐる、と思ひ、このキリスト教が擴まつてゐるかどうかを、オランダ醫者の處に兄も弟もこつそり聞きに行つた。聖書を讀んでゐることが判れば殺されるので、二人とも心配して人拂ひをし、漢文の聖書を取り出して、之はほんたと思ふが、西洋に斯ういふ宗教があるかと訊いた。醫者はあるといふ。私は

こんないゝ事を書いた本はないと思ふ。私は父の藏の中でこれを読んでゐる、と各自同じやうなことを云ふ。ところが醫者の方では、二人が別々にやつて來て、うまい事を云つて私を陥れるつもりだな、と思つてその話に乗らなかつた。さうしてゐる中に兄と弟は毎日毎日來るやうになつた。弟の方でも、「あれはほんたか。ほんただつたら教へて下さい」と云ふが、醫者は「うん、ほんただ」と云つてキリスト教を説明すれば首が飛ぶかも知れないと思つてゐるので、なか／＼警戒してゐた。或日、兄弟が二人醫者の家ではつたり出會つた。醫者はこの時に試してやらうと思つて、「お二人ともキリスト教に御熱心のやうだが、あなた方は研究を續けられますか」と訊いた。二人とも「やる」と云ふ。それから二人はこつそりと熱心に研究し出して、バプテスマを授けてくれと云ひ出した。そしてキリスト教禁制の禁が除れない明治前に、バプテスマを受けたのはこの二人であつた。私はこの人の孫を知つてゐる。不思議な事である。キリスト教を信する者は死刑に處すといふ立札が立つてゐる時に、奉行の家の者が眞先にバプテスマを受けたのである。之は聖書の感化である。

五 錢の聖書

早稲田大學を出た人で「武俠世界」と云ふ冒險的な雑誌を出してゐた河野嘲風といふ人の「五五

の春」といふ書物がある。その中に、中學の三年生が、ある日聖書賣りが来た時に、買ふまいと思つてゐた聖書を五錢出して買った。館パン二個半に當る五錢を奮發して買つてみたが、讀んでみても少しも面白くない。馬太傳の初めを讀んでみても少しも面白くないから放つて置いた。けれど東京に遊學する時になつて、別に讀む氣もしなかつたが、聖書は有名な世界の本だから何か参考になるだらうと思つて、行李の底に入れて行つた。が、東京へ行つても別に出してもみないで放つてをいた。そして大學の豫科一年が済み、二年も終つたが一度も讀まないで相變らず放つてをいた。それが本科二年の時にくと讀む氣になつた。そして山上の垂訓の處を讀んでゐて、成程、トルストイやダンテ、ラスキンの思想がこの聖書の中にみな書いてあると氣が付いた。そしてキリスト教會へは一度も行つてないが、聖書はよいと云ふことに氣が付いた。私はこの河野氏の告白ほど立派なものはないと思ふ。我々の中には恐らく聖書を持つてゐるだけで讀んでゐない人があるかも知れない。

S 公爵夫人は、坊ちやんが亡くなつた時淋しくなられた。佛教であつたので法華經を讀んでゐられたが、おさまらない。聖書を讀んで之がほんとの宗教だと判つてからは自分の家で聖書研究を始めた。之が日本の貴婦人の宗教である。之は貴婦人のみではない。ある活版屋の門先で、赤い軍旗を立て、説教してゐるのを聞いた活版屋の小僧は、初めて決心して祈つた。「私に御用があるなら用つて下さい」と。それが今日の救世軍少將の山室氏である。山室氏は聖書を讀んで、こんな

いゝ本はない。聖書の一ペーヂでも讀めば、人間は生れ變るに違ひないと思つて、五錢で買つて来た聖書を一枚一枚切つて、道行く人に分けてやつた。買つた人の中には迷惑した者もゐただらう。或人は假名ばかりのマトイ傳一章や、ルカ傳三章の系圖を貰ひ、ある人はまたロマ書十六章の挨拶ばかり貰つたであらう。けれど兎に角、山室氏はそれ程聖書に對する神の力を信じたのである。

美作の國の法然上人の直系である立石家が聖書を讀んでキリスト教になり、或は蓮如上人の十八代の孫が札幌でキリスト教になつた。彼は龜谷凌雲氏と云つて富山縣で牧師をして居られる。足利尊氏の二十六代の孫で、阿波の蜂須賀侯の家に隠されてゐた足利さんが、今日同志社大學の主監をして居られる。今でも五山の法事には足利さんが行かなければならぬと云ふ。が、足利さんは熱心なキリスト教信者である。また、日本の武士道の元祖山鹿素行の子孫、山鹿旗之進氏は青山學院の先生をしてゐられるし、一族がみな傳道してゐられる。乃木さんが山鹿素行の紀念祭をする時に耶蘇教で行つた。武士道の本山が耶蘇であることは面白い。或ひは淨瑠璃語りの竹本呂昇が聖書を信じてゐることも愉快なことである。

斯様に、日本のキリスト教は不思議に低い處から、高い處に聖書によつて廣く感化を與へられてゐる。そこで我々は考へたい。斯くの如く、キリスト教は明治になる前から、大名の間に、奉行の間に、立派な名家に、維新の元勳に、或ひは、法然上人の子孫に、親鸞の子孫に、また神官の家に

その種が植え付けられた。或ひは學生の行李の中に入つてゐた聖書が物を云ひ始めた。聖書を讀むことは一つの領土を征服するより勝つてゐる。ヴヰクトリア女王は「たとひ私が印度を失つても聖書を失ひたくない」と云つたと云ふ。

人生讀本としての聖書

聖書は四つの福音書即ちイエス傳、二十一の手紙、一つのイエスの弟子達の言行録即ち使徒行傳、更に豫言の黙示録を含めて二十七卷から出來てゐるものが一冊になつてゐる。この二十一の手紙の中、十三迄はイエスの弟子パウロの手紙で、八つは他の弟子たちが書いてゐる。それは主として五人の人間が書いてゐる。ペテロ、ヨハネ、イエスの兄弟のヤコブとユダ、また誰か書いたか判明してゐないが、ヘブル書はパウロ系の人が書いたであらうと考へられてゐる。ヘブル書はパウロの筆付によく似たものである。之等が新約の聖書である。

私は之を讀む時に、小説を讀むやうにすつと讀んで貰ひたい。さうすると、解らない處は飛ばして讀んでもいい。魚を食べる時に頭から食べない。脊骨を抜き、頭も残して食べる。あとは根氣よくたゞきにして、スープにして飲めば一番いい。聖書はたゞきにしなれば解らないと思ふなら間違である。食べられるだけ食べたらいい。けれど鱈は食べられない。鱈は煮て膠にして食べればい

い。よう食べないのは料理法を知らないからである。すつと讀んで解る處だけ讀んだだけで、足利の子孫も耶蘇教になれば、法然の子孫も、山鹿素行の子孫もキリストの弟子になるのだから、福音は我々に徹底する。之は萬民が、何十遍でも、何百遍でも、何千遍でも、一生讀んでも飽きないものである。千九百年の間クリスチャンが何度讀んだか解らないが、いつ讀んでも、飽きない。目出度い時も、悲しい時も、淋しい時も讀み、旅行の時も讀むと云ふ風に、牛乳を飲むやうに讀むべきものである。牛乳を飲めば我々の滋養になるやうに、聖書は生命の書である。聖書を讀めば必ず、大きな感化が多くの人々に及ぶことを私は信じてゐる。

父なる神様、

キリストに向き直つた我々が、聖書を深く讀んで神に教へられ、解らない處はとげしても、朝な朝な、ごうか祈りしつゝ聖書に親しむことを許して下さい。人によるにあらず、神の力により導かるゝことが出來ますやうに。キリストイエスによつて祈ります。アーメン。

第八章 神と良心

心の清き者は幸福なり、その人は神を見ることを得なければなり。(新約聖書マタイ傳五章八節)

人生のラヂオコンパス

一九二四年の十一月末、私はアメリカに招待せられてサンフランシスコに行くことになつた。サンフランシスコの灣に近づくと、あの附近はいつも霧がかゝつてゐる。暖流が北の方からすつと廻つて來てゐるからである。日本の海流は南から北へ廻つてゐるのであるが、サンフランシスコは、海流が太平洋を廻つてゐる關係で、北から南へ暖流が流れてゐる。で、約北緯四十度のサンフランシスコはいつも沖が霧のために見えないので、汽船がよく衝突する。そこで近頃は、ラヂオコンパスと云つて無線電信で「何處そこに何といふ船がある、お前の船は注意しろ」といふことを信號して來る。全然見えないで五里霧中にさ迷つてゐる船に對し、無線電信で遠い處から通知してくる。お前の船の右に小さい船があるから注意しろ、或ひは左に何といふ船があるから注意しろといふ案内をして呉れると、その間をそろゝ灣の方に進航するのである。このラヂオコンパスが無かつた時には、半日でも一日でも霧が晴れる迄沖に漂流してゐたものである。不思議なことには闇を越え、

霧を越えて、ラヂオコンパスが陸地からその附近にある船に信號して導いてくれる。人間を船と考へ、人生を一つの航路と考へるなら、ラヂオコンパスは一つの宗教であると考へていふ。物質の世界は我々にめぐらみを與へる霧のやうなものである。我々が人生の怒濤と闘ひ、人生の五里霧中にさ迷ひ、行くべき方向が解らないでゐる時に、見えざる御手は我々を導いてくれる。その間を縫つて我々は進まなければならぬ。「賀川さん、そんな仕掛があるだらうか？」といふ人があれば、その人はコンパスを壊してゐる。感應しないのは、良心といふ感する筈の機械を壊してゐるからである。こちらにはつきりしたラヂオコンパスがあれば解るが、それが感じられないといふ方が間違つてゐる。我々は神がわからないのでなく、神を知るべき器械を壊してゐるのである。で、我々の中に神を知りたい、もう少し神がわかりたいと思ふ人は大勢ある。けれど神を知らずとすれば、どうしても器械が要る。顯微鏡を持たねば細菌がわからぬやうに、また星を見るのに望遠鏡が要るやうに、神を見るには良心といふ機械がなければならぬ。羅針盤は必ず北を指す。不思議なもの、地球の磁石のマグネットと一致する。不思議に良心には神が感じられる。良心を滅茶苦茶にするなら、神が人間をいくら導かうと思つても導けない。良心と神とはさういふ關係があるから、良心があればこそ神が導いて下さるのである。だから神の力が感じられない人は、まづ良心を回復しなければならぬ。ところが我々の中には「私の良心は壊れてゐるのだ、私は漂流してゐる

のだ」と考へてゐる人があるかも知れないが、なほして貰ひたい気が起れば、人間にはもう一度良心が生える。恰も我々に病氣があつても治り、精神上の物忘れがあつても思ひ出すと同じやうに、我々が一旦良心をぶち壊して迷ふてゐても、もう一度回復して来る。もう一度良心が再發して来るのである。「俺のやうな悪い奴が救はれるかしら？ 俺にも望があるかしら？」と尋ねる人に、私は「望がある」と答へたい。木の枝を剪つたものを土に挿して置くと、根がつき枝がまた生えて来る。もう一度やり直して出来る力が天地には備はつてゐるのである。私は天地のその不思議なる力、即ち神の力を考へずには、決して人間社會に眞の生活、樂な生活、愉快な生活が出来ないことを斷言する。

我儘と迷路

「實際人間が何のために生れて来たのか、さつぱり判らぬ。人生には趣味も何もなく、詰らないものだ。徳川家康は、人生は重荷を負ふて坂を登る如し、と云つたが、坂道を登つて行くだけでもえらいのに、その上重荷を負ふて登ることは、二重にも三重にもえらい、いやだなア、出家したいなア、死んでしまひたいなア、何て面倒な世の中だ。」と云つて、毎年日本には一萬三千人の自殺者がある。而も之等の人の大部分が青年である。死ぬにも人間は慾なもので、苦痛を少くして早く死な

うとする。そして夏は涼しい方を選び、冬は氣樂な方を選ぶ。そして斯ういふ人は青年三十人に一人位もある。實に人生は嚴肅なる世界であるに拘らず、その嚴肅なる世界の不思議に觸れずに死ぬ人が多い。實際、十九位で人生が悲しいか悲しくないか解る筈がない。活動寫眞の一幕のやつと終ではないか？ 少くも六巻七巻まで見なければわからぬ。それを、あゝ人生は不可解だ、と云つて死ぬ。不可解ならまだ解らないのだから待つて居ればいゝ。待つてない處に慌ててゐる處がある。大阪の寺田町からちよつと這入つた處に、すつと同じやうな家が並んでゐる。どの家もどの家も同じである。酔拂つた人間が夜遅く歸つて来て、隣の家の間違つて飛込むことがある。さういふ風に慌てものは不可解だと云つて待つて待たないのである。そして慌て者に限つて汽車に乗らうとしてプラットホームから落ちて死ぬのである。私はいつも乗り遅れたら次の列車に乗る氣である。待つては海路の日和とか云ふ、不可解なら解る迄待つてばいゝ。日本には斯ういふ童話がある。雨が降ります、雨が降る、遊びに行きたし、傘はなし、紅緒のかつこの緒がきれた……」下駄の紅緒がきれたなら、私だつたら裸足で歩いて行く。紅緒がきれたから外へ出ないと云ふ、さういふ偏見が日本人にはある。こんな着物をきて金持の中へ行けば恥かしい、と云ふが、私は貧民窟で、着物のない時には女の着物を着てゐた。體裁が何だ、人間は裸體で

生れてきたのだ。持つてゐた臍の緒まで切つてきた。人が何と云はうがい。
 一體、日本のお伽噺は慌て者の話が多い。猿蟹合戦の話もさうである。蟹も慌て者であれば猿もまた慌て者である。蟹は芽が出なけりや鉄でちよんぎるといひ、内に這入れば、栗がはぜるし、外へ出れば蜂が刺す。花咲爺の話にしても、木の上から灰を撒いたのも慌てものをよく現してゐる。人生は不可解だと云つて、中途で死んでしまふが、我々はゆつくりする必要がある。すると解つて来る。我々の中に困つてゐる者があるなら少し待つがい。

傾ける大地

失敗するのは取らう、儲けよう、掻き込まうとするから損するのである。待つてゐるなら、社会は悪い人ばかりでないから損をさせない。我々が何でも自分勝手にやらうとするからわからなくなる。即ちわからぬと云ふのは世の中が判らぬのでなく、自分が判らないのである。ラヂオコンパスがはつきりしてゐるのに自分がわからぬのである。そして俺は二十三度半傾いてゐるぞと云つてゐる。地球が二十三度半傾いてゐるやうに、自分も傾いてゐるのだ。自転車でも、踏んで居れば廻つてゐる。地球が廻つて居るなら俺も角二十三度半廻つてやらうといふ、それを輪廻生活といふ。夏になるとよく水車が廻つてゐるが、水車ばかり踏んで、教會なんか忙しくて行かれませんか云

つてはぐる／＼廻つてゐる人には、少しも進歩がない。それを迷ひといふのである。輪廻も迷ひも同じで、即ちそれは我儘から出てゐること、我儘に角二十三度半迷ひに輪廻生活である。迷ひといふのは世界が廻つてゐるのでなく、自分が迷つてゐるのである。廻つてゐるのを止めてぢつとして考へてみると、何アんだ、こんな處に居たのかと氣が付く。餘り儲けよう搾らうとするから迷ふのである。だからちよつと止つて考へなければならぬ。ロシアの文豪トルストイは云つた「止れ而して考へよ」と。儲け儲けと云つてゐると、すとんと落ちる、そして何をしたのかわからぬこととなる。

私の親類のある者は世界戦争の時百萬圓儲けた。そして財界の變動によつて百二十七萬圓損した。その時彼は二十七才であつた。すると生れてから一年に一萬圓宛損してゐる譯である。そしてその二十七萬圓の利子が三萬圓である。それ以後私は彼に、利子發生機械といふ名をつけた。我々の中にも多くの利子發生器があるにちがひない。あまり儲けようとするから損をするので、私のやうに儲けやしないぞと思つて居れば、その代り損もしないから樂なものである。差押さへが來ても持つて行くものもなし、着物もないし、私は無抵抗主義である。

斯様に我々が迷ひを認めたならば、一體人間はどの方向に向いてゐるかを考へる必要がある。即ち我々が第一に考へることは、我儘から起つて來る迷ひを切り離すことである。我儘を殺すことは

つらい。ヤンにならうと思つたら飲めんなア、カフェーへも行けんア、好きな女の處へも行けんア、教會へも行きたいし、困つたなア」その間違つた我儘を断然切り離すと、その瞬間にすつとする。之を悔改めといふのである。この悔改めが解らぬ人には神の力がわからぬ。悔改めは我儘から離れることだ。宇宙、過去、現在、未来、凡てを神が創つたことを知り、宇宙の羅針盤の指す方に、すつと進むで行くと、人間は存外神を標準としてゐない我儘者であることがわかる。成程人間は我儘者であつたといふことが解つて来る。

罪惡の本質

罪惡といふのは、我々が姦通したとか、人殺しをしたとかいふばかりを云ふのでない。ちよつとした我儘、その中でも神がわからぬこと、標準がわからぬことが一番の罪である。それが解つたら悔改める。今迄は暗闇を歩いたのを、神の方に引き直る。それには單なる修養や道徳では足りない。修養で近頃は儲ける人がある。修養園などといひ、此頃は修養といふことが随分流行つてゐるが、修養ものによりけりである。その標準は何處にあるか？

印度へ行くと、ちよつとこの手が人を殴つたことがある場合に、その手を縛つて上へあげておく。一年、二年、三年はおろか十年位もあげておく。すると手の血は廻らなくなり、肉がなくなり、ま

るで木の枝のやうになつて、下さうと思つても動かなくなる。人間の身體に角が生えたやうなものである。之をファカーといひ修業者と云ふ。舌が悪いことを喋つたと云へば、舌を出したまゝ、五年も十年も放つておく。そして自分は牛乳ばかり流し込んで生きてゐる。さういふ修養は人間を殺す。或ものは却つて修養の爲に人を殺したり、水の中に這入つて死ぬものがある。定に入ると云つて、死ぬ眞似をしてそれつきり死んでしまふ者がゐる。或ひは、竹の先に足を括り付け、頭を下にしてぶら下つてゐる。すると血が鼻から流れ出て、遂には死んでしまふ。之も修養である。決死的修養である。

また人間は妙なもので、福祿天の眞似をする。「賀川さん、ふくろく天なんかありますか」と尋ねる人があるかも知れない。私は、シカゴの博物館に入るまでこんなものがあるとは思はなかつた。生れるや否や、赤ん坊の頭を板ではさみ、細引でぐる／＼巻付ける。すると丸くなる筈の頭が上だけに伸びる。それも修養である。

斯様な間違つたことが支那にもある。纏足と云つて、わざ／＼足をまとひ付ける。之は支那の上流階級の修養である。即ち上品なる修養である。人間が永久の道、無限の道、神の道を忘れてしまへば、山へ親を置いて來ることが親孝行になり、親の死んだ日に酒を飲むことが親孝行になり、臺灣などへ行くと、外國人の首を斬つて親を喜ばすことが親孝行になつてゐる。之も間違つた修養

である。

敵討も之と似たものである。我々の中には仇打が本能になつてゐる。仇打の最も美しいものは赤穂義士である。狭い量見の上に、永遠無窮を忘れてゐるが、天地の神が大きな塊となつてゐることを考へなければならぬ。我々は小さい考でなく、永久の道を考へる必要がある。その永久の理想、天地を創り續へる神を基礎にして考へると、人間には一つの目的がある。

使 命 に 生 き よ

人間の目的は今解らぬが、だん／＼解つて来る。我々は自分勝手に生きてゐるのでなく、永遠の使命を受けて生きてゐるのである。それを間違つて考へて、「俺は間違つて生れて来たのだ、親の徒らで生れて来たのだ。俺は日給一圓五十銭である、俺は雪隠蟲だ」と考へてゐる。

人間の頭の毛は二百五十萬本位ある。髪の毛が、「俺は二百五十萬本の一本に生れるのは詰らぬ。口髭に生れて来ればよかつた。」と二百五十萬本みんながさう云へば、禿頭になつてしまふ。禿頭になつてみれば一本でもあつた方がいゝと思ふ。我々は詰らぬ者のやうであつても、値打があり、使命がある。天地の神がちゃんと計劃を立て、置いて下すつたのだから、黙つて生きて居ればいゝ。即ち人間の使命は髪の毛のやうな詰らぬものにもある。大阪市には二百五十萬人の人間があるが、

その一人一人がみんな詰らぬと云つて死んでしまへば、大阪は立たない。

我々の手の指を見ても、親指だけ見ると實に妙な格好のものである。或ひは人差指だけだつたらをかしい。が五本揃つてゐると、何と美術的なものだらう。一人一人考へると生れて来るのぢやなかつたが……と思ふけれど、それで使命がある。一人で工場は経営出来ぬ。大きな汽船を走らすのも一人では出来ぬ。即ち我々は、天地の神が、一人一人に使命を持つて居られることを考へなければならぬ。

孔子は四十にして迷はず、米國のワシントンの次の大統領ゼファソンは、妻君からABCを教へて貰つたといふ。これこそ親爺教育である。斯うして無學な彼ではあつたが遂に大統領になつた。三十歳の手習であつた。また、石屋であつたが、三十四歳の時、プリンストン大學の入學試験を受け、遂にプリンストンの哲學教授になつた人がある。その人はオスボルンと云つた。我々の中には三十四歳になつて詰らないアと云つて死なうと思つてゐる人がある。

神 の 聲 を 理 解 す る 法

「賀川さん、使命があるならもう少しはつきり云へ」と云ふ人があるかも知れない。文學書を読む時、終のページだけを開けて、駄目だと云つてしまふ人は、わかつてゐないのである。最初から

次々に、時間的に讀んで行くうちに解つて来るので、我々でも神が人間に話しかけることを待たないといと解らない。神が話し掛ける場合でもすぐ解ると思つたら間違である。電信の符號のやうに、全部讀まないといと解らない。十四の時に少しわかり、十九の時にまた少し解り、四十になると、成程神は斯ういふことを云つてゐるのかと解つて来る。だから神の言葉がバノラマのやうに解ると思つてゐるのは間違である。矢張り暇がかゝる。一冊の本を讀むのに一週間もかゝるやうに、神の言葉も我々に話すことが、だん／＼わかつて来る。「カ」だけでもわからない「ガ」だけでも判らない「ワ」だけでも判らない。「カガワ」と續いて初めて意味が解るのである。宇宙の神が話すのだからすぐ判るだらうと思つてはならない。少し位の辛抱では解らぬ時がある。宇宙の神を即刻に知らうとすれば間違である。神の使命を知るには時間をかけなくては解らぬ。

短いことなら暇なしに解るかも知れないが、大事なものには時間がかゝる。

日本で一番いゝ雲州公の茶碗は二十四萬圓するといはれる。鐵櫃の底の方に叮嚀に藏はれてあつて、茶碗を出すのに半日かゝる。箱の中に箱があり、その中にまた何重にも包んである。だからなか／＼見せてくれない。神を知るのにも暇がかゝる。精神を確かにし、氣を確かに持つて、そろそろ神の云ふことを待つてゐると、「お前は斯うせいよ」と神は云つて下さる。之は人間の聲ではない、神の聲である。

ラヂオは人間の聲であるが、神の聲は行爲でわかる。友人の行爲とか、商賣で夫敗するとかいふことでわかる。羊に物云つてもわからぬ。合圖をすればわかる。人間もちよつとしたことによつて神の聲がわかる。神の聲といふのは人間の言葉とはちがふ。即ち歴史そのものが神の聲である。人間が脱線すると、その墮落した中にも神がわかる。即ち歴史の中に神は言葉を現し給ふ。即ちそれが默示である。實に大きな默示である。

人間にとつては何千年來の歴史を通して神がはつきりわかる。聖書を讀むと成程とよくわかる。しかしそれと共に、我々が聖書に書いてない部分を経験する。我々にとつて、地震も洪水も、病氣も、それが神の攝理である。そしてそれらの経験によつて、人間の行くべき道がはつきり判る。しかし神の聲を人間から聞かうとすると判らぬ。それが、良心の鋭い人間でなければ判らぬ點である。神語り給へと云つて解らうとすれば解るが、博奕してゐるとか、飲んでゐる人間には解らない。

さういふものであるから、時によると、神の聲が民衆そのものゝ中から聞える時がある。またイエスの場合のやうに、民衆の言葉により殺される時がある。時によると、詩、藝術、労働、愛、歴史、人格を通して神は働き給ふ。斯様に我々にはいろ／＼な神の言の筋があるが、之を知るには良心を通してでなければ解らぬ。

神への藝術としての良心

人生には使命がある。即ち神の使命がわかつて来ると人生は愉快である。その使命に生きる迄我々は迷ふのである。学校の卒業生がよく私の處に仕事がないかと訊きに來る。「あなたは何か出來ますか」ときくと「何も出來ません、何でもいゝから一つ仕事を探して下さい」と云ふ。しかし、何でもよくつて、何も出來ないなら、何も仕事は無い。即ち使命が解つてゐない。我々は一體どの部分に神の使命を感じてゐるか？

一體、世界にあるもので飾りのないものはない。何でも飾りである。我々は親の爲に國の爲に、家のために、はつきりこの方面に働くと云ふことを決めなければならぬ。それを私は詰らぬ油をさしていゝ加減に焼いてしまふといふ人があれば、その人には人生は煙である。神に「太郎よ、次郎よ、何處に居るか」と云はれた時に、はつきり「はい此處に居ります」と云はれるやうでなくてはならぬ。それが使命である。金剛山の麓に武士がゐた。「居るか」と云はれて「はい此處に居ります」と云つて引出されたのは、楠正成であつた。

使命があるか無いか判る人は偉い者である。馬鹿者と云はれたゼームス・ワットは蒸汽機關を發明した。ぼんやりしてゐる人間に使命がわかるとはつきりする。一つの仕事を五分間でいゝ必ず

一生涯續けると偉い人になると、トーマス・カアライルは云つた。日本に一人變つた人が信州諏訪にゐる。この人は太陽を觀測して記録を書いた。毎日五分間づゝ同じ時に同じ方向に向いて太陽を觀測した人は、世界始まつてからない。地震でもさうである。潮の觀測をする人が一人あつたといふ。潮の觀測を同じ時間に、同じやうに研究して記録する人はない。けれど潮の觀測をした人は地震と關係あることが解つたといふ。斯ういふやうに日本に對し、神に對し、斯ういふ使命があると解れば、その人は偉い人物になれる。それを使命といふのである。

我々の中に人生の使命を感じる人はあるか。お前は苦しくとも一つの道を發見する爲に、努力せよといふ神の聲を聞かうとしてゐるか。こんな毛のやうなものが、詰らぬなアと思つてゐる者に、神は使命を負はしてゐられる。神よあなたが生かし給ふ處に行かして下さいといふ使命を考へることが大事である。

動機と出發點

次には、我儘から來る罪惡、その動機の方面である。行かうとするけれど、その出發點で迷ふのである。我々はどうも心が曇り勝ちで迷つてゐる。

人殺しも、姦通も、盗みも、嘘も、貪りも、博奕も、凡ての罪は我儘から出てゐる。我儘が人を

殺し、我儘から姦通し、己が可愛いから盗みをし嘘を付く。或ひは己中心に考へるから貪つたり博奕を打つたりするのである。或人は、私は人を殺してゐません、或ひは嘘をつきません、少々欲しいけれど盗んだことはありません、と云ふかも知れない。が外に現れないが憎しみをすることは、我儘から來てゐる。この憎しみを殺さないといけない。憎しみが即ち人殺しの原因である。また人間の色慾は、性慾の下の下等な、妻君はどうでもいゝ、他人はどうなつてもいゝといふ人が間違を惹起すのである。それは全く我儘からである。女を見て色情を抱くものは心の中既に姦通してゐる。欲しいと思ふから貪るので、偉いと思はさうとするから嘘をつくのである。虚榮心が貪りを起す。だから殺さなくとも憎しみを持ってば、その氣持は人を殺したのと同じである。貪りたいと思ふなら、人間は心の中で大きな罪惡を犯してゐるのである。

「賀川さん、そりやひどいなア。誰だつて心の中ではやつてますよ。誰だつて心で欲しいと思ひますよ。そりや無茶ぢや」と云ふ人がある。ところがさうではない。母親が子を産んだ時、子供の物を取りたいと思ふだらうか。子供にやりたいところ思へ、裸體にしてやらうと思ふだらうか。そんな事を思ふ母親はない。母は子供に全身を捧げたい。母は自分が樂しみたいとは思はない。子供のためにどんな事でもする。母は娘に對して親切である。況んや憎しみなんかない。この點から云へば女の人の方がすつと純潔である。母は普通の人に比べて純潔である。さういふ氣持が持てる

やうになれば人間は樂になる。

私はよく破戸漢の連中に「改心せいよ。お前の女房を見習ひなさい。お前の女房は酒飲むか。煙草飲むか。博奕打つか。女郎買ひするか」女が女郎買ひしまつかいな。けれどそれは理屈ですな、辛抱出來ませんなア」と云ふが、女の方がそんなに立派にやつて行かれるのに抱らす男が出來ないと云ふ理由はない。男ばかり放蕩したいといふのに理由もあらうが、それは要するに習慣である。女の人がすましてゐられるのに、男が辛抱出來ぬのではない。私は日本では、男が女に比べて十三倍悪いことを統計によつて知つてゐる。

罪の價は死である

男が悪いといふのは、男が誘惑にかゝるからである。即ち男子は謹しみが少い。だから我々は憎まずに濟める工夫が出来る。

神が良心の奥底まで見てゐると思へば出來ない。それを「神なんか居らない、俺には神が行方不明ぢや」と思ふからそんな氣持になるので、神が見てゐると思へば憎しみの心は起らない。そして神が見てゐると思へば、魂の奥底から變へなければならぬ。神が無いと思ふから、筆筒の底にいろ／＼な物を入れて置いたり、糸ならものを藏ひ込んで、だん／＼墮落するのである。或者は泥棒し

たり、胡麻化したります。また萬引をやる。人の物と自分のものとを混同する。何でも持つて行つて呉れといふ共產主義はいゝが、他人のものは俺のもの、俺のものは俺のものといふのが一番危い共產主義である。近頃の者はこの俺のものといふ共產主義が多い。之は泥棒共產主義である。昔から泥棒は自分の爲の共產主義を主張した。

最高の道徳即ちイエスキリストのやうな純潔なる氣持の共產主義ならいゝが、今日のやうな混亂した我儘なものはいけない。親切に、私が働くから、あなたは持つて行らつしやいといふなら、その人は共產主義以上である。黙つて施すならその人は共產主義以上である。

日本では二宮尊徳とい偉い人がゐた。己が貯へることを考へないで人にやれと彼は云つた。それが眞の共產主義である、否超共產主義である。イエスは身體も神のものだと云つたが、之は超共產主義で、私は之を神産主義といふ。近頃、共產主義の人は割引してゐる。我々は之等の人よりも少し先に行かなければならぬ。眞の共產主義は、絶対に露程も、そんな氣持があつては實行出来るものではない。もしさういふ氣持があれば成りぞこの共產主義である。だから近頃の人達は間違つて脱線してゐる。良心を持たなければいゝ氣持になれるものではない。嘘でも貪りでも同じことである。即ち我々が、魂の中に神が見てゐるといふすき透つた心を持つと愉快である。いつも怒つてゐる人は早死にする。「俺は憎しきをもつて彼等を復讐してやるのである」と云ふ人はどうかして

ゐる。子供に對する場合にも、叱らないでよく云つて聞かせれば解るものである。解のわからぬ子供でも母親が「坊やよ、坊やよ」とやさしく云つてやれば、坊やはすかされて解つて来る。今日のゴロツキの連中も、からは大きいが魂は空つぽである。だから子供のやうにビードロの缺らでも自分の懐にねぢ込まうとする。それをよく一々きかせて、改心しなければならぬと云へばわかる。それが宗教である。宗教は悔改めを教へる。

また憎しみが人殺しをするのである。大阪の醫科大學の報告書に、犬を四時間位柱に結び付けて怒らして、殺す。そしてその腦のエキスをとる。そのエキスの中にはシアンと云ふ毒素が入つてゐる。それを生きた犬に注射すると、八十四位が死ぬといふ。即ち怒らすだけでも死ぬといふ。だからあまり怒る人は、自分の毒で自分を殺す、即ち自己中毒を起して死ぬ譯である。

私の家の隣に喧嘩安がゐた。安さんは喧嘩が好きで、喧嘩をしては、或ひは喧嘩の仲裁をしては酒を飲んでゐた。前科九犯の拘捕であつた。彼はいつも怒つてゐて、よく妻君を追ひかけ廻してゐた。私は「若死にするよ」と云つて度々忠告してゐたが、果して、私がアメリカへ行つてゐた二年八ヶ月の間に死んでしまつた。「罪の價は死なり」新約聖書ロマ書六章二十三節である。彼等は天命を全ふせずして若死にして滅びる。使命を果さずに死んでしまふのである。人に殺されなくとも自分が殺すわけである。だから動機を潔めなければならぬ。我々は見えない魂をまで潔めなければなら

ぬ。望遠鏡が曇つてゐなければ星が見えると同じやうに、魂が澄めば澄む程神が見える。イエスは云つた、「心の清き者は幸なり。その人は神を見ることを得なければなり」と。

良心に映る神

神を見るとは何だ、神はどんな口髭を生じてゐるか、とある人は云ふだらう。しかし神を人間のやうに思つてはならない。神は偶像でない。神は形を持つてゐない。神を人間と同じに考へてはならない。神は生命そのものだから、生きてゐる中に感ぜられる。生命とし、力として心の中に感ぜられる。まるで電力のやうに感じる。それを見神といつて、この眼で見ないのでなく、心で見るのである。

明治三十七年頃、網島梁川氏が、十年間位肺病にかゝつてゐた頃、ある日、風呂から歸りに見神の経験をした。之は目で見たのではない。嬉しくて嬉しくて仕方がなく、まるで自分の通つてゐる道が光明に照らされ、有りがたいといふ氣持が數分間位続いたといふ。それを神を見たといふので、之は澄みきつた良心の中に感ぜられる。私もさういふ経験を度々持つてゐる。之は、性慾や金儲けの面白い以上に、坐つても立つてもゐられない嬉しい氣持である。神が在ると感ぜられることは、何といふ不思議な世界だらう。二百兆の人間の細胞の體、病氣も治るといふ不思議な力、そ

れは「何事の在しますかは知らねども、忝なさに涙こぼるゝ」氣持である。私は眼の悪い時に、真夜中眼を覺し、嬉しくて仕方のない氣持になつた事がある。貧乏してゐる時も、神は私を食はして下さつてゐるといふ感じが、ぞく／＼と身に感じたことがあつた。すると貧乏が苦にならず、人がどんな悪口を云はうが、批難されようが、神が知つてゐると思へば、氣が樂になつて、病氣も治つて来る。之を見神の實驗と云ふ。自分の力でなく、神の力が入つて来て、大きな力が自分を支へてゐるのだ。神が大きな御手を持ち、しつかりやれと云つて支へてくれるのだといふことが解つて来る。私の生活は神に支へられてゐるから樂だと解つて来ると、今までは人生が重荷で仕方がなかつたものが、こんどは神に任せる氣持になる。

斯ういふ氣持になると、善が本能になる。母が子の世話するのと同じになる。母は月給を貰つて子供を世話してゐるのではない。母や妻は本能的に愛するのである。愛は本能である。神を愛することが本能になり、人を愛することが本能になる。「イエスの愛我等を勵ませり」(新約聖書コリント後書五章十四節)とパウロが云つたやうに、我々は熱愛を持ち、奮激を持つて、農村を愛し、労働者を可愛がり、癩病患者を厭がらないで、愛することが出来るやうになる。即ち愛することが本能になる。

良心の膿を絞り給ふ神

それが神による新道徳である。この力を持つと、世界は生れ変わる。国際聯盟を作つても日本が宗教を持たないならば駄目である。日本は體裁のために不戰條約に印をついてゐるが、西洋では祈つてやつてゐる。今に世界の軍隊は警察の役に變るであらう。世界は死んだウヰルソンの祈によつてよくならうとしてゐる。ウヰルソンは生命を犠牲にして世界の平和のために祈つてゐたが、彼は遂に神經衰弱にかゝつて死んだ。我々の地球は狭い、七千八百哩のボールの上で互ひに戦争することは詰らない。「神よ、世界を一つにせしめ給へ」といふウヰルソンの祈が、国際聯盟の中に入つてゐることを忘れてはならぬ。やれクーリツヂがどういつたとか何とか云つてゐるが、今から二十年前には一隻二千萬圓もかけた軍艦をダイナマイトでぶち壊すことなど考へただだらうか。實に妙な事情になつてゐる。之はウヰルソンの祈である。祈つてゐることは必ずきかれる。それが何年後になるか解らぬが、理想の生活は實現されるものである。

神の力は我々の要求より強い。一部階級の運動より、世界宇宙についてゐる運動の方が強い。斯ういふ宇宙の祈は實現さるべきものである。

神御自身が人間に乗りうつると、人間が生れ変わる。この神の力を宗教といふのである。天地の神の前に、どうか私を救つて下さいと云へば救つて下さる。赤ん坊が生れるとすぐ乳房を探すと與へられるやうに、善人にして下さいと云へば、神の乳房はすぐそこにある。面倒だと云つて乳を探さなければ、餓死する。私が善人になりたいと云ふ欲望を持てば、天の乳房が下つてゐる。腹が減ると思へばそこに米があるやうに、祈があれば善人になることが出来る。

「それはいゝが、私はもう駄目だ、人に云へない膿がある。私の腫物は大きい、私は膿持だ」と云ふ人でも、心配する必要はない。神はそれをしほり、繃帯して下さる。私は神の前に立つべきものでないと云ふ者をも、神はその膿を吸ひ出して下さる。秘密があつても大丈夫である。

然しどんな失敗があつても、神は許し給ふ。我々の中に膿があつても大丈夫である。しかし「私はこのまゝでいゝんです、膿を持つてゐても構ひません」と云ふ人は嚙言をいつて、「私は現代の文明を否定するものである」など云つてみたりする。その人は膿で發熱したものである。さういふ人は、魂の外科手術をしてその膿をしほり取つて貰はなければならぬ。恥かしい事であり、痛いことであるけれども、しほつて貰ひ、病院に這入ると治る。その病院は、愛と親切に充ち、そして新しい血が輸血される。

神による新道徳

即ち、イエスの愛と、十字架の犠牲により、今迄の膿をしほつて入院させて貰ふと、若返つて来る。すると膿言も云はなくなる。膿がなくなれば苦しみもなく、何ともなくなる。「神與へ、神とり給ふ、エホバの御名はほむべきかな」である。他人の家で、他人の布團の中で死なうが、墓が六尺だらうが、何も苦勞することはない。大臣だとか、勳一等だとか、公爵だとか、そんなことを云つて居れば限りがない。日本には大臣は十三人しかゐないのである。必ずしも大臣はえらくない。大臣は米を炊けない。傑い人間は、自分で米を炊かないで、女中にさす。が、人の爲にする方がえらいのだ。

車挽きをしてゐても、大臣以上に使命があると思へばいいではないか。私は勞働運動をして監獄に這入つて善い事を習つてきた。それは一分間で風呂へ這入ることである。私は監獄へ這入つた最初の朝、麥半分と玉蜀黍半分の御飯を食べた。それがまた實に甘かつた。私は貧民窟で十四年八月間二疊敷に住んでゐたから、一坪半の監房は私の家より廣い。監獄には私の家のやうに南京虫もゐない。で私は監獄に行つてゐる間に九百匁殖えた。私は「ミの五十八」と呼ばれれば返事しなればならなかつた。

我々はいろ／＼な苦勞をする場合に其處を道場と考へてゐたらいい。こいつは荒砥だなど思へば樂に行ける。「神は我々の耐え得ざる試練に遣せ給はず、」(新約聖書コリント前書十章十三節)此の氣

持で居れば、日本はよくなる。之は今からでも實行出来る。

我々は神の氣持を持ち、人を愛し、責任を持ち、神に支へられてゐるのだから、人を助けよう、といふ氣持になりたい。斯うした氣持にみんながなつて、にこ／＼してゐると、社會は不景氣知らずである。

即ち、人間は愛し合ひ、犠牲の生活を送り、忍耐をもつて、人の缺點まで補つて行かうといふキリストの十字架の精神を持ち、自分は十字架にかゝつても、人の爲に盡すといふ氣でゐなければならぬ。新道徳により、新社會が出来る。この祈の力により、我々は日本を新しく支へて行かう。

父なる神、

我々の良心は濁り易く、使命は量り難く、五里霧中に迷つてゐます。これを不憫と思召して、迷はざる道を教へて下さい。聴えぬ耳をきこえしめ、見えざる目を見えしめ、膿を持てる良心に、新しき生命を吹き込んで、生れ變らしめて下さい。腐つた肉のついた體が新しいものになり、神の子になるやうに、毛蟲の體が蝶になつて舞ひ出るやうに導いて下さい。そして、この腐敗した社會をあなたの方できよめ、日本の國を淨化する運動を起し、神の國をうち建てさせて下さい。我々の使命をはつきりせしめ、我々の動機をきよめて下さい。救主イエスによつて祈ります。アーメン

第九章 神と生活

兄弟の愛をもて互に愛しみ、禮儀をもて相譲り、勤めて怠らず、心を熱くし、主につかへ、望みて喜び、患難にたへ、祈を恒にし、聖徒の缺乏を賑はし、旅人を懇ろに待せ。汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛ふな。喜ぶ者と共によるこび、泣く者と共に泣け。(新約聖書ロマ書十二章十一—十四節)

宗教の實現

私は宗教の實現性に就て考へてみたい。
 宗教に二つの傾向がある。一つは人間から神に行く傾向で、一つは神から人間に行く傾向である。既に私は、人間から神に行く傾向を考へたから、こんどは、神から人間に行く實現性について考へてみよう。

我々の一つの傾向は、神を個人生活に尋ねるが、社會生活に實現しようと思ふことの少いことである。だから宗教は、閑人、ブルジョアの持遊びもの、或ひは仙人の専有物だといふ風に考へる傾向がある。しかし宗教はそんなものではない。ジョン・フィッチは宗教を定義し、宗教とは神が

地上に於て、人間の中に凡ゆる生活をする事であると云つた。我々が天ばかり見ないで、一旦天に昇つた氣持を地にひき直す處に、宗教の宗教たる處がある。

フランスの詩人であり、小説家であるピクトル・ユーゴーが「宗教は如何なる人にもなくてならぬ、我々は地を歩く時に、必ず片足は天に上げてゐるが、片足はいつも地についてゐる。地球はボールのやうなものだ、片足で地球を蹴飛ばせ」と云ふことを云つてゐる。さういふ氣持であると、人間はなか／＼へこたれない。宗教の實現性を忘れ、地上の事で離齷してゐると人間の値打がなくなる。片足を天に、片足を地にいつも現して行く氣持が宗教の實現性である。

神と勞働

イエスは大工だつた。大工だつたけれど、イエスは質素な生活の中に神を現した。彼は馬小舎に生れ、馬廄の中に受けられた。彼の家は貧乏であつた。母は貧しかつたので、宿屋も上等の處に泊れなかつた。彼の父母が宿屋を尋ね歩いて、何處もかも満員であつた時に、仕方なく馬の這入る處に這入つて、その儘お産したのであつた。ところがその生れた子は神の姿を宿した。一介の勞働者が世界を動かした。そこに宗教の實現性がある。算盤してゐる時に宗教がないのは、宗教のなり損ねである。多くの人は、ハンドルを握つたり、舵を取つてゐる時には神は居ないと思ふ。祈る時は

神はゐるけれど、働いてゐる時に神はゐないと思ふ。味噌を摺つてゐる時に神がゐなくて、教會へ行くに神がゐるといふのは嘘である。眞の宗教は帳場でも、臺所でも、針仕事をしてゐる時でも神が居るのでなければ宗教とは云へない。イエスキリストと云ふ人は、神の姿を地上に現した人である。彼の生活が宗教であつた。彼の理屈や思想だけが宗教であつたのでなく、生活が即ち宗教であつたのである。

それを皆間違へる。宗教を信じたけれど、まづ哲學をやつてからと云つて、五年も六年もした時に解つたといふが、その時はもう遅い。その間に生命はどんく進んでゐるから、數年遅れてゐるわけになる。フランスのベルグソンは理屈は生命に遅れると云つた。我々は理屈ばかり云つてゐてはならない。が青年にさういふ人が多い。若い人は、この本を六百頁讀んだら宗教に入ると云ふが、凡そ生きとし生けるもの、在りとしあるもの、その生きてゐるびちく宗教を信じなければならぬ。人の吐いたものをもう一度食ふのでは駄目だ。自分が生々したものを體驗して初めて宗教が解る。それが生命宗教である。だから宗教の宗教は書齋の宗教ではない。旅行をしながら、飯を食ひながら、労働をしながら、そこに宗教を發見するのでなくてはならぬ。聖書にはイエスは大食家だと書いてある。(新約聖書ルカ傳七章三十四節) 食しながら其處に宗教がある。イエスがあまり食へるものだから、パリサイ宗の人が「お前の先生は斷食しないのか」と尋ねた。するとイエスは「一

體婚禮の晩に斷食出来るか、葬式の時には斷食するが、神と人間が結婚して嬉しいときには飯を食ふのだ」(新約聖書ルカ傳五章三十四節)と云つて居られる。それが即ち宗教の實現性である。またイエスはいつも労働者だつた。年三十迄大工をしてゐた、のみならず、休みの日迄人を助けた。病人をも助けた。すると、或人はイエスに向ひ「あなたは休みの日も休まないんですか」と尋ねた。イエスは「いや、休めないのだ、神はいつも働いてゐられる。神が休むと地球が落ちる。だから神が働いてゐる間、私は働くのだ」(新約聖書ヨハネ傳五章十七節)と云つて居られる。だからキリストに於ては生活が即ち宗教である。

生活即宗教

イエスは憐み、同情し、乞食を世話し、癩病人を癒し、死人を甦へらせ、盲人を見させ、ひきつけの人間や、癩癩病み、悪鬼につかれた者——日本で云へば狸つきや狐つき、犬神——を癒し、煩悶者、姦通した人間の訴へを、前科者や貧乏人の爲に施しをしたり救濟事業をし、虐げられたる階級に同情された。さういふ生理的にも、心理的にも、社會的にも、宗教的にも、凡ゆるものをひき起した。彼の活動そのものが、神の姿そのもので、それを宗教の實現といふのである。今日に至る迄、イエスの宗教が永久性を持つてゐるのはその爲である。愛を神が現してゐる。そこに何と

も云へぬ人生の愉快さがある。たゞもう信仰信仰と云つて、南無妙法蓮華經といつては喧嘩する人がある。けれど法華經の中には、人を愛するなら、法華經を云はなくともいゝと云つてゐる。即ち「常不輕」である。私はこの「常不輕」即ち人を愛することをしてゐるから、南無妙法蓮華經を云はない。東京池上の本門寺などは、お會式の日に、何百人といふ人が喧嘩して引張られてゐる。さういふことを考へると、我々の方が法華經に近い。何故なら、イエスの精神を持つものは法華經を卒業したものである。そこにイエスの實現性がある。

私のおばあさんは朝な朝な神を拜んで廻つた。そしてその間に下女下男を叱り付けてゐた。がそれは間違つてゐる。拜んでゐて怒つてゐる人には、宗教の實現性がない。宗教と云ふのは、神の愛を人間に現すことである。その實によつて木を知ることが出来る。

イエスは一生の間黙つてゐたが、人を愛して居た。イエスは説教したが、貧乏人を愛し、精神上にも社會的にも愛した。なほ感心な事は十字架にかゝつたイエスの態度である。

はりつけは三五六貫の材木を伐つてきて、人間の身體をぶつつけることで、急所をぐづと突いて殺すのでなく。日本では刑の軽い人間は首を斬られた。痛いと思ふ瞬間には、首が飛んでゐる。

一秒間の何十分の一が死ぬ。だから首打ちが一番軽い刑である。切腹は痛みが續くから重いのである。十字架は急所を突かずに放つておく、すると、自分の身體の重みでだん／＼落ちて来る。そ

して血が滴れて来る。三日も四日も生きてゐる。すつかり血が出てしまつて死ぬか、神經的に死ぬかである。斯ういふむごたらしい死刑がローマにあつた。

十字架の七言

イエスはこのはりつけにかゝつてゐて、有名な七言を云つてゐられる。それを世間では十字架の七言と云ふ。彼は兩手兩足を釘に打たれてゐて、(一)父よ彼等を許し給へ—私を十字架にかける人間を許してやつて下さいと云つてゐられる。之はなか／＼云へない事である、傳説によると佐倉宗五郎は、はりつけに懸けられて、うらめしや、八代迄祟つてやらうと云つて死んだので、堀田の家は八代祟られたといふことである。そして佐倉宗五郎の芝居をすると、その芝居小屋が燃えることがあるといふ。譯の解らぬ人間を許して下さいとはなか／＼云へないものである。この氣持が宗教の實現である。餘程しつかりしないと云へない。イエスは神のやうな大きな氣持をもつてゐたから云へたのである。イエスは十字架にかゝつてゐて人を愛し得たから偉いのである。

トルストイはイエスが山上の垂訓を説いた處が偉いのだと云つた。が、孔子も孟子も山上の垂訓のある點迄は云つてゐる。孔子も孟子も云へないのは、この、人の爲に許しを乞ふた言葉である。(二)イエスの十字架の兩側に、強盜二人が懸けられてゐた。一人は最後迄悪い人間であつたが、

一人はイエスを褒めた。そしてイエスに「御國に入る時我を覚え給へ」と頼んだ。するとイエスは「汝今日、我とともにバラダイスにあるべし」と云はれた。世の中に悪人が二通りある。一人は悪い事をしてゐながら、シヤア／＼としてゐる。こら、耶蘇、お前はとう／＼懸つたな。閑なものだから、十字架にかゝつてゐて猶悪口を云つてゐた。もう一人の強盗は、向ふ側に懸つてゐる人間に「こら黙つとれ、お前は馬賊だから十字架にかゝるのは當り前だけれど、このお方はちがふのだぞ」と云つて、こんどはイエスに「あなたが天國に行らしたらよろしく頼みます」と頼んでゐる。イエスの「汝われと偕にバラダイスに在るべし」と云ふ言葉は非常な確信を持つて居る。我々が、今死ぬといふ時に、そんな事を云へるだらうか。我々がもし腹が痛い時に、物を呉れと云はれても、ちよつと上げられない、物も云へない位である。イエスは、頼みますぞと云ふと、すぐ「よし」と云はれた。イエスは死ぬ瞬間まで救はうといふ意志を持つて居られたのである。即ち宗教を實現しようとしてゐられた。之は困つた人間を救はうといふ氣がなければ「よしお前は天國に行ける」と云へるものではない。

(三)母の心配をして居られる。イエスの十字架の下に、一人の男と二人の女がゐた。三人の女は、イエスの母と、マグダラのマリアと、母の妹で、一人の男は弟子のヨハネであつた。イエスは母に「弟子ヨハネに頼つてくれ」といはれ、ヨハネには「よろしく頼むよ」と云はれてゐる。イエスは

親孝行並あつた。(六)

(四)次に「我渴ぐ」と云はれた。兵隊がそこに四人居たが、兵隊は麻酔藥の入つたものをイエスの口許に持つて行つたが飲まなかつた。イエスのやうに最後まで正氣で惱み通す人は少い。イエスは終り迄民衆の爲に惱まれた。

十字架の宗徒

苦難を突破する心

(五)次のイエスの言葉は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」(我神我神、何ぞ我を捨て給ふや)といふことであつた。或人は「卑怯な奴だなア」と云ふかも知れないが、さうではない。之は詩篇の二章二篇の二節である。イエスは「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と大聲で讚美歌を歌はれたのである。或人は「イエスはエリヤを呼んでゐると云つた。義人は惱むものである。衣は鏡引せられると云ふことと、エリヤは暗示せられた。つまりイエスが死ぬのは、何百年前から豫言せられてゐることと、豫言が的中したのである。何百年前から豫言せられてゐた事が、自分の中したといふ氣持で、エリヤは死なれたのである。

「父よ、我靈を汝に委ぬ」と云はれた。何故事成れの云はれたか。イエスは他の人と違ひ、決して生きてゐる時に、私はキリストだとは云はれな

かつた。宮崎虎之助君は、明治四十年にブース大將が來られた時に「私は佛陀だ。キリストだ」と云つて廻つたさうだ。イエスはさういふ事を一言半句も云はなくて黙つて居られた。イエスは口先ばかりでなく、煩悶してゐる一切を血を流して救ふ迄人の爲に盡された。そして血が流れたときに事が成就したのだ。イエスは我魂をあなたに委ねますと云はれて、とう／＼一切の罪惡を神にまよまつて息絶え給ふた。それはその日の午後三時頃であつた。

イエスは死ぬと云はれない。私も今夜寝た儘死ぬかも知れぬ。昨日まで將棋をさしてゐたが、朝起きてみると死んでゐた人かあつた。私が肺病々院にゐた時、西村といふ人がゐた。日記帳や机を奇麗に整理して、いつでも神の處に行けるといふ氣持で、眠るやうに奇麗に死んで行つた。イエスのやうに我々は魂を委ねることが出来るか？ イエスの一生涯は十字架によつて示されてゐる。この十字架が宗教をはつきり生活の中に實現してゐる。行爲の實現性を持つては宗教は我々の生活の中に這入つて來る。この精神を我々は常に持つて行かなければならぬ。

愛の歴史的發展

キリスト教は幸ひ、理屈を云つた部分もあつたが、紀元一世紀から二世紀にかけてキリスト教には愛の運動があつた。一世紀にキリストの十字架があつた。二世紀にはエヂプトの國に於て、アレ

キザンドリアで十萬人位の人が一萬五千人を助けた。四世紀には野蠻人の爲に傳道した。十世紀の暗黒時代でさへ、或人は覆面して人を世話してゐる。覆面強盜と云つて、日本では悪い事をするが西洋では十世紀に覆面して善い事をしてゐる。覆面強盜でなくて、覆面親切人である。それがキリスト教だつた。勞働町に行つて可哀相な子供があれば助け、或ひは擔荷をかついで藥を持つて來たりして病人を救つた。さういふことがフロレンスに澤山あつた。あるものは架橋團と云つて橋ばかり架けてゐた。日本の一燈團は一人であるが、之は五十人位が團體を組んで、芋屑やパンのごく粗末なものを食はして貰つては、善い事をして廻つてゐた。日本にも道を修繕してくれる團體があればいい。

之が十一世紀十二世紀になると、ヨーロッパ全體に擴まつてゐる。アルプスの山中にはベルナードといふ親切な犬がゐて、毛布や藥を持つて雪の中を飛んで行つて、アルプス越の行路病者を救つてゐたものである。それがずつと續いてゐる。十三世紀になるとフランスが出た。小鳥までがフランスの言葉を聞いたといふ。イエス以來、こんな親切な人はゐないといはれてゐる。そしてこの親切運動は今でも續いてゐる。それが十五、十六世紀になつて、善い事をせず我儘ばかりしてゐたから、獨逸などがローマ法皇に反對したのである。それが十九世紀の奴隸解放になり、野蠻人の間にも傳道をしようといふことになつたのである。なかには恥かしいと思はれるやうな事もあつた

が、愛の運動は兎に角續いてゐる。イエスの十字架の精神はつゞいてゐる。キリスト教とは之を云ふのである。

聖愛即キリスト教

斯ういふと或人は、「今頃キリスト教を云ふのか、そんな迷信はやめてくれ、今頃クリスタンパレンの法など云つて貰ひたくない」と云ふかも知れない。が、私が云ふのは十字架の愛、イエスの親切、即ち宗教實現の運動を云つてゐるの、愛の實現に歸れと云ふのである。之には永久性がある。で、私が多くの人にキリスト教を勧めるといふのは、キリストの「教」を勧めるのでなくて、キリストの「愛」を教へるのだ。助け合ひをしませう、親切をしませうと云つて、その助け合ひしようといふ愛の運動を勧めるのだ。之が宗教の實現である。それは西洋の問題だと云つてしまふ人があるが、親切に西洋も東洋もない。そんな事を云ふ人は、散髪もやめてもう一度ちよん髷を結つたらいい。洋服を着たり、電氣をついたり、入歯をしたり、そんな事を止めたらいい。西洋を照らしてゐるお日様に照つて貰ふまいとは云へない。ロンドンでは二宮尊徳傳を讀んで、「日本にも偉い人があるなあ」と云つた人があるが、魂に東西はない。我々が西洋に於て愛の運動が缺乏してゐるなら、日本の愛の運動を西洋に傳へたらいい。戦争をしてゐるなら、愛を分けてあげたらいい。

この愛の運動は日本を高め、日本を救ふ運動であるから、我々はこの運動をしようと云ふのだ。この運動は宗教を基礎にしなければ出来ない。

性愛の淨化

卑近な例は戀愛である。戀愛は肉體的なもので、宗教も何もない。戀愛は小説を讀めば出來ると云ふ人があれば、それは大きな間違である。戀愛には三つの立場がある。即ち生理的部分と心理的部分と、道徳的部分である。戀愛は一人では出來ない。どうしても一人以上でなければ出來ぬ。それに子供が生れることを豫想する。子供が生れる時に社會の制裁が要る。それらは道徳的に進まなければならぬ。そして一人なら濟むが、二人になると感情問題が起る。それは心理的である。ところが肉體的なものだと思つて、戀愛を性慾といふ人がある。が、性慾だけなら我儘なものである。ところが自分でないものがあるから、性慾の外に好きこのみや選擇がある。それが心理的部分である。即ち戀愛とは一つの選擇作用である。けれど我儘も云つて居られないから道徳制裁が要る。ところが青年は戀愛は我儘だと思つて、女は俺のいふことを聞けといふ。それでは娼妓に對すると同じ事で、自分の妻を尊敬してゐない。女には妊娠もあれば、月の約束もある。そんな女の苦し

みを知らずに、男が我儘をするなら、それは戀愛の成りぞこねである。男が我儘ばかりいふから三角關係四角關係が起り、しまひには五角關係六角關係となるのである。魂と魂が高く尊敬し合つて行かなければ眞の戀愛はない。片方が肺病にかゝつても逃げ出さないやうでなければならぬ。恐がつて震へてゐる人には決して家庭はよくなならない。手が半分にならうが、足が跛者にならうが、最後迄一緒に辛抱するといふのでなければ、眞の戀愛ではない。魂と魂が結ぶのは神の力による。神聖なる神の力により結ばれる時に眞の戀愛がある。

日本の國では随分離縁が多い。明治十六年から大正の初年には、千人に對し四百人位離縁したものである。明治十九年には四百三十五人あつた。十人に對し四人三分五厘まで離縁する。それは人間が結婚したのでなく、家が結婚したのである。それが女子教育が高くなつて來たにつれ、十人の中の一人に減つた。九人迄はいゝが、一人は里歸する。といふのは、日本には宗教が徹底してゐないからである。宗教は宗教で、結婚は結婚だから悪い。家庭に宗教があり、結婚に宗教がなければならぬ。日露戰爭當時は減つてゐるが、最近はまだ少し上つて來た。斯様に一つの家庭を作る場合に、宗教がなければいゝ家庭は出來ない。宗教なんか要らないやうであるが、神に乗移られてイエスの精神が這入つて來ないと、家はうまく治まらない。

神による家庭の聖化

親子の間でも宗教がなければなかくうまく行かない。單に肉體上の關係なら、人間はだん／＼老衰し、醜くなり、技量は衰へるし、偏屈になつて頑固になる。そして老人は道德的に云ふなら保守的である。そこで、老人と子の間に衝突が起る。その場合に老人を尊敬しなければならぬ。神はどんな詰らぬ者でも救ふ。神は救の神だから、その譯の解らぬもの、偏屈のもの、頑固な者をも救ふて下さるといふ心でゐなければ駄目だ。そして他人の親迄親切するのが眞の孝行である。自分の親だけでもう澤山ですといふやうなのは眞の孝行とは云へない。

東京の震災當時、八百人の孤兒が出たが、四人だけ残つて、あとはみな引取手があつた。處分に困つたのは老人の六十五歳以上の迷子が二千人ゐたことである。之を誰も引受けて世話をしようといふ人がなかつた。おばあさんやお爺さんを貰ふのは、まるで棺桶を貰ふやうに思つて嫌はれる。當時震災救護打合會と云ふのがあつたが、一番困つたこの六十五以上の老人を、東京と横濱から鶴見に集めて收容したのである。宮内省はこの養老院の爲に、百五十萬圓の御下賜金を下さつた。或大臣の如きは借金してゐても宴會をしてゐるが、宮内省は毎年老人の爲に補助してゐられる。他人の老人の爲にも世話するのを親切といふので、この眞の孝行は神の氣持が這入つて來なければ出

来ない。の欲し。神が解らなければ家庭は圓滿に行かない。私の親類で何十萬圓の財産のある人間が、自分の息子に訴へたり、子が親を訴へてゐることを知つてゐる。傳統的な宗教はあるが、生きた實現性の宗教がない。だから耐久性のある實行的な宗教でなければ、日本の家庭も社會もよくなると思ふ。況んや主従關係がさうである。「うちの主人は擄取してゐるな、首が飛ばない程度にやむ遣はし」と思はないで、忠實に仕へて送ることである。悪いことはどしく忠告すれば善いのだ。八百五十九は悪いとは悪いことである。

愛による社會單位

眞の宗教は力を持つてゐる。その實現性があつて初めて社會が出来る。その最も模範的なものがデンマークである。デンマークでは金が要らない。金を持たなくても、實物が出る。旅行も出来る。金は便宜上持つてゐる。デンマークは暗い國である。あまり北によつてゐる爲に五月までは日に太陽が長時間しか出ない。然しデンマークは協同組合が發達してゐるから秩序整然としてゐる。組合は愛の組織である。日本には信用組合が六百からあるが、多く駄目である。それは愛がないからである。信用とは人格を信するのをいふが、日本では金のみを

信用してゐる。だから日本の信用組合は信用出来ない。デンマークにはマルチンルーテルの宗教が残つてゐるから、出荷組合も、販賣組合も、利用組合も成功してゐる。そして信用組合中央會がコッペンハーゲンにある。支部から中央會に來た人間が、コッペンハーゲンに泊るとする。宿料が五圓だとすると、ホテルに傳票を書いたらいゝのである。私は之を見て吃驚した。嘘を付く人間がないから出来るのである。中央會に廻された宿賃の傳票は凡て帳簿の上で差引いてゐるから金などには要らない。差引勘定は信用組合銀行をやつてゐるから心配がない。欲しいものは傳票で買つたらいい。即ち、助け合ひがあり、愛があるからこんな事が出来るが、日本では自分の金のない部分迄書いてしまふ。デンマークの斯ういつた愛の運動が、世界一の貧乏國から、世界一の金持國にしたのである。

日本では今頃手織機を織つてゐる處はないが、デンマークでは普通の紡績會社は色糸六種類以下しか織れないが、七色位のものを手で織つてゐる。私はその見本を持つて歸つて、桐生の高等工業のある教師に見せた處が、これは織れないと云つて吃驚してゐられた。デンマークでは宗教と祈りがちやんと調和してゐる。農業と祈りが調和し、商業と祈り、工業と祈り、労働と祈りが調和してゐる。だから暴力的共産主義が入れない。けれど日本は、工場の隅に稻荷さんの祠があるきりである。働いてゐる時も、食つてゐる時も、家庭に、夫婦間に、親子に、主従關係に、どんな處でも凡ゆるもの

に宗教生活を送るのでなければならぬ。

凡ゆる萬物の中に現れ給ふ萬物の神、一萬物の上に在りて、内に在し、表現し給ふ神、一宇宙のたゞ一つの神を拜まなければならぬ。だから、労働の中に働いてゐる神を見なければならぬ。我々は、働いてゐるこの神を信じ、このイエスの神を信じて、それを實現して行くのでなければならぬ。

父なる神様、

この産業の日本に於て、宗教の實現につき、瞑想させて下さいましてありがとうございます。我々は家庭に於て、工場に於て、炭坑内に於て、神に守られ、神の心を實現しようとして居ります。であるに拘らず、いつも不安な亂れ勝ちな氣持で居ります。どうか我々を捕へて、理想の社會を作ること許して下さい。店先に、學校に、また教壇に立つとき、臺所で働く時、機械場に立つ時に、あなたの姿を胸にうつし、人を愛し、人を勞る生活を神により營まして下さい。眞剣なる同志の上に、新しい神の幻を示し、實現なし得る神の力を示して下さい。聖靈の神が何處にも在りて我々を導き、労働してゐる時も、休む時も、宗教を實現せしめて下さい。キリストイエスによりて祈ります。アーメン

第十章 神と新社會

まづ神の國と神の義を求めよ、然らばこれらの物は汝らに加へらるべし。(新約聖書マタイ傳六章三三節)

神より見たる歴史

「社會の歴史は單に物質の歴史である。そこには別に自由もなく、理想もなく、深い意識もない。たゞその時代の境遇の變化や、機械の發明、労働の傾向だけにより變つて行くのだ」といふ見方、即ちマルクスの唯物史觀のやうなものがある。それに反し、もう一つの見方は、歴史の背後には何か深いもの即ち神がある。人間のながい二十五萬年の生活を通し、否歴史が出來てから六千年に亘る人類の生活を通し、そこに我々はありありと神の御指導を發見するといふ見方がある。そして私は、歴史にも明かに神の御手が動いてゐることを信じ、神なくして歴史はないと斷言し得る。斯う信ずるのにも理由がある。

私は、この不思議な日本の歴史を考へても、何だか唯單に人間の境遇や、機械の發明、經濟の變動だけで、この國が出來てゐるとは考へられない。何か不思議なる人間以上の力がこの島々に作用して、日本人を通して働いてゐることを信ずる。私は、それを唯に日本だけでなく、世界の歴史に

於ても、その奥に、或ひは人間の壽命、人種、人種の中にある活力、道徳、宗教等と云つたものを通し、何だか歴史の背後に、單なる境遇ではない、機械器具の發明だけでない、經濟の變動だけではない、神の指先が働いてゐることを信するるのである。

不思議なる民族

そしてそれを最もはつきり意識したのは、小さい國ではあるが、不思議なる過去を持つてゐるユダヤ人である。

ユダヤ人はもともとペルシヤ灣のほとりのメソポタミヤから出て來た。そしてユーフラテ川を遡つて殖民し、バダンアラムの地方に暫時居たが、食へなくなつてから川を渡り、地中海の東南隅の沙漠に近い處に來た。然し其處でも食へなくて、エジプトの沙漠地方、ナイル川の川下のデルタ地方のゴセンといふ、氣候の悪い、じめじめした地に移つた。其處で彼等は四百年間の中に人口が約二百五十萬人になり、人口が増加すると共に、殆ど奴隸の狀態になり、遂に彼等は、いろいろな建築をする度に、エジプト皇帝の壓制を受けるに至つた。彼等は、藁なくして煉瓦を造らされ、約四百年の間に散々な目に遇はされた。そして終には産兒制限を命ぜられ、女は美しいから奴隸に連れて來ても、妾にせられて生かされてゐたが、男子は大きくならない中に川へ流して殺された。

その暴虐に耐えきれないでもがいてゐる時に、彼等の指導者としてモーセが出て來た。モーセも一度川へ棄てられたのであつたが、不思議なる攝理により救ひ出された。モーセとは即ち引出されたといふ意味である。このモーセが沙漠へ神を拜みに行くといふ口實を作つて、約二百五十萬人を連れてこの地を逃げ出したのである。之を知つたエジプト王は「それ事だ、二百五十萬の奴隸に逃げ出された日にや、仕事が出来ない」と云ふ譯で、騎兵の大軍を遣して引戻さうとした。捕へられさうになつた時に、彼等は一目散に沙漠に逃げ込んだ。彼等には、兵器もなく、武器もなく、彈丸もなく、兵糧といふものもなく、たゞ逃げる一方だつた。そして四十年に亘る長い間、或時は蛇に咬まれ、或時は敵に逐はれ、また或時は食物がなくなつて沙漠の真中で、うろ／＼した。この話を續けて居れば限りがないが、この記事を書いてあるのが舊約聖書である。この二百五十萬の無力な奴隸が、全然無抵抗で沙漠に在つて苦勞したことが現在残つてゐる。

この血の出るやうな忍耐の記録によつて、神がある、あはれな人間をみな殺しにしない、道徳を守るなら決して絶滅の運命に遭はないといふことが判つた。今日我々が聖書を讀む理由がそこにある。従つて、ユダヤの憲法とも云ふべき歴史に面白い序文がある。それこそ實に世界に類のない序文である。即ち汝らはもと奴隸なりしが、汝らの神、在りて在るものは汝らを奴隸の狀態より救ふたから、汝らは之を記憶してかく守るべしと云ふ意味のものである。(舊約聖書出埃及記第二十章二節)

世界に民族多しと雖も、自分等が曾て奴隷であつたことを自慢してゐる民族が何處にあらうか。我々は神に選ばれたものである。我々は優等民族である。我々は天孫民族である。天から降りて来た民族であると云つて威張りたがるのが普通である。

ユダヤ人は奴隷であつた、食ふものもなく、力のないものであつたが、神は見棄てはしなかつた。そこに、イギリス人、獨逸人が光榮の歴史を持ちながら、この舊約聖書を國民の歴史と共に教へてゐる理由がある。そしてこの四十年間うろ／＼した民族が、ヨルダン川の流域——四國より少し狭い位の地に落着いた。しかし人口は少く、地味は瘦せて居り、平地には多くの民族が住んでゐた。彼等は文化に於て劣つてゐた。彼等は千年も其處に住んでゐたが、エジプトに迫められてゐるか、アツシリア、バビロンに攻められてゐるか、國は散々に攻められ続けに攻められた。その結果彼等はついに内間割れして、だん／＼に衰へた。その中であつて彼等はまた宗教を發見した。そして彼等は斯ういふ事實を見付けた。人類の存在する理由は決して單なる境遇だけの問題ではない、精神がしつかりしてゐるなれば國は亡びない。一つの民族の背後には必ず神が見守つてゐる。國が亡びるのは、その國の道德が亂れてゐるからだ。道德状態が悪ければ、國は内側から破滅するものだといふ事實である。

神への反逆と亡國

ユダヤが正に亡びんとする時に、先に見える先覺者が繰返し繰返しユダヤ人に忠告したけれど彼等はきゝ容れなかつた。例へば、ユダヤ人は目に見える神を拜むからよくないと云ふやうなことを忠告したのである。ユダヤでは牛を拜む。或ひはバビロンでは天の星を拜んでゐるから、我々も星を拜まうといふ風に、いろ／＼迷つて、曾て奴隷の状態から救ひ給ふた天地の創造主に對する信仰を失つてしまつた。彼等は天の星や、太陽や、月や、牛を拜んだり、ひどいになると、魔物を拜んだり、生殖器を拜んだり、しまひにはアシタロテといふ戀神を拜むやうになり、御殿の中に淫賣婦を置き、或ひは男娼を圍つて、遂にそれにより國が滅亡する原因となつたのである。

それを許したマナセ王は、預言者に、マナセの罪は三四代に祟つて、この國は滅亡すると云はれて、とう／＼滅亡してしまつた。そしてこの國の亡びたことは種々な教訓を我々に殘してゐる。我々が舊約を學ぶことによつて、一つの國が出来て、その國が亡びる完全なる歴史を見せつけられた。あれ程完全なる興亡史は世界にない。我々は之を一つの教科書として讀む。

その後、彼等の國は、幸にアツシリア、バビロンから解放せられ、もう一度歸つて來た。ところが、ギリシヤの王、アレキサンダー大王が、紀元前三百三十年頃にこの國を征服してしまつた。ア

レキサンダ大王はバビロンで年若くして死んだが、大王の國はその後四つに分裂した。
 小亞細亞の大將であつたエビファネス家がシリア方面を治め、そしてまた厭な厭な偶像教をユダヤに輸入した。之に反抗してユダヤ人はまた小さい國を起した。しかしまたローマに捕へられた。
 シユリヤス・シトザの甥オースタス・シーザーが國を治めてゐた時、今日世界に於る八億の人間の中心となつてゐるイエスが、處もあらうに馬小舎で生れ、磔刑にされ、場所もあらうに、人の墓を借りて葬むられた。そのイエスは、三十歳迄大工をしてゐた。三十の時大工の職を棄て、國民全體に悔改めを宣傳してゐた先輩ヨハネを頼り、ヨルダンの谷に下つた。一方ローマ皇帝に反逆する國民がユダヤ人の中に、次から次へ起つた。然しイエスは、革命運動をするより、良心運動の方が必要であるとして、その革命に参加しなかつた。(新約聖書ヨハネ傳六章十五節)

イエスの先輩ヨハネは、當時、ユダヤの國の小さい大名であつたヘロデ、アンチパスが自分の弟の妻君を横取りした、姦通したと、人の前で悪口を云つたといふ咎で、不敬罪に問はれて監獄におち込まれた。それからイエスの運動が始まつたのである。イエスはユダヤの北方ガリラヤの故郷に歸り、その神の國の宣傳をし始めた。

轉へ

イエスと神の國運動

イエスは何を云つたかと云へば、「親切をしなさいよ、二枚の着物を持つてゐる者は一枚も持たない人に上げなさいよ、御互ひに改心して、地上の事を考へる前に、まづ神を中心とした生活を始めませう。人を殺すことが悪いのでなく憎しみが悪いんです。姦通が悪いのでなく、情慾が我々の魂にこびり付いてゐる間、姦通は必然に起るから、まづ靈魂から改めなければならぬ。泥棒が悪いと云ふより、まづ貪慾な魂を殺さう。嘘のない信用の出来る社會を作りませう。食ひの氣持が悪いのでない、まづ誰も金儲けを中心としない社會を作らう。」さう云つた前人が會て主張しなかつた、より内觀的な、より高い、神のやうにならうといふ高い道徳をイエスは説いて廻られた。

時代は實に悪かつた。ローマは恰度この反對であつた。殺人、姦通、泥棒、嘘付、貪慾の鐘詰時代であつた。この時代を詳しく歴史に残してゐる、有名な歴史家タシタスは、「この時代に於て、敵が我々を殺さなければ、友人が我々を殺す」と書いてゐる。「ヨーロッパ道徳史」を書いたレッキーは、この時代を道徳的發狂時代と云つた。その道徳的發狂時代に、下層階級、勞働階級であるこの奴隸民族の間から、高い朗かな調子で、新道徳、新良心運動が始められたのである。

初めはガリラヤ湖畔に居た漁師の間だけにその意見が傳はつた。勿論、彼等は、大工イエスの言

をたゞ有難い言葉である、さうあればよいといったが、別に實行もせず、唯、さうあればいゝなア」と思つてゐるだけであつた。然し彼等は、イエスの爲す業、イエスの云ふことより、病人を癒し、死んだ人間を生き返らした事に目くらんで来て、この人を革命の指導者とすればいゝと云ふことで、イエスに従いて行つたらしい。そして大名のヘロデに反逆して革命してやらうと云つてイエスに従いて来た人は約五千人もあつた。彼等は三日間何も食はずにイエスについて来た。しかしイエスはそれ等の人々を避け、一晩山に這入つて祈り決心をせられた。(新約聖書マカ傳第六章三四―四四節)そして、カペナウムの教會堂に集まつてゐた群衆に向ひ、私は革命はしないときつぱり断られた。(新約聖書ヨハネ傳六章二十二節以下)すると五千人の者は一人去り、二人して、その中十二人のイエスの直弟子だけが残つた。然し、その弟子の間にさへ、或ひは時期がまだ早いのかも知れない、近い將來にイエスは旗上げするのだらうと思つて従いてゐた者もあつた。

それよりイエスは一度旅に出掛け、そして外國へ行かれた。そしてフィニキヤ地方を巡回して歸つて來られたが、革命黨の人はイエスがまた歸つて來たぞと云ふ譯で、集まつて來た者が四千人あつた。(新約聖書マカ傳八章十節)

福音の歴史

イエスはまた彼等を外して、もう一度デカポリスの方に引上げた。そしてこの二度目の外國旅行の時、自ら覺悟を決め、徹底したる自分の行動を示し、革命しない人間に行くべき永遠の犠牲の道を教へてやらうと、弟子達にはつきり、私は十字架にかけられるのだが、お前達は私について來られるかと云つて、自分の行くべき道をきめ、エルサレムへと突進されたのである。そしてその當時の官憲であり、而も墮落してゐる宗教家と正面衝突せられた。彼等は世界の神を拜む時も、むつかしい制度を設け、人民の頭を刎ねてゐた。イエスは、鞭をもつて、それらの宗教の商賣人を神殿から叩き出されたことがあつた。(新約聖書ヨハネ傳二章十五節)その原因で、イエスが居れば我々は飯が食へなくなるからと云ふので、(一)安寧秩序を亂すもの、(二)國法を亂すもの、(三)ロマの皇帝に謀反するものなりと云ふ三つの理由で殺されたのである。イエスは三十三歳の多分四月九日午前九時に十字架にかゝり、午後三時に息絶え給ふた。(ロバートソン説)

けれどイエスのこの短い生涯を歴史は無意味に葬らなかつた。不思議にもイエスの歩んだ道、暴力を否定し、革命を断つたイエスの愛と犠牲で社會を改造して行かう、と云つた運動は、ロマの皇帝の下に苦しめられ押さへ付けられた奴隷のやうな、地中海沿岸の勤勞階級の間に擴まつたのであ

る。そしてこの無抵抗のクリスチャンは、四十二代の王、或は首斬られ、或は手足を縛られ、松脂を頭の上からかけられ、火を點けてざり／＼焼かれた。——大正十二年の關東の大震災の當時、東京本所の被服廠で四萬五千の人が焼け死んだ。二千人位水溜の中にゐた人は助かつた。東京醫科大學の解剖學の教授でクリスチャンの熱心な人が私に云はれた。「人間の身體はよく燃えますよ、人間の身體に火が點いたら消えない、熱くはあるし苦しいから消さうと思つても消えない、人間の脂はよく燃えるものですよ」と云はれてゐたが、さういつた理由であつたか、人間の身體を蠟燭代用に用ひて、身體に火を點けられて放つて置かれた。

愛と忍耐との勝利

然し斯ういふ目に遭つたクリスチャンは、一度だつて謀反せず、とう／＼辛抱して押し通した。イタリーのローマに行くと、カタコムと云ふのがある。地下室の下に穴を掘り、九州直方附近の炭坑のやうに、蜘蛛の巣の如く道をつけてある。その中に死骸だけで四百萬人這入つてゐた。もし彼等が太陽の見える處でイエスを中心とする禮拜を守ると、彼等はすば／＼と惜しげもなく焚松同様にせられ、大きな木に結び付けられて兩方から焼くと云つたやうな迫害に遭つたが、この愛と辛抱と希望の宗教は棄てない、と云つて、ついにイエスが死んだ後三百年の間彼等は辛抱したのである。

そして竟に紀元三百十五年、コンスタンチヌス大帝が、「穴から出てこい」と云ふキリスト教の公許が出るまで、ローマだけでも四百萬人の死骸を穴に葬つたのである。實に悲痛なもので、この四百哩もトンネルを掘り、四百萬人を葬つた長い間の辛抱は、一體何によつてゐるか。その歴史上の事實は、所謂マルクス流の唯物史觀で解釋出来るか。いや、それは出来るものではない。人間の魂の中に、單に境遇や、單に機械や、經濟上の變動だけでわからない、靈魂の中にある大きな運動がある證據である。ローマ皇帝が内閣喧嘩してゐる時、紀元四百年に獨逸人が攻込んで征服してしまつた。そしていまだにヨーロッパはばらばらである。けれどイエスの宗教は、ヨーロッパの隅々まで浸入して行つた。斯ういつたからとて、私は今日、ヨーロッパに完全なるキリスト教があるとは云はない。

歴史は唯物的でない

歴史は單に唯物的なものではなく、目に見えぬ不思議な力が働いてゐることを私は知つてゐる。今日漸くこのばら／＼になつてゐる國々を一つにし、國際的な裁判を行はうとし、不戰條約を實現し、世界の經濟状態を統一して、國々が喧嘩をしないでいゝといふ、アメリカの大統領ウヰルソンの翹望がかすかに見え出して來た。これを我々は唯單に、人間だけの智慧で解決出来ると思つて

るようか。そこに何か不思議な見えない力が、上に引上げてゐなければならぬ。人類の進歩、今日の歴史的發展、專制政體から立憲的になつたこの普通選挙の時代が、單に經濟上の運動によつたのだらうか。それは靈魂の内側の不思議なる發展の力により出來たものではなからうか。斯ういふ事實を考へて、我々は、歴史の背後に神がある。凡ての羅針盤の針が北に向くと同様に、凡ての人間の魂が、意識するかしないかは別であるが、みなある方向に向つてゐる、即ち宇宙の心に向つてゐるのである。

人間は境遇の外に靈魂に就き考へ、更に自由につき考へ、更に神につき考へなくてはならぬ。單に境遇だけでない、單に機械だけでない、單に金だけでない。機械を自由に取扱ひ、境遇を前にして前へ突進しようといふ靈魂力を用ふのを社會人即ち人間と云ふのである。この靈魂を蹂躪せられた時に、人間としての値打がない。

ユダヤ人が縛られた時、彼等は靈魂だけを發見した。「板垣死すとも自由は死せず」即ち凡ての社會運動は自由への運動である。單なるパンだけの運動とはちがふ。勿論生活に對する要求はあるけれども、生活の安定が與へられるなら、より高き自由へ、政治の自由、教育の自由、移民の自由、結婚の自由、戀愛の自由、經濟上の自由、移動の自由を要求し、更に、信仰の自由、思想の自由、思想の發表の自由、印刷の自由、結社の自由、團結の自由を獲得したいと云ふのが、靈魂を要求す

る理由で、たゞ唯物的に社會を導くことが出來ないといふのは、自由を要求するからである。それを、マルクスが云ふやうに、人間は機械の附録だ、物質の出來損ひだといふやうな説には、私は賛成しがたいのである。

神と自由と文化

更に自由の道は、より高い自在の道を指してゐる。自由自在になりたのである。自在と神とは同じである。無より有を創造し、邪曲を正しくし、醜を美にうつし、惡を善にし、誤謬を眞に變へる力を自在といふ。自在即ち神である。眞の人間の運動は神になりたいたいといふ運動である。之はみんな人間が持つてゐるものである。そしてそれは一人だけでなく、ともに協力してやつて行かうといふのが愛の運動である。即ち社會運動は一つの愛の運動である。可愛がり合ひの運動である。「君にも權利をやるから僕にもくれ、共存共榮の爲に盡さう」といふ運動である。

一萬噸の船を動かすのに一人では自由にならない。「お前は船長になれ、俺は水夫にならう」と云つて、或者は機關手になり、あるものは舵をとるといふ風になつて、はじめに玄海灘をも乗切ることが出来る。これは分業による協力である。分業は助け合ひをし、可愛がりをし合ひ、譲り合ひ、親切をし合ひ、互ひに仲好くしなければ出來るものではない。革命だ、暴力だ、と云つて、無茶苦

茶や出鱈目を云つては出来ない。で、我々が宗教的基礎を置かなければ善い社會を作ることが出来ない。云ふのは其處である。

或人は考へるだらう。我々は宗教に飽いた。宗教は喧嘩ばかりしてゐると。しかし喧嘩を教へる宗教は喧嘩するが、助合ひ、尊敬し合ひ、寛容を教へる宗教には少しも喧嘩はない。我々はこの愛を通して完全に社會は進歩し得ると思ふ。

一體社會といふものは愛を根柢とするものである。それでも猶、ある一派の人々には、今日唯物論者と云はれてゐる人々否、人間は、その時代のものを作る形で變るのだ、と主張する。私は之に賛成しがたい。今日迄社會の進歩は單なる境遇だけでない、それは物的境遇に依らない。境遇がいくら善くとも、その中に置かれてゐる人間が悪ければ進歩はない。その證據はアメリカである。アメリカは富んでゐるが、もと／＼アメリカにはアメリカ・インデアンがゐた。三百年前には、この土人が何千萬人となくゐた。けれど土人の連中は、この廣いアメリカをよう開拓しなかつた。そこへ信仰を持つた所謂清教徒といふ一行が、ヨーロッパから二百噸級の小さいメイフラワーといふ船に乗つて逃げて来て、ブリマスといふ港に着いた。その當時饑饉で食へるものもなく、野雞を食べ、野蜜やゲースベリーのやうなものを放いて食べて、随分苦しい生活と戦つた。さうした苦勞を通し、彼等は今日のアメリカを築き上げたのである。今でもアメリカは十一月の第三木曜日にはこの

事を記念して、その日には、野の七面鳥を食べ、野莓を食べる。そして三百年前の苦しかつた経験を記念してゐる。信仰の厚い、純潔な清教徒が、アメリカを發見し、いろ／＼なものを發明し、經營して、全大陸を今日の文明國としたのである。自由への憧憬の精神と、宗教的信仰が彼等を作つたのである。

逆境と文化

物件境遇から云へば熱帯地方の人は相當に恵まれてゐる。彼等は腰の周圍に布を巻きさへすれば、家は要らず、着物は要らず、食物には困らない。ちよつと軒先を見れば、バナ、の房がぶら下つてゐる。大きいになると一本のバナ、が三尺位あるから、それを一本食へると一食分充分ある。日本に来るのは七、八寸のものであるが、それでも三本も食へれば一食分ある。バナ、一本は優に日本人の茶碗一杯の澱粉がある。アフリカのコンゴ地方へ行くと、其處の土人は、朝もバナ、晝もバナ、晩もバナ、で、毎日バナ、バナ、バナ、で暮してゐる。私の家に暫く泊つてゐたハンガリアの青年は、バナ、を買つて来ては御飯の代りに食べてゐた。バナ、を三本食へれば一食分はある。我々も、「なあに、一日でもバナ、を食つてやれる、熱帯地方でも何處でも行かう。禪一筋、バナ、三本あれば死なない」といふ覺悟で南洋に行けば食つて行けるのである。

それが少し北に來ると、寒いだの、暑いだの、着物が要るだのと云ひ出して働いてはゐられなくなる。もつと北に來て北緯五十度位の處になると、雪が降るために、ストーヴをたけ、ポイラーをたけ、やれ、電車だ、飛行機だ、電話だ、ラヂオだといふ譯で、必要ないろ／＼な發明をしてくる。かういつた靈魂の力により文明が進んだ方が多い。我々は今日、この餘り我々が希望してもゐない時代に生れて來たが、機械は人間が發明したのだから、人間の申合せでどうにでもなる。だから私は、マルクスの唯物主義に賛成しがたいことが多い。

活力が朝顔の花のやうに咲くか、それともバナ、三本で満足するか。電車を發明して走るか、俺は、小成に甘んずるといふのか、この間の差は實に大變なものである。之は士氣とか、精氣とか、元氣とか云ふべき宗教的士氣の差による。その元氣の溢れた日本にゐて、やれ、滿洲は零下三十五度だ、滿洲は寒いからやりきれないとか、シンガポールへ行けば、「暑い、平均温度八十度の處に居られるかい」と云つては内地に歸つて來る。そして、「内地で結構でございます、やつぱり内地は一番いゝです」と云つて疎んでしまつてゐる。日本の婦人は殊に美しい傘をさして、高い下駄を履いてなよ／＼と歩いて満足してゐる。バナ、三本の生活とその婦人はあまり變りない。私は如何なる困難に遭遇してもやる、ブラジルへ行つても滿洲へ行つても、のたれ死にしてもやらうといふ氣は、宗教がなければ持てぬ。我々はその精神で日本を導かうと云ふのである。

俺は死んだつもりでやると云ふ氣なら必ずやれる。死んだつもりでやれば呑氣なものだ。私は死んだ者なのだ、あとのものはみな儲け物だ、と思へば樂なものである。借金取りが來れば、私は死んだものだ、幽霊に借金を取りに來た處で仕方がない。何でも取れるものがあつたら持つて行つて貰ふし、無ければ取るわけに行かない。ところが日本の法律には、衣食住に必要なものは取るべからずといふ法律がある。幽霊でも食へるやうにはしてある。あとは儲け物である。このつもりでやり直すなら、どんな事でも辛抱出來ないことはない。

神と貧乏と無産者

で、私は、今日の社會問題である貧乏について考へてみよう。そこに大きな問題が二つある。貧乏と無産の問題である。無産者は法によつてなくなる可能性があるが、貧乏人はなか／＼なくなるものではない。

貧乏の原因は、天變地變で、二百十日よ來ると云つても、二百十日は時期が來れば遠慮なくやつて來る。地震を我々は止めることが出來ない。洪水も饑饉も我々の力でどうにもならない。ゴビの沙漠を防止する譯にゆかぬ。けれどこの天災は、人間の放蕩費—酒飲む率に比べれば僅かなものである。

日本の災害累年比較統計を見るとよく判る。明治四十三年の水害は八千五百萬圓で、最近は治水

災害累年比較統計

年次	水害損害額 千円	潮災損害額 千円	暴風雨損害額 千円	火災損害額 千円
35	29,130	568	18,829	
36	22,259	69	1,134	
37	17,932	212	175	
38	21,473	80	303	
39	20,647	190	117	
40	62,490	453	1,000	
41	5,617	132	41,919	
42	4,684	68	714	
43	85,073	26	475	
44	27,822	1,823	3,315	
1	35,528	806	25,897	
2	47,706	1,588	5,419	31,159
3	28,744	8,644	4,096	16,154
4	8,200	391	12,070	16,267
5	7,460	928	1,992	17,465
6	20,711	10,963	28,459	37,468
7	72,793	4,912	20,654	33,941
8	37,540	1,238	6,133	81,408
9	53,147	27	3,391	54,866
10	52,650	127	31,868	77,226
11	34,529	140	3,724	58,324
12	30,625	2,177	3,875	10,585,010
合計	726,760	35,562	215,559	11,009,288

工事の爲すつと減つてゐるが、明治四十年には、六千二百萬圓、大正四年に八百萬圓、になつてゐ

るが、ごく最近には三千萬（大正十二年）から五百萬圓見當である。海嘯が大正三年に八百萬圓、大正六年に一千萬圓、暴風雨の損害が明治四十一年に四千百圓、大正十年に三千萬圓を越えてゐるが、大正十二年には三百萬圓になつてゐる。火事の爲には大震災の年は別として八千萬圓から五千萬圓の損害になつてゐる。（災害累年比較統計表参照）だからこの全部を合せても僅かなものである。一年間の煙草を始末すれば、洪水も火事も暴風雨も何もかも一緒にやつて來ても大丈夫である。

人間的災厄と人間的責任

しかし貧乏の原因に病氣がある。病氣は日本に於る第一の敵である。日本では一年間に約二百萬人生れるが、その中百二十萬人は死んでしまふ。差し引き約八十萬人餘る。この死亡百二十萬人の中何が最も人を殺すかと云へば結核が一番多い。その中肺病が約七萬八千人を殺す。そして誰が肺病にかゝるか云ふと若い青年の連中である。日本では千人葬式する間に一體幾つの子が多く死ぬかと云へば、一歳から満四歳までの子で、千人につき三八一人までは數へ五つ迄の子が死んでしまふ。實に不經濟である。母が折角苦しんで生んだのに、漸く五つになるやならずで死ぬ位なら、苦勞して生まなかつた方がいゝ。その次は五歳から十歳まで、これは少く、僅か千人中二十六人位である。次に十歳から十五歳までが二十人位。十五歳から二十歳の頃は倍になつてゐる。その次は

二十歳から二十五歳まで、一番やんちゃな時代には元気がよくて、決して首吊るなどとは云はぬ。十五歳の女學校三年生の頃になると、すぐ悲觀したと云ひたがる。男の子であれば、食ふものも食はずに勉強するから、血を啜りて死ぬやうになる。それが大學を卒業して二十五位からになると

(大正十四年度)

死亡者年齢
(五歳階級別)

年齢	千分比
0-4	381.1
5-9	26.4
10-14	20.0
15-19	41.5
20-24	41.3
25-29	31.5
30-34	25.7
35-39	26.4
40-44	28.7
45-49	32.6
50-54	34.9
55-59	41.6
60-64	46.7
65-69	59.1
70-74	62.4
75-79	53.8
80-84	31.8
85-89	11.1
90-94	3.1
95以上	0.4

『日本帝國統計年鑑』(内閣統計局)による

氣樂に自分で食つて行けるから、死ぬ率が減る。そして結婚して、子供が生れる。人生は愉快だから死なない。さうしてゐる中にだん／＼年をとつて苦勞が殖えて来ると死にたくなる。そして七十歳から七十五歳を過ぎると、あとは死ぬと云つても死なない程丈夫になる。一番可哀相なのは青年時代である。(死亡者年齢統計参照)

獨逸の青年は死亡率に於て日本の七割少い。獨逸で十人死ぬなら、日本では十七人死んでゐる。若き青年は自重しなければならぬ。

貧民窟では殆ど三割から六割まで病氣である。病氣が原因で貧乏してゐる。だから病氣がなくならなければ貧乏は減らない。次に、梅毒、不具、老衰、死亡が貧乏の原因となる。不具者は日本に五十萬人位ある。そしてその中の二割の十萬人が盲目である。盲目にはよく二十歳前後の人がなる。多く原因は梅毒である。自分が梅毒にかゝつてない人でも、父が梅毒であつたり、祖父が梅毒であつたりすると、その子供に當り、孫にあたる者に禍が来る。流産も多く梅毒が原因である。醫者は賢いから「何度流産しましたか、あゝそうですか、注射しておきませう」といふ。斯ういつた譯で、自分は何も知らなくとも、日本には、梅毒や酒の禍を知らずに受けて居るものが随分多い。

ところが、三百年前までは、日本にも梅毒はなかつた。富士川游博士の「日本疾病史」といふ本を見ると面白い。梅毒は最初アメリカから地球を廻つて日本に來たものである。コロンパスがアメリカを發見した時、水夫たちがその土人から傳染し、彼等が歸つて、イタリアのゲノアに上陸して其處の女にうつした。それをイタリアの兵隊が貰つた。それからフランスの兵隊が戦争で勝つて凱旋して梅毒を貰つて歸り、フランスの國中へうつして廻つた。それをポルトガルの水夫がうつして貰つて、琉球にやつて來て琉球から日本に傳染したのである。そして日本の淋しい漁師が娼妓に接近して、遂にアメリカ直輸入の梅毒は、日本の村々へうつつて行つたのである。悪疫千里を走り、梅毒萬里を走つたのである。日本では昭和四年壯丁千人の中十一人が梅毒であり其後の、青年は百

に對し二人は不合格者である。女の人には悪い傾向はないが、男子が悪いから感染するのである。そして多くの貧乏人を製造してゐる。次に心理的原因であるが、白痴、低脳、發狂、變人などの原因で貧乏人になつてゐる者が澤山ある。之等の多くは、梅毒や酒或は遺傳の影響を帶てゐる。貧民窟へ行くことこれらのことがよく判る。

貧乏の道德的原因

道德的原因——犯罪者、博奕打、放蕩、浪費、醉酒も貧乏人を作る。ブリスといふ人は一割一分までは泥酔がその原因だと云つてゐる。日本では十五億圓の酒を飲んでゐる。つまり生糸や絹織物綿織物などを外國に賣つただけ飲んでゐる。(貿易統計参照)私は農民運動をしてゐるが、小作爭議をして小作料が二割下つたと云つては二割五分位飲んで、そして足りない足らないと云つてゐる。即ち幾ら共產主義時代が來ても、無茶酒を呑めば共產主義は二年とは續かないだらう。だから人間の素質を變へなければいゝ社會は出來ない。斯ういつたやうに貧乏人とは、他人に頼らなければならぬ人間をいふのである。

昭和二年度貿易統計

輸 出		輸 入	
生 絲	七四二、二六六	實綿、縲綿	六二四、六三〇
綿織物	三八三、八三五	鐵類(條竿板線管、鐵塊、鐵鑽、鐵釘)	一二九、六三四
絹織物	一三九、六一四	木 材	一〇三、七七二
綿織絲	三八、七九六	羊 毛	一〇一、六七七
陶磁器	三〇、四九一	油 粕	九八、九七九
メリヤス製品	二九、〇五八	米及粳	七八、九〇六
精 糖	二八、九一七	機械部分品	七八、六一二
石 炭	二五、五〇九	毛織物	七八、二一二
水産物	二〇、一四六	砂 糖	七五、八〇二
罐詰詰食物	一九、五一〇	小 麥	五三、九三〇
紙 類	一九、二六四	石 炭	三五、四八九
硝子同製品	一六、六三一	生ゴム	三四、三九九
其他	一九二、八七六	其他	二七五、三七六
(合 計)	一六八六、九一三	(合 計)	一七六九、四一八

我儘文明と無産者の出現

ところが無産者といふのは違ふ。天災にも遭はない、平穩である。病氣などした事がない、いつ

貧乏 無産

天災—地震、洪水、—平穩である

海嘯、火災、

生理的—病 氣—ヒチ／＼してゐる

不 具—兩手、兩足、目も耳も揃つてゐる

老 衰—元氣のある青年である

死 亡—生きてゐる

心理的—白痴—賢い

低 能—發明力もある

變 狂—正氣である

質—交際上手である

道德的—泥醉—禁酒會の會員である

放 蕩—近所の褒められ者である

浪 費—節儉家である

犯 罪—人を殺したることなどない、却つて助けてゐる

も達者である。片輪でない、何處も揃うてゐる。年はとつてゐない働き盛りである。また白痴でも低脳でもない、この人は賢くて發明もする。勿論發狂などしてゐない、正氣である。變人だと云はれたこともない、交際上手である、或ひは酒など一滴も飲んだことがない、禁酒の實行者である。

勿論遊廓などへ行つて浪費したことはない、人の物を盗んだこともなければ、殺したこともない。この人は儉約家で、人とは助け合ひ、近所で評判者の善人である。けれど矢張り金がなくて困つてゐる。之を無産者といふのである。

貧乏人の方はだん／＼減る傾向がある。しかし無産者の方は殖える傾向がある。之に四つの理由がある。四つの理由は所謂經濟の組織である。

第一は生活不安である。収入が不定で、物價が不定だから、生活が不安になる。第二は從屬性である。土地が他人のもの、家が他人のもの、仕事も他人のもの、着物が他人のもの、布團も他人のもの、夢までが他人のものである。私が神戸の貧民窟で貸布團屋から布團を借りて來た。布團には奇麗な瓢箪形の模様がついてゐる。人が「賀川さん、その布團に字が書いてありますよ」と云ふので、よく見ると、その瓢箪形の模様だと思つてゐたのは、實は小さい字であつた。何と書いてあるかと讀んでみると、「かしぶとんしちいれおことわり、かしぶとんしちいれおことわり」と書いてある。なる程と私は思った。けれど精巧な貧乏人は、布團の綿だけを抜いて質屋へ持つて行くのである。さういふ布團を被て寝てゐると、夢まで貸布團の夢を見てゐる。結局何もない、みんな他人のものである。それを無産者といふのである。第三には信用がない。信用がない爲に葬式さへ出せぬ。第四は失業してゐる。

之はどうして出来たかと云ふに、全く今日の社會組織が助け合ひを缺いてゐるからである。昔は助け合ひがあつた。講中もあり、輪中（岐阜縣大垣地方の如き）もあり、家族制度もあつた。が、今頃は町に住んでゐると、壁一つが隣との境で物も云はない。チンチン、カンカン、といふ鐘の音を聞いて初めて、「おや隣は人が死んだな」とわかる位である。で、孤立状態である。だから失業者だと云へば相手にもしてくれない。即ち、今日の社會は實社會である。全くの烏合の衆で社會になつてゐない。みんながばらばらである。助け合ひがある、共存共榮の社會が眞の社會である。今日の社會は共存共榮を缺いてゐる。だからそれにつけ込んで賢い奴は一つ儲けてやらう、或ひは相場師が濡れ手で粟を擱んでやらうといふやうになつて、さういふ者のみが、今日の社會を作つたのである。今日の時代はローマの道德的發狂時代と同じである。

即ち今日の時代は、經濟的に行つても、賣手と買手が纏つてゐない。賣手の方では鰭口をあけて待つてゐるが、買手の方は小口で、まあ便利のいゝ處へ買ひに行かうといふ。その買手がうまく店に遣入つたら儲けものである。今日は斯ういつた無組織の時代である。東京で云へば銀座通りのやうな處で、店屋が澤山並んでゐる。そして釣られて遣入つた時が儲けられた時である。だから今日の社會は太公望が魚を釣るやうなものである。まあ何でもいゝ、積んでおけば買手が来るだらうといふ。今日の制度程妙な制度はない。東京の大通りを歩いてみると、兩側はみな店屋である。買手

の方はみな二階座敷に間借りしてゐる。その間借りしてゐる人を相手にして商賣してゐる。そして同商賣があるから、同類相食む状態である。その中でも菓子屋が多い。店屋に坐つてゐる者は何もせず招き猫の役をしてゐる。招き猫は飯を食はないが、飯を食ふ番人を殖やしても仕方がない。デンマークでは約二千人に店屋が一軒位で間に合つてゐる。店の番人を生産的方面に廻せばいい、日本では表看板はいゝやうであるが、裏通りはみなちがつてゐる。最も激しいのは銀行である。日本は金もない癖に銀行ばかり多い。獨逸は銀行が五つ、英國は二十五で、出張所が一萬五千ある。ところが日本はといふと、約千三百ある。銀行が次から次に潰れるのはあたり前である。一九二七年春には四十日の間に二十七の銀行が潰れた。八億二千萬圓の資本を持つてゐる銀行が潰れてゐるのである。之を賣手と買手の間に組織をつけて置くならそんな心配はいらない。

明治三十三年に、日本にも産業組合が出来てゐるのに、それを作らずに、生産的に廻りもせず「儲けやがつて」と云つて、「我々は資本主義の文明を破壊しなければならぬ」と云つてゐる。そして矢張小賣店に買ひに行つてゐる。それが、組織をして組合を作つて居れば、ちゃんと買手も賣手も損をしない善い社會が出来るのである。今日の産業組合を考へない人が儲けられない爲には、組合を作つてもいゝと日本の法律に書いてある、それをやつても見ないで儲けられて不平を云ふも仕方がない。

ちやんと組織しないで革命をやるといふのは早まつてゐる。革命は眞の經濟運動には役に立たない。經濟を單に金だと思つてゐるのが間違である。

金と物質によらざる經濟

社會が出来るのは金とはちがふ。(一)社會が出来るのは力、即ち勞力である。それに人間の發明力即ち物を支配する力——(二)成長、即ち増加する勞力が加はつて、利子利潤が発生する。すると(三)職業が出来る。適不適が出来る。或ひは(四)法律が出来る。或ひは人間の(五)欲望即ち文化目的がきまる。斯ういふ五つのものが重なつて經濟が出来るのである。單なる物だけで經濟が出来ない。力、發明、職業、法則、欲望があつてこそ、物に價値が出来るのである。いくら物があつても、力と發明と、職業や法則、欲望がはつきりしてゐなければ社會はよくならない。しかし欲望があつても、酒を飲みたい、放蕩したいといふ汚い欲望ではいゝ社會は出来ぬ。この五つがきれいになり、人の爲になるものであれば、社會は丸く治まる。

それが今日では大體凡てが、金儲け即ち儲けたい益したいといふ貪欲、即ち我儘中心の貪欲が基礎になつてゐるから社會がうまく行かないのである。だから眞に善き社會を作らうと思へば、目先の近眼的な我儘な、他人の物まで自分のものだといふ考を棄てる必要がある。

共產主義にも二通りあつて、やるから持つて行けといふのと、お前のものは俺の物だといふ泥棒共產主義とがある。だから眞にいゝ社會を作らうとするには、助け合ひをして、世界のものはみな天地の神の子で、お互ひは兄弟であるといふ考をもつて初めて、よい社會が出来るのである。道徳の發達や人間の自覺なくして、「儲けやがたな、覺えて居れ、俺だつて勞働してゐるのだ」と云ふのでは喧嘩は絶えなす。

神を基礎とする新社會

今日の都會といふのは妙なもので、都會は村から食はして貰つてゐるのである。材木も都會にはない、米も村から出る。羊も町に住んでゐない、木綿も村から出て来るのである。そして村には病院もなければ、大學もない、いゝ學校は村にはなくて、みんな都會に集つてゐる。都會は文化的で心理的に出来てゐる。機械工場は人間の能力を便利にした處で、都會が矢張りさうである。村から都會に衣食住を持つて行つて支持してゐるのである。町は食へなくなると、そら革命だ、サーベルだと云ひ出すので、村の人は町へ持つて行つても取られるばかりだから持つて行かないと云ひ出す。そして村はこつそり作り出す。そして都會は四日もすれば、奇麗に食物はなくなる。

そして革命の後には必ず飢饉がある。佛國の革命の時、殺されたものが五萬人、飢饉の爲に死ん

だ者が三百五十萬人あつた。一九一七年のロシアの革命で約七千人が殺され、飢饉で千八百萬人が死ぬ恐れがあつた。革命で殺されるよりか、飢饉で死ぬ人間の數の方が必ず多いのである。だから、日本に革命が起つて饑饉が来たなら大變な事になる。その上に暴力革命が起れば大騒動である。だから、人間の欲望、人間の労働に對する觀念、人格に對する觀念から改造してかゝらねばならぬ。眞正の社會は出来るものでない。

欲望を整理する、と云つても酒や煙草は止めよと云つても止むものではない。これは宗教の力によらなければならぬ。印度では、ベルシヤ側の三千萬人を除いた、三億五千萬人の印度人は全部肉食主義である。労働をさすのに、サーベルを突き付けても能率は上るものではない。却つて能率は約三分の一以下に減る。その反對に自由にさしておくと能率が上つて来る。だから暴力革命は、欲望、労働、人格から改造し、良心の生れ變りをして、全體にお互ひにやらうといふ氣が起らなければ出来るものではない。英國は協同組合によりそれを完成せんとしてゐる。獨逸は最近、大きな鐵工場は一つに纏つた。獨逸は組織的な國民である。職業を四十二なら四十二にちやんと決めてやつてゐるから將棋の駒のやうにきちんきちん行く。日本は滅茶苦茶である。一方に於てはロシア流にやつてゐる。斯ういふ事は目醒めなければ出来ないことである。眞の社會運動は精神を根本にしなければ、社會を導き、よい國を作ることが出来ない。過激思想もあまり壓迫すると反つて悪化する

る傾向がある。思想は思想で征服しなければならぬ。向ふがマルクス主義思想の運動なら、こちらにも愛と犠牲でやつてゆかなければならぬ。英國は愛と助け合ひの宗教を持つてゐるから、「ははん、マルクスか、マルクスは云ふだけだ」と嗤つて相手にしないから、マルクス主義は侵入しないが、日本では愛と助け合ひをやらないから、マルクス主義が入つて来る餘地があつたのである。我々は、長い間に耐久性のある深い宗教的の運動を根柢にしなければならぬ。

デンマークでは助け合ひが發達し、産業組合を教へて、宗教を基礎にしてゐるから信用が出来、傳票一つで無錢旅行が出来る位である。斯ういふ社會を築かうとするには、互助といふことに基礎を置かなければ出来ぬ。英國は半分は不景氣であつても、片方に於て産業組合をやつてゐるから、不景氣が深酷でない。英國は戦争によつて日本の地震の幾十倍も大きい損害を受けたが平氣である。日本が震災で百十億圓の損害で困つたといふのは徹底しないからである。英國の如く總人口の半分が産業組合を作れば決して困らない。

我々は理想を持ち、神への憧憬を持ち、祈禱の精神と、無産者の爲に責任を持たなければならぬ。この他愛的精神、俺は十字架にかゝつても人の爲に喜んで苦勞するといふキリストの精神を持たねば、日本はよくならぬ。之を十字架の精神といふ。我々が我儘を云つては日本の國はよくならぬ。裸體一貫でやる氣でなければならぬ。何も食はずにやれと云ふのではない。此處數年間は犠牲獻身

で、日本の經濟が立て直る迄の精神を持つて元氣でやるといふ氣がなければならぬ。獨逸の青年のやうに、馬鈴薯を食べ、きたないきものを着てゐても、十萬人が心を合せて國のために祈るといふやうな、さういふ壯嚴な精神的運動が、一體日本の何處にあるだらうか。青年がみんなカフェなどへ行つてゐて、どうして國民の士氣が發揚出來ようか。獨逸のやうに天に向き直り、過去一切の罪咎を棄て、シベリアへでも滿洲へでも、何處にでも、空手空拳で行きます、神助け給へ、といふ精神がなければならぬ。それには剛健なる精神と、信仰が必要である。一人ぼつちの運動でなく、新しき社會の運動は、みんなの神の國運動でなければならぬ。

暴力と武力、また權力によらず、たゞ神の愛と、血の犠牲によらねばならぬことを教へ給ふ不思議なる神、その不思議なる御手で日本を救ひ、内も外も相通じ、上下の區別なく、村と都會を接近させて下さい。煩悶と苦惱に多くの人は弱つてゐます。中學生は苦しんで學び、大學を出てもその僅かしか就職が出來ないことと聞いてゐます。この時に我々に元氣を與へ、國民が助け合ひ、譲り合ひをして互ひに愛し合ひ、勢力で盡す者は勢力を以て仕へ、智慧ある者は智慧を提供し、ロシアや支那の眞似をせず、日本に元氣を與へて住みよい國にして下さい。文化を持ち、歴史あり、名譽ある日本に於て、神の國運動の精神を起して下さい。殊に青年の精氣を起し、日本の國を興して下さい。キリストイエスによつて祈ります。アーメン

神による新生終

昭和四年八月二十日印
昭和四年八月廿五日發
行 一万部

特別普及版
神による新生
不許複製
定價十錢 送料四錢

著者	賀川 豊彦
發行者	イーエヌ、ウワーン 下關市上田中町一三三二
印刷者	佐藤 爲吉 神戸市香妻通三丁目十七番屋敷
印刷所	中外印刷株式會社 神戸市香妻通三丁目十七番屋敷
發行所	下關市上田中町一三三二 福音書館
發賣所	東京市京橋區銀座四丁目 福音書館 東京市京橋區銀座四丁目 基督教書類會社

□ 賀川 豊彦 著作 目録

基督傳論争史	絶版	聖書の社會運動	宗教教育の本質	●五〇
貧民心理の研究	絶版	キリスト一代記	永遠の乳房 (詩集)	二・五〇
精神運動と社會運動	絶版	キリスト山上の垂訓	生存競争の哲學	二・〇〇
人間苦と人間建築	絶版	神による解放	友 情 (童話)	●六〇
主観經濟の原理	絶版	神の懐にあるもの	豫言者エレミヤ (童話)	●七〇
日曜學校教授法	絶版	神との對座	暗中叢語	二・三〇
労働者崇拜論	發賣禁止	神による信仰	死線を越えて (小説)	一・〇〇
涙の二分 (詩集)	絶版	生命宗教と生命藝術	太陽を射るもの (小説)	一・〇〇
イエスの日常生活	絶版	人間として見たる使徒パウロ	壁の聲きく時 (小説)	一・〇〇
地球を墳墓として	絶版	苦難に對する對度	南風に競ふもの (小説)	一・四〇
星より星への通路	絶版	残されたる刺	傾ける大地 (小説)	一・五〇
雷鳥の目醒むる前	絶版	福音書に現れたるイエスの姿	空中征服 (小説)	一・〇〇
イエスの宗教とその眞理	●三五	人類への宣言	聖淨と歡喜	●五〇
イエスの人類愛の内容	●三五	愛の科學	殉教の血を承繼ぐもの	●三〇
イエスの内部生活	二・〇〇	雲水廻路	偶像の支配するところ (小説)	一・〇〇
イエス傳の教へ方	●七〇	魂の彫刻	其他小册子數十種	一・〇〇

CONTENTS

Chapter I.	God and New Life.
Chapter II.	God and a Suffering World.
Chapter III.	God and Christ.
Chapter IV.	God and the Cross.
Chapter V.	God and the Soul.
Chapter VI.	God and Prayer.
Chapter VII.	God and the Bible.
Chapter VIII.	God and Conscience.
Chapter IX.	God and Daily Living.
Chapter X.	God and the New Social Order.